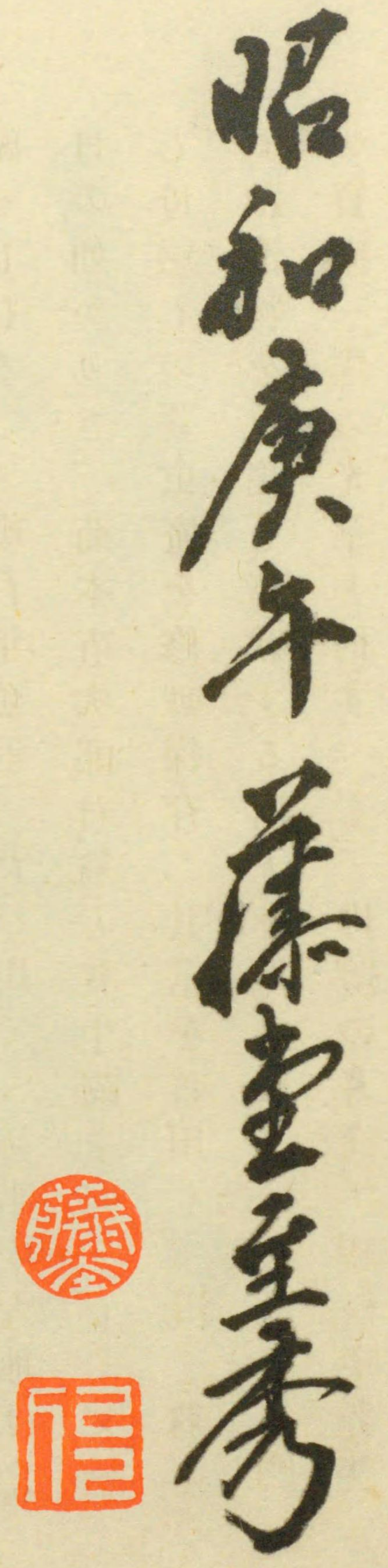
蕉影餘韻

152
85
帙入
B 543

蕉影餘韻

帝國圖書館藏

IMPERIAL LIBRARY



序

風流の初を奥の田植唄に聞いて、風餐露宿、あるは馬上に殘月の淡きを仰ぎ、或は山路來て菫草の床しきを知り、寂、栞、細みの幽玄なる醍醐味を會得し、天下の俳壇をして正風に歸せしむること幾百年、蕉翁一たび出でゝ俳諧の天地は皦日の如かりき。菊本直次郎君、翁と其生國を同うして、父戀し母戀しの蓑虫庵を修理保存し、其富を善用して、汎く翁の眞蹟遺物を收集し、儲藏する所千を以て數ふべく、洵に蕉門の寶庫、一代の光華と稱すべし。俳壇の耆宿伊藤松宇老其の空しく秘めらるゝを惜み、君に勸め、選擇して之が遺影帖を編し、今茲君が華甲記念の出版として洽く同好の士に頒

ち、倶に風雅を樂まんとす。一筆一點盡く翁の面目躍如として、殆んど風丰に接するの思あり。古人此盛觀を樂むを得ずして、今人之を擅にするを得るもの、蓋し菊本君の博雅と松宇老の斡旋との賜なり。是れ獨り繙閲して塵界を蟬蛻し得るを樂むのみに非ず、翁の手鑑として、永く末代の規範たるべきものなるを喜ぶ。

昭和庚午の春　　笹川臨風識

蕉影餘韻の成るまで

伊藤松宇

私が菊本氏の辱交を得たのは、明治三十三四年の昔で、即ち私が深川の澁澤倉庫に從事した頃である。私が今の住居關口芭蕉庵の史蹟保存の事で舊き御馴染の縁故により一昨年以來屢々御訪問し、其序でに芭蕉翁の墨蹟にかゝる珍藏の諸名品を澤山に拜見するの機會を得た。世に芭蕉翁の眞跡と稱するもので鑑賞に價ひするものは洵に曉天の星と同樣で。又舊來より出版になつて居る手鑑などゝ云ふものに信を措けるものは太だ稀少で、私は昨春此墨蹟の事に就て大阪まで講演に出掛けた位である。然るに菊本氏が出處正しき鯉屋傳來の名品を始め其他數百點の秘藏品は實に他の追隨を許さぬものゝみであるから、同氏に御勸めして還暦迎壽の記念として芭蕉翁並に同翁門下の眞蹟手鑑を造る事に同意を得たる關係上、私が專ら其編輯萬端を御引受する事になつたのである。

菊本氏は伊賀の上野の人で芭蕉翁と同郷の因みがあるので。翁が歸郷の度毎に假寓せられたと云ふ蓑虫庵が、二百數十年來多くの人々に輾轉し、あはれ著明の

史蹟が頽廢せんとしつゝある有樣を大に慨嘆せられ、之れが維持保存の目的を以て引受けられ、今は同氏の有に歸したのが基緣となつて、芭蕉翁の門人で大なる後援者であつた鯉屋杉風の家に傳はりし三十五點の名品が悉く同氏の手に入つたのである。されば其後菊本氏は一種の鄕土愛と、俳聖追慕との觀念より、遺墨蒐集に興味を持たれ、蒐集欲と鑑賞眼は彌々高まつて遂に今日の如き名品が一手に吸集されて數百點の多きに達したのである。

今其中より參考資料たるべきものを適宜撰擇排列して此帖を編成し、蕉影餘韻と題し斯道の大家たる東西兩京の文學博士笹川、藤井兩先生に讃襃を需め、序跋を乞ふて玆に菊本氏華甲芳壽の好記念を貽すと共に私が年來の希望を達成し得た次第である。

目次

一、題字　伯爵 藤堂高紹氏
一、序　文學博士 笹川臨風氏
一、蕉影餘韻の成るまで　伊藤松宇氏
一、解說　伊藤松宇氏
一、芭蕉翁小傳　蓑虫庵主
一、厨子入芭蕉翁木像　西園寺陶庵公由來書　一體
一、芭蕉翁遺愛之笏　一個
一、二見文臺　一個
一、芭蕉翁舊蹟伊賀蓑虫庵　六圖
一、芭蕉翁遺愛之石燈籠　一基

蓑虫庵常什

一、厨子入芭蕉翁銅像　一體
一、芭蕉翁筆蓑虫の詠木額　一面

一、花山院權大納言爲齊卿筆扁額　一面
一、芭蕉翁意專宛の文額　一面
一、芭蕉翁詠草五句張込　小川破笠筆翁像　一幅
一、芭蕉翁意專宛の文　一幅
一、山口素堂筆蓑虫の卷　一卷

鯉屋杉風傳來三十五點

颩翅筆芭蕉翁吉野行脚之圖　一幅
許六筆瀑布山吹の圖　芭蕉翁讃　一幅
芭蕉翁筆葛の葉自畫讃　一幅
朝湖筆筒に朝顏の圖　一幅
芭蕉翁筆入日に萩の自畫讃　一幅
朝湖筆枯木蓑虫の圖　芭蕉翁讃　一幅
　蚊足筆素堂蓑虫の記芭蕉翁跋添卷
芭蕉翁正月の詠短册五枚張込　一幅

芭蕉翁筆鉢叩之圖自畫讃　一幅
同　筆螢之詠白字短册　一幅
其角筆祝商山破魔弓之句詠草　一幅
芭蕉翁筆夏之三句詠草　一幅
同　筆秋草の書　七夕の句文　一幅
杉風筆芭蕉翁像　芭蕉翁短册張込　一幅
芭蕉翁筆素堂之壽母七十七賀句　名家七人會合之文　一幅
桃隣筆杉風宛文　一幅
芭蕉翁筆萩に鹿畫　一幅
同　筆謠曲之詞書花の雲の詠　一幅
杉風筆芭蕉翁馬上之圖自畫讃　一幅
同　筆芭蕉翁像　芭蕉翁筆竹の畫　一幅
同　筆述懷之句文　一幅
同　筆松飾之圖自畫讃　一幅

支考杉風宛之文　一幅

杉風筆芭蕉翁像自書讃　一幅

同　筆水仙書　芭蕉翁色紙張込　一幅

同　筆枯木鹿之圖自書讃　一幅

芭蕉翁筆蓑虫之文草稿　一幅

素堂筆四山瓢之銘　一幅

杉風筆富嶽遠望圖　一幅

同　筆葡萄栗鼠之圖　一幅

同　筆稻穂之圖　並句文張込　一幅

王元章筆極彩色一輪牡丹之圖　一幅

芭蕉翁筆鹿嶋紀行巻　一巻

同　筆あつめ句之巻　一巻

同　筆野さらし紀行之巻　一巻

許六筆癸酉紀行之巻　一巻

一、芭蕉翁筆古池の蛙自書讃　一幅

一、同　筆枯枝に鴉自書讃　一幅

一、同　筆阿彌陀坊の句文　一幅

一、同　筆菫の自書讃　一幅

一、同　筆野晒紀行之一節句文　一幅

一、同　筆寒山の自書讃　一幅

獅子庵支考譲状及平花庵雨什添巻

一、同　筆芭蕉の句自書讃　一幅

一、同　筆五月雨句短册　一幅

一、許六筆雨菊芭蕉翁の讃　一幅

蕪村、蝶夢、乙由、曉臺の極

一、芭蕉翁筆三井寺の圖自書讃　一幅

一、同　筆紅粉の花の句詠草　一幅

一、同　筆吉野紀行の一節句文　一幅

一、芭蕉翁筆葛の葉の句短册　一幅
一、同　筆吟水宛之文　一幅
一、同　筆清六宛之文　一幅
一、同　筆左水宛之文　一幅
一、同　筆千六宛之文　一幅
一、同　筆曲水宛之文　一幅
一、同　筆茶屋與次兵衛宛之文　一幅
一、同　筆雲竹宛之文　一幅
一、同　筆去來宛之文　一幅
一、同　筆許六宛之文　一幅

芭蕉翁之四師

一、北村季吟詠草　一幅
一、同　筆姫小松の句短册　一幅
一、北向雲竹墨竹自畫讃　一幅

一、森川許六筆竹に雀畫　一幅
一、佛頂禪師笏之銘　一個

蕉門之十哲

一、其角筆黑木茶屋の句　一幅
一、同　筆赤穗義士追悼之句文　一幅
一、同　筆櫻の句短册　一幅
一、嵐雪筆山茱萸の句短册　一幅
一、去來筆時鳥の句短册　一幅
一、同　筆名月の句短册　一幅
一、許六筆松下燈籠の圖自畫讃　一幅
一、丈草筆時鳥の句短册　一幅
一、野坡筆時雨の句短册　一幅
一、野坡筆初霜の句短册　一幅
一、北枝筆鶯の句色紙　一幅

一 北枝筆時鳥の句短册　一幅
一 支考筆時雨の句横物　一幅
一 同　筆枯野の句短册　一幅
一 杉露筆杉風之像　杉風詠草張込　一幅
一 越人筆初雪の句一行書　一幅
一 芭蕉翁四師小傳
一 蕉門十哲小傳
一 芭蕉翁臨終之吟　一幅
一 跋　文學博士　藤井紫影氏

解説

一、芭蕉翁の最盛時代は貞享の初めより元祿七年終焉まで纔に十年に過ぎず、從て其墨蹟の如きも少數のものたるべきは當然の事なり。玆に掲ぐる菊本氏の所藏品は系統正しき鯉屋杉風傳來の名品にして、其他氏が多年來蒐集せられし數百點の中より抽出して全く試金石となるべきものゝみを掲出し主なる品にのみ解說を附する事にした。

一、芭蕉翁の書に堪能なりと云ふこと多く書に見えざれども書道も亦天禀で、壯年の頃北向雲竹に學び、後に上代風を覘はれたる痕ありて氣品彌々高く、能品と妙品とを兼ね、まゝ神品に近きものあり。併し其の用筆を撰ばざるものありて、或は眞書キに、或は水筆に、或は禿筆に種々なる書體の變遷ありて、往々眞僞容易に判別し難きものあり、此記念帖は書體變れるものありと雖も鯉屋傳來以來の品にも優秀品多ければ、流布の眞蹟集などゝ同一視すべからざるものである。

一、芭蕉翁の繪書は自己の文章にも森川許六を師とせる旨あれども、往々許六の作品の上に出づるものあり、然るに斯道の權威たる二大著書『古書備考』に其書蹟見えず、『扶桑名書傳』には繪事を能くすとはいひがたし」などゝ記るされてあり。此著者等の鑑識が斯くの如くであれば其他世の凡眼者流は推して知るべきである。

一、本書の墨蹟中、譯文を附せるものは萬葉假名を平かなに直せし外假名遣ひはすべて原書の通りにして自意を加へず。

一、卷頭に掲けたる芭蕉翁の像は、曩に大磯鴫立庵主間宮宇山翁の襲藏し尊拜せるもので、生前西園寺公爵の懇望深かりしにより、歿後公爵に贈れるもので、公は後厨子を造り自ら其事由を函底に記せるもので、陶庵公の自筆の文章亦珍なるものである。

一、文臺の上に乘せたるものは、芭蕉翁遺愛の笏にして、當時の名工で翁の門人たる笠翁の作にかゝり、之が銘を記せるものは彼の參禪の師、佛頂和尙の筆で（銘は本書四師傳中に揭ぐ）ある。

一、笏を乘せたる文臺は、芭蕉翁の案出せる二見形文臺の寫しで、三世雪中庵蓼太が安永六年正月に造れるもので、裏面に「うたがふなうしほの花も浦の春」と云ふ翁の句が書してある。

一、蓑虫庵は、伊賀の上野五庵（芭蕉翁の史蹟）の中則ち、無名庵、瓢竹庵、東麓庵、西麓庵、の一で、翁の門人服部土芳の建造したもので、初め些中庵と稱したが、翁が歸鄕の度每に屢々足を滯められ、翁の蓑虫の句に因て、蓑虫庵と稱したので、即ち現今菊本氏の所有にかゝり、圖の如く立派に保存され又庵中に翁が遺愛の石燈籠や手植の松も同所にあるのである。

一、鯉屋傳來の中、䟽翅の筆になる芭蕉翁行脚の圖は、貞享五年三月翁が杜國を同行し吉野吟行をせられし時の姿にして、其上に貼付せる短冊の句は則ち其時の詠である。

一、許六筆、瀧に山吹の圖は許六中稀れに見るの傑作で、芭蕉翁贊も亦鯉屋傳來品中の名品である。

一、芭蕉翁筆、葛の葉の圖自書贊は、翁の最も意を凝らしたる名品で、是又鯉屋傳來品中の優秀品である。

一、筒に朝顏を挿せるの圖は、朝湖即ち英一蝶の筆になり、蔓の垂れたる中央に芭蕉翁の小色紙を附したる瀟洒なる一幅は、特に素堂の箱書とて最も珍とすべきである。

一、芭蕉翁筆、入日に萩の自書贊「あか〳〵と日はつれなくも秋の風」の詠は、杉風自筆の添幅に「此發句は殊の外能句にて公家衆の御褒美被成秋の日の氣しき歌にも是程成るなし連歌師にては宗祇俳諧師にては芭蕉翁也と御沙汰に成りたる句也繪もかるく出來たる也々末迄調法いたし可申也」とあるものである。

一、朝湖筆枯木に蓑虫圖、芭蕉翁の贊は、元と蚊足の筆素堂蓑虫の文、及芭蕉翁跋文の卷物の卷頭にありたるものを、後年鹿嶋梯紅なるもの、書贊のある部分のみを切斷して幅となしたるものにて、傍らに附記せるものは其由緖書である。

一、五枚張短冊幅は、芭蕉翁の筆跡變化を見るの資料とすべきものである。

一、芭蕉翁の筆、月下鉢叩の自書贊幅は、最も傑作で名品中の一である。

一、桃青落款白字書の句短冊は、他に其類を見ざる珍幅である。

一、其角の筆、「祝商山」の詠ある手紙は、當時のかうら四天王を知るの好資料で、幅の卷き止めに杉風宛其角の自署を貼付したるは最も珍とすべきである。

一、芭蕉翁筆、七夕詠嘆の文章を書せる秋草の書は、傳來許六の事なる由なりしが、紙末に押捺しある二個の印章を檢すれば、上は羊角、下に花とある篆字にして、正しく芭蕉翁の別號なること判然し、是亦珍中の一に入るべきものである。

一、芭蕉翁筆、月雪の句の短冊を貼付せる翁の像は、無款なれども傳來杉風が筆と稱するものである。

一、山口素堂の壽母七十七の賀句文章は、筆者芭蕉翁なる事論なく、殊に其席に會合せる、芭蕉翁を始め嵐蘭、沾德、曾良、杉風、其角、素堂の名家七人打揃ふて銘々秋の七草を課題として詠じたること、實に當時の俳壇の盛觀を物語るべく、又此干支に當る壬申は恰も元祿五年にして、芭蕉翁の最盛時代である。

一、芭蕉翁の密書秋に鹿の圖は、杉風の紙中極にして、『古書備考』や『扶桑名書傳』などの著者等の夢にも知らざるもので、眞に珍中の珍とすべき名書である。

一、杉風筆、自書贊は芭蕉翁奥羽行脚馬上の光景を圖したるもので、先年何某書家が帝展に之に類したるものを出品して評判高かりしが、元祿の一俳人に及ばざること遠しであらう。

一、杉風筆、芭蕉翁の竹を畫がける圖、前面に展べたる紙中の墨竹は、仔細に之を檢すれば、芭蕉翁

の筆にして、此一事を以ても翁と杉風との親密さが推し量らるゝのである。

一、杉風筆、月の句文を記せるものは、墨痕精妙にして芭蕉翁の筆致に髣髴たる所あり、末行の追懐の句中「耳遠し」とある所杉風の聾者なりし事を物語るものである。

一、杉風筆、松飾の圖自書賛、八十翁とある落款は書書共に健筆なること驚くべきである。

一、杉風筆、芭蕉翁の像は、桃隣より杉風宛の書翰にも、又損よりの注文にかてゝ「近頃乍御苦勞私にも一幅御認被下候はゞ別して可忝候」とある通り餘程得意であつたものと見え、芭蕉翁の元日の句を書したる圖も、翁の清相がよく寫されてある。

一、杉風筆、水仙の圖に貼付したる、初雪の句色紙は、無款なれども芭蕉翁の筆たること論なく、殊に生けるが如き書風は特に優秀なるを覺ふものである。

一、杉風筆、枯木鹿の圖自書賛は、實に専門書家を凌駕するものである。

一、芭蕉翁蓑虫の文章草稿は、普通の筆致と異なりて、老蒼枯淡なる所あり、大に參考資料とすべきものである。

一、素堂筆、四山瓢の銘は、右端に「芭蕉庵家藏」とあるは正しく芭蕉翁が在庵中常に床間に掲けて愛藏されたるものらしく、又落款に「貞享三仲秋後二日」とあるのも床しく窺かはるゝのである。

一、杉風筆、無欵富嶽遠望之圖は、慥に當時の巨匠狩野安信に師事されたかを窺はるゝものがある。

一、杉風筆、無欵木鼠葡萄之圖。並に稻穗之圖は共に素人書を離脱したものである。

一、傳に云、王元章筆極彩色一輪牡丹は、箱書に「鯉屋より申傳、此軸英一蝶所藏杉風讓請一輪牡丹與號同家に持傳へし所也宗珉の目貫も此圖より出し事なりと云々」是は俳趣以外のものなれども有名なる横屋宗珉の一輪牡丹の出自とありて鯉屋傳來の家珍として此列に加へられたるのである。

一、芭蕉翁筆「鹿嶋紀行の一巻は別して有名なもので、杉風の後を繼ける茶庵梅人が、寛政二年八月芭蕉翁百回忌を取越して營みし紀念に「鹿嶋紀行」として石摺式に白字にして卷頭に掲けしものゝ墨跡の原書である。卷末に記せる貞享丁卯仲秋とあるは翁が四十四歳の時で、俳諧は益々盛んに、筆蹟は最も油の乘つた圓熟時代である。

一、芭蕉翁の筆「あつめ句の卷」は是も前同時に出來たもので、之は芭蕉翁の會心の作計りを認められた草稿的のものであるが、前巻に劣らぬ名巻である。之は前巻を出版された茶庵梅人が十三回忌の追福に、門人月桃園成蹊が「桒集」と題して梅人か句集と共に出版した墨跡の原書である。

一、芭蕉翁筆、有名なる「野さらし紀行」の草稿の巻で一二訂正の所あり、是は筆蹟他のものに比して大に異なり、前の蓑虫草稿と同時代のものなるべく思はれる。

一、許六筆「癸酉紀行」の巻は、元祿六年四月の末に許六が彦根に歸城の時、芭蕉翁が之を送りたる時の「離別詞」(之は風俗文選の卷頭に柴門辭、送許六之故郷餞別之文也とあるもの)同送行の文、其角か扇面に餞別の辭を書したるもの。杉風、桃隣、百里の餞別句。許六が甲路紀行、同旅の賦等到る處の風景を寫し、所謂書圖俳諧を按排し、才波、達化、夗良等の送別の句を立句にしたる三巻の歌仙、許六の留別の句を立句にしたる歌仙一巻を旅中に記るせる最も趣味深き珍巻である。元祿九年十二月許六と李由とで編したる「韻塞」に記載しある原書であるが、それには此四巻の歌仙が漏れて居る。

一、芭蕉翁筆、古池の名句自書賛幅は、有名なる尾張の士朗の舊藏であつて、添幅、箱書等孰れも士朗の自署である。之は舊高瀬藩主細川家の舊藏であつた。

一、芭蕉翁筆、あみだ坊の句の横幅は翁が貞享四年八月鹿嶋紀行中に記せる「歸路自隼に宿す」とある本間自隼の許にて揮毫されたるもので、其遠孫本間道偉より水戸家へ献納し、大儒藤田東湖之が箱書をなし、爾來水戸家の家寶なりしが、先年同家の什器賣立の節菊本氏の有に歸したのである。

一、芭蕉翁筆、董の自書賛横幅は氣韻生動し出來至て佳絶、菊本氏名品中の一である。

一、芭蕉翁筆、甲子紀行中の一節卽ち「はつか餘りの月かすかにくらく、馬上にむちをたれて數里いまだ鷄鳴ならず、杜牧が早行の殘夢さよの中山にいたりてたちまち驚く」と端書あるもので、之も名品中の一である。

一、芭蕉翁筆、寒山の自書賛は延寶頃の揮毫と見え、翁が例の温健なるものに引替え、覇氣滿々たる所蕭白あたりの筆致に髣髴たるもので、門人支考が故翁の記念品として愛藏し、季和なるものゝ懇望によりて割愛したる書翰の添幅あり、書中「此繪は天下一幅のものにて候尤御秘藏可被成候」とある如く眞に天下の一品で、箱書も支考の自筆である。こは有名なる趣味の長者深川扇橋長岡氏の傳來であつて、箱の横面に「與人者非子孫」の六字の印か押捺しある門外不出の品であつたのが菊本氏の有に歸したのである。但し世に傳ふ寒山は卷物持てる方にて、箒を持てる方は拾得と編者は心得居れども、姑く支考傳來の儘寒山の圖となし置く。

一、許六筆、菊花の圖、芭蕉翁の賛、菊本氏愛藏品中には、是に優れるもの數幅あれ共、亦門人乙由の箱書、也有、蕪村、蝶夢、曉臺等當時の名流が筆を揃ひての極め書あるものは、如何に芭蕉翁の名品と雖も之れに過ぐるものはないであらう。

一、芭蕉翁筆、三井寺のけふの月自書賛、はせを、とある落欵共に輕妙と云ふべきである。

一、芭蕉翁筆、吉野紀行の一節、是又前の甲子紀行の一節を記せるものに劣らぬ名品である。

一、芭蕉翁筆、吟水宛の文、中に「花曇り鐘は上野か淺草か」蓋し上五句花曇りとあるのは、花の雲として世に聞えたるものゝ先案なるべき歟、福岡孝悌子爵舊藏品中の一。

一、芭蕉翁筆、淸六宛の文、二見にて曾良に別るゝ時、「蛤の二見に別れ行秋そ」とあるのは奥の細道中の記事と相違せる所あれども、紛れ無き眞筆なれば、參考史料として其由を揭け置く。

一、芭蕉翁筆、許六宛の文、書中「當冬は相手に可成物無御座候へは俳諧も成申ましく候廣き江戸に相手のなきも氣の毒に存候當方無恙五句自然に脾の臟を捫ル躰に候此脾の臟捫シ破たらん後初めて俳諧はやり可申候云々」温厚其ものゝ如き芭蕉翁の筆からも相手が傲岸なる許六だけにかゝる文言の浮び出つる事又なく面白く、數通の書翰中より抽出し之も參考史料として特に揭ぐる事とした。

以上解說に無きものは各個に譯を附し指示せる通りである。

終りに臨み此菊本氏華甲記念帖編纂に就きては杉原仁三郎、宮本直一兩君の補助を得たること鮮なからず、依て玆に特記して謝意を表す。

昭和五年四月櫻花の節

小石川關口芭蕉庵に於て

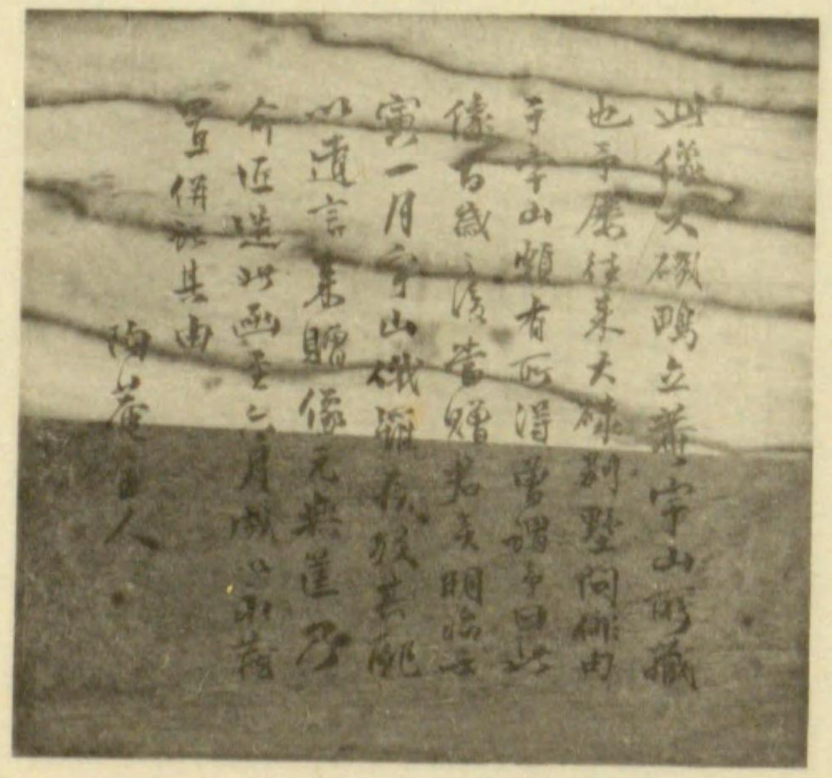
伊藤松宇識

芭蕉翁小傳

芭蕉翁は、正保元甲申歳伊賀國上野赤坂町に生る。父は松尾儀左衛門と稱し、元同國阿拜郡柘植村の產なりしが、上野に移住し桃地氏を娶りて二男三女を擧ぐ、嫡子半左衛門命淸、二男幼名甚七郎後に忠左衛門宗房と稱す。是則ち芭蕉翁にして、其先は彌兵衛尉宗淸の後裔に因り宗房と名乘れりと云ふ。寛文二年十九歲の時城代藤堂新七郎良精の臣となり、嫡子主計良忠に仕へり。良忠は蟬吟と號し弓馬の道を勵むの傍ら和歌俳諧に志し深く、洛の北村季吟に學びて命名あり、宗房又良忠の寵愛厚く屢々洛に使し共に隨て勉勵せり。時に寛文六年四月良忠不幸にして早世せられ悲嘆極まりなく、同六月良精の命に依り高野山報恩院に行き遺髮を納め下山の後深く感する所あり頻りに暇を乞ふと雖も免されず、玆に於て同僚城孫太夫の門に一句を殘して亡命す。夫れより洛に上り季吟の許に遊學し、寛文十二年初めて江戶に下り曾て季吟の同學たりし因みに依り小澤卜尺方に身を寄せ、客偶中小石川の水道改修に際し之れが監督となり、工事竣成の後、深川なる鯉屋杉風が別墅に移り、薙髮して芭蕉翁桃靑と稱し、又泊船堂、風蘿坊、天々軒、釣月堂、羽扇、羊角、鳳尾、天々齋、杖錢子等の數號あり。切瑳硏鑽して貞門、談林の俳風を看破し、東西南北に行脚し、遂に俳諧正風體の開祖と仰がれ從ひて學ぶ者二千餘人と稱す。元祿七年九月廿九日大阪に於て病に罹り、終に十月十二日花屋仁左衛門が家に歿す、時に行年五十一歲、遺骸を近江の湖南義仲寺に葬り、遺髮を伊賀上野愛染院に埋め名つけて故鄉塚と云ふ。

昭和庚午仲春

蓑虫庵主　菊本直次郎誌



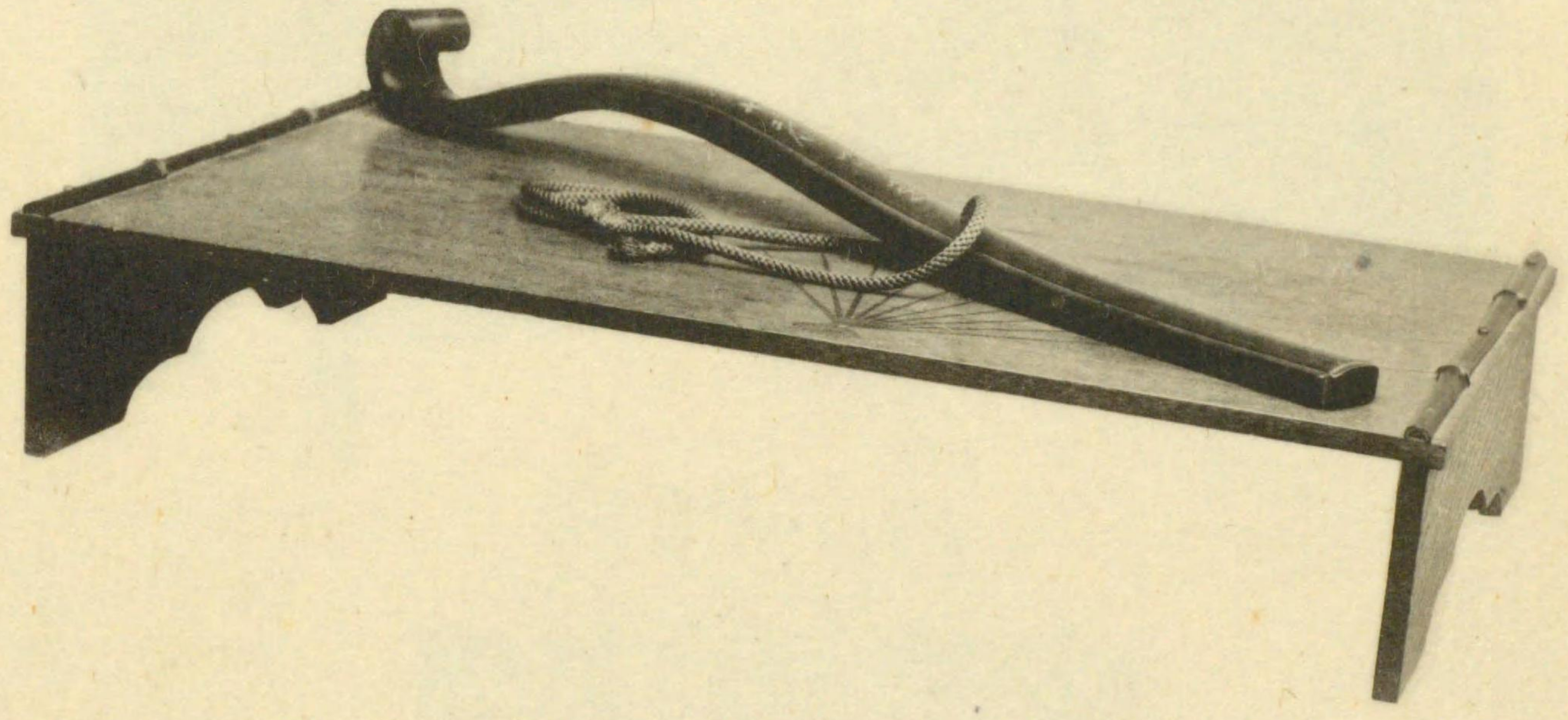
芭蕉翁像

此像大磯鴫立庵宇山所藏
也予屢往來大磯別墅問俳句
于宇山頗有所得曾謂予曰此
像百歲之後當贈君矣明治壬
寅一月宇山俄罹疫歿其配
以遺言來贈元無筐乃
命匠造此函至六月成以永藏
置併記其由

陶庵主人

芭蕉翁遺愛笏

佛頂禪師書
小川破笠彫刻



二見文臺

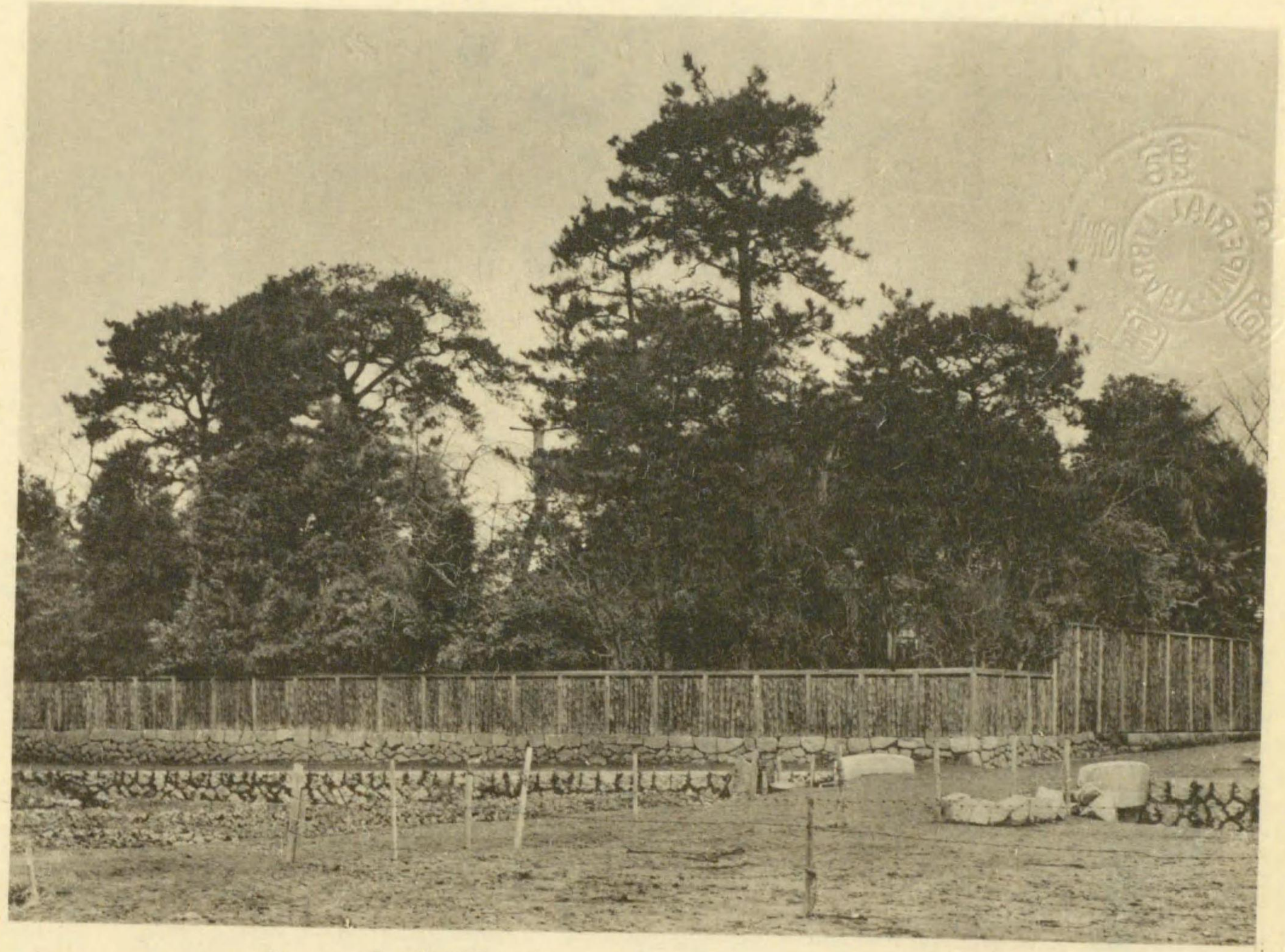
蓼太寫し

芭蕉翁舊蹟

蓑虫庵

（伊賀五庵ノ内）

蓑虫庵外観



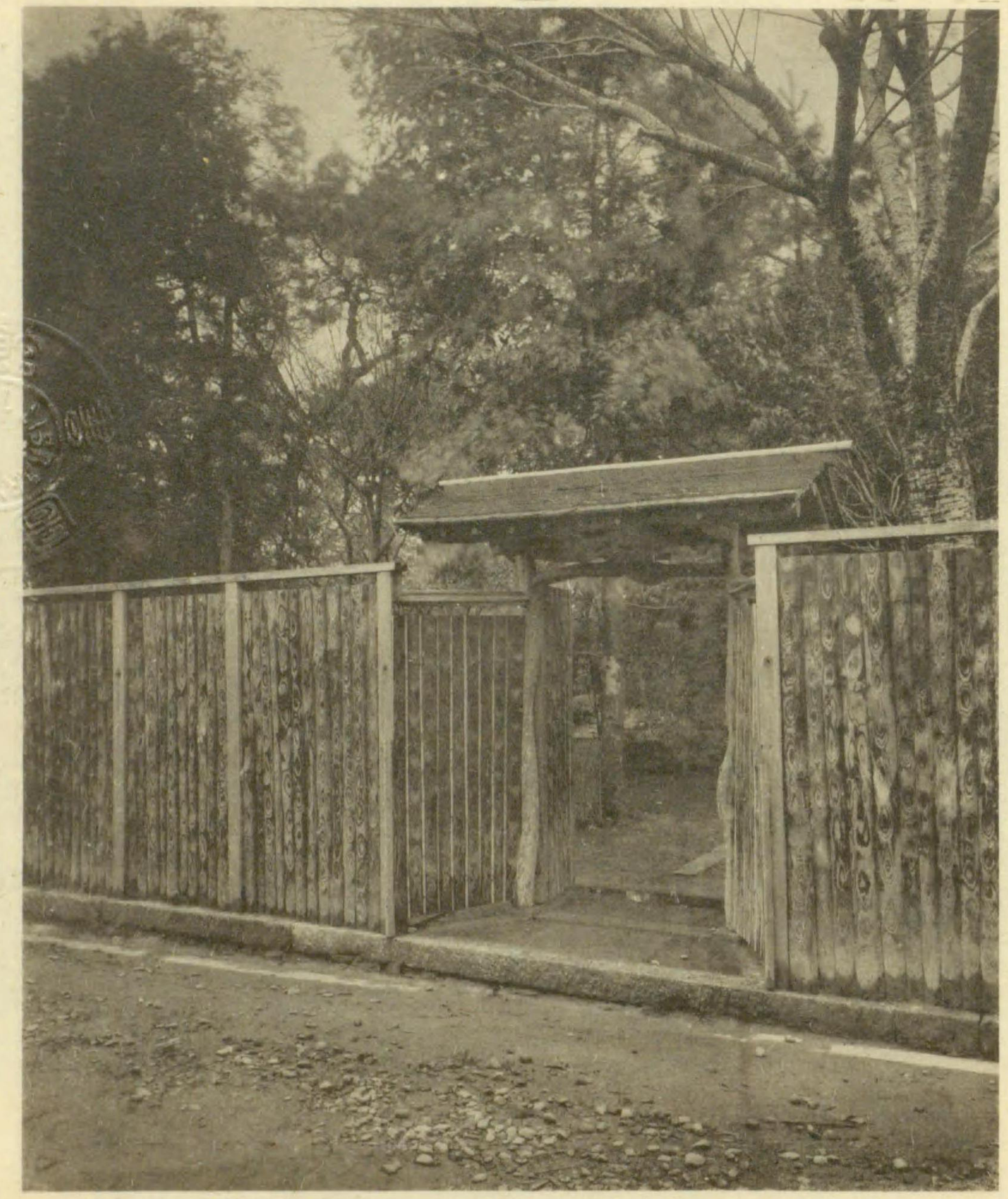
蓑虫庵

庵は伊賀國上野市街字西日南町の南端にあり、西北は民家に隣り。東南は眼界遠く展けて國見山其他伊賀連山を望み。近くは久米友生の翠巒に接し。四時の煙景を擅にせる處にして、貞享四年の冬服部半左衛門保英の建設にかゝり、之を些中庵と號す。園は閑雅幽邃にして、風致最も掬すべき處たり。庵主保英は土芳と號し、芭蕉翁の門に入り俳諧を學び、和漢の學に通じ、又内海流の槍術にも達せり。翁深く此庵を愛し歸郷の度毎に滯在し、大いに風懷を洩らせり、或る夜の句に

今宵たれ吉野の月も十六里　芭蕉

の吟あり。

蓑虫庵表門



元祿元年三月芭蕉翁を泊して句あり

面白う松笠燃えよ朧月　土芳

或る日翁自から書かれし面壁の圖を懐中より取出し此庵の物にせよとて示さる、其の讃に

蓑虫の音を聞きに來よ草の庵

とあり、土芳之を見て深く感じ、之より庵の名を蓑虫庵と稱せり。

享保十五年土芳歿して嗣子なく、庵は空しく風雪のおかす所となり。安永年間窪田猿雖の曾孫桐雨なる者資財を投じて大いに之を修理して句あり

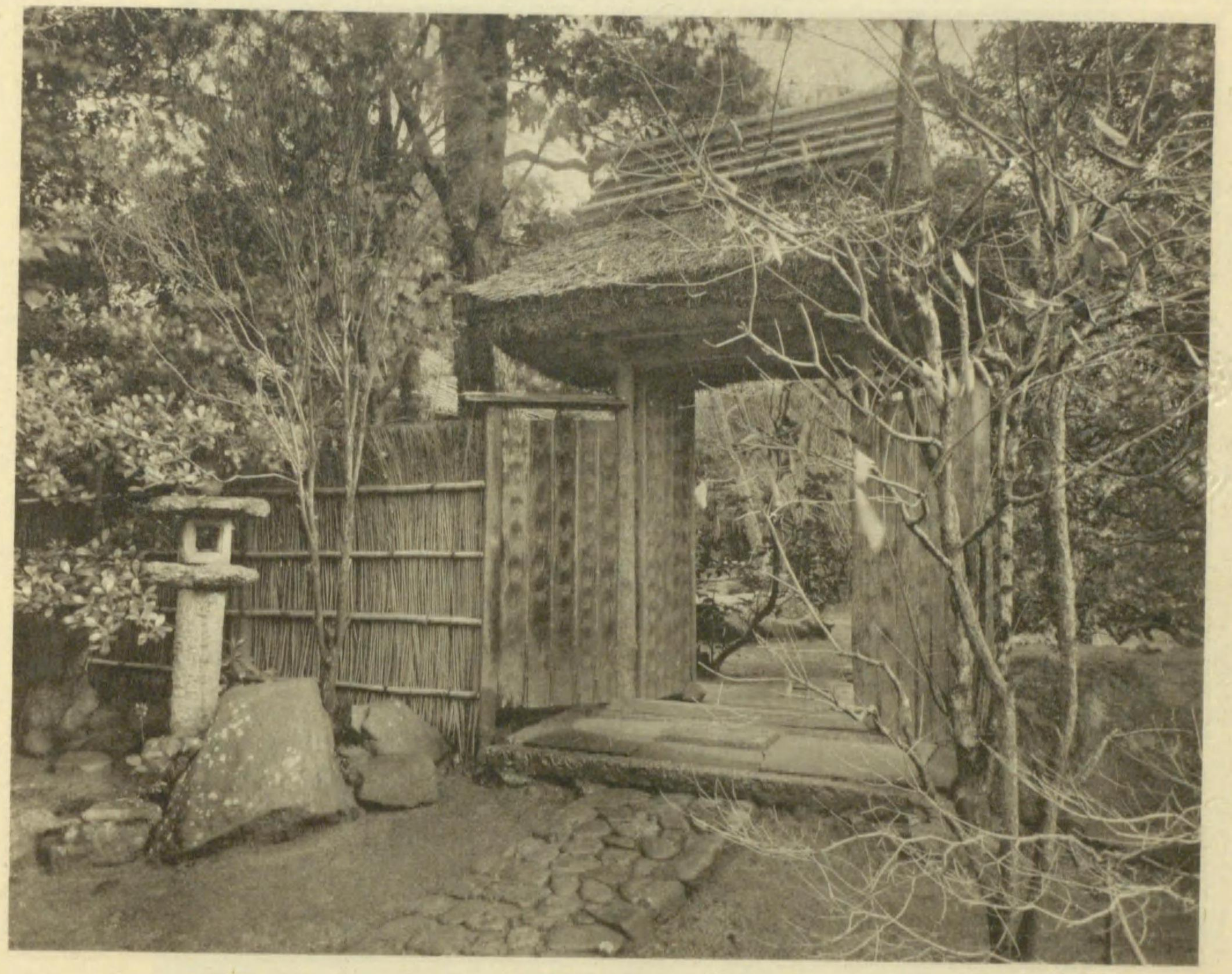
春雨に昔の色や庭の草　桐雨

天明年間桐雨歿して再び頽廢す。其後享和年間服部猪來深く之を嘆き、古く翁の時代を考へ、庭園に手を盡し翁の遺墨を蒐集して之を貯ふる事に努む

蟋蟀啼くやこの庵此すこき　猪來

其後庵主幾度びか變りて、遂に菊本氏の手に遷り、以て今日に及び面目を改む。

蓑虫庵中門



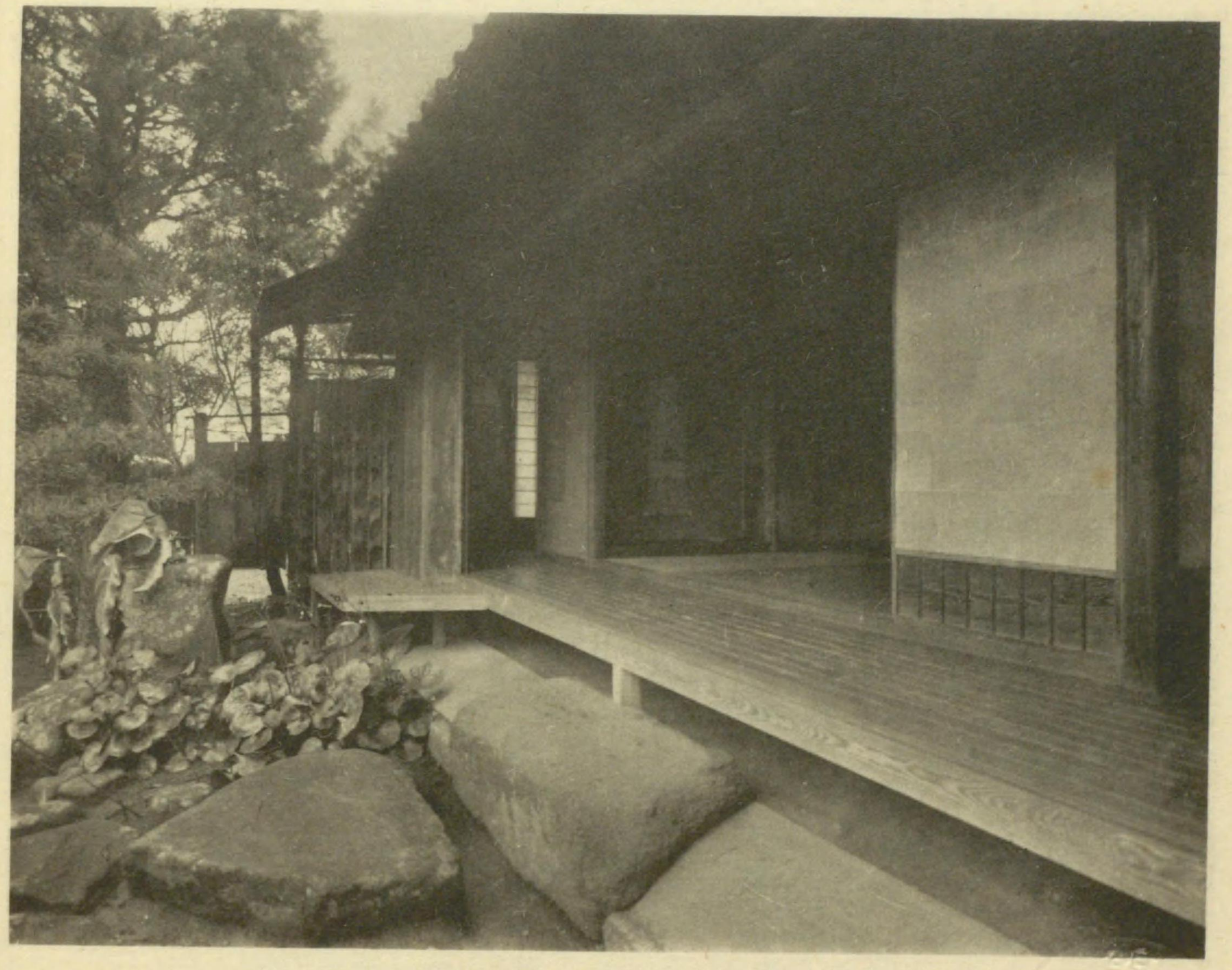
伊賀連衆歌仙の中

木の下に汁も鱠もさくら哉　芭蕉
　翌來る人はくやしがる春風　麦
蝶蜂を愛する程のなさけにて　良品
　水の匂ひを煩ひにける　土芳
草枕此頃になき月の晴　雷洞
　猿の涙が落る椎の木　蕉
石壇の繼目も見えず苔の露　麦
　顔よごれたる賤の子供等　品
判官の烏帽子ほしやと思ふらん　芳
　鳥羽田あたりの雪の夕ぐれ　残
寶庵を見せんと人のみちびきて　蕉
　井戸のはたなるいふき切也　洞
涼しさの裸になりて月をまつ　品
　むしろをたてにはしり飛せる　蕉
寢てゐたがをかしく犬の尾をすへて　麦
　神事見たつる脇母子が太刀　芳
まんぢうの紅つけちらす花ざかり　半残
　日永を空に二日醉ざけ　三蘭

蓑虫庵と芭蕉翁手植松

陽炎のみぎりに榻をひきずられ　蕉
　すげなくせいの高きさげ髪　品
しのぶ夜の蠟燭落す橋のもと　洞
　ひとへのきぬに蚤うつりけり　蘭
賤か家も飼蠶しまへば廣くなり　品
　またあたらしき麦うたをきく　麦
御佛につかへる日よりまづしくて　芳
　源氏をうつす手そさがりつゝ　残
ひちりきの音をふき入るゝ終宵　麦
　燕子樓のうち火の氣絶たり　蕉
夕月を扇に繪かく秋の風　蘭
　露こひしかる人はみのむし　芳
しら菊の花の弟と名をつけて　残
　能見にゆかん日和よければ　洞
のり入るゝ二歳の駒を撫でさすり　蘭
　躙書さへならぬ老の身　品
降かゝる花に涙もこぼれずや　麦
　雉子やかましく家居しにけり　芳

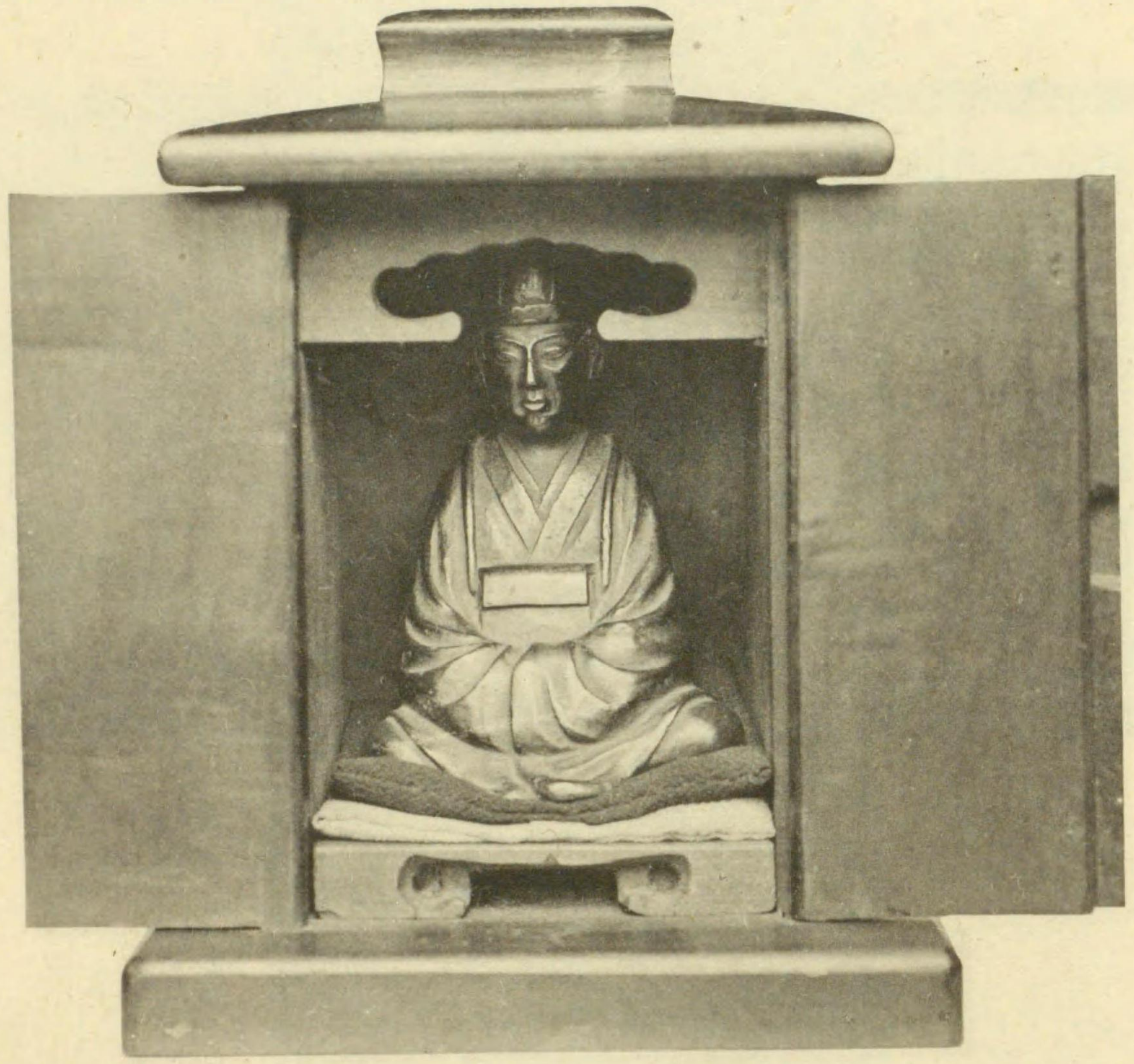
蓑虫庵芭蕉翁居間



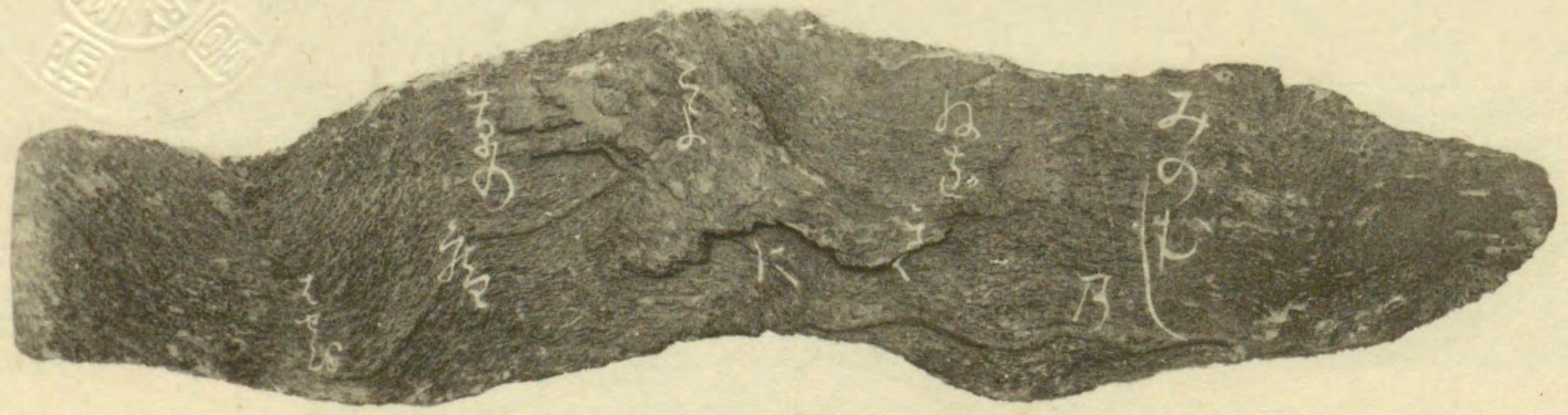
蓑虫の音を聞きに來よ草の庵　芭蕉
みの虫の角や譲りし蝸牛　素堂
蓑虫は父と啼く夜を母の夢　野坡
みのむしにそむきも果ず今日の菊　支考
蓑虫や常のなりにて涅槃像　野水
みの虫を聞かぬぞ今日の命哉　桃隣
蓑虫の茶の花故に折られける　猿雖
みの虫の出方に開く櫻かな　卓袋
蓑虫の蓑の雫や草の露　史邦
みのむしの家崩したる野分哉　句空
蓑虫のいつから見るや返り花　昌碧
みの虫と知れつる梅の盛り哉　蕉笠
蓑虫や形に似合し月の影　杜若
みのむしの啼て枯木の風情哉　淵泉
蓑虫の音さへ枯るゝ嵐かな　如行
みのむしは千種の花の案山子哉　鋤立
蓑虫の啼くや一葉を着る夜から　巴静
みの虫の啼きやむ父に逢ふたる歟　麥林

蓑虫庵庭内古池

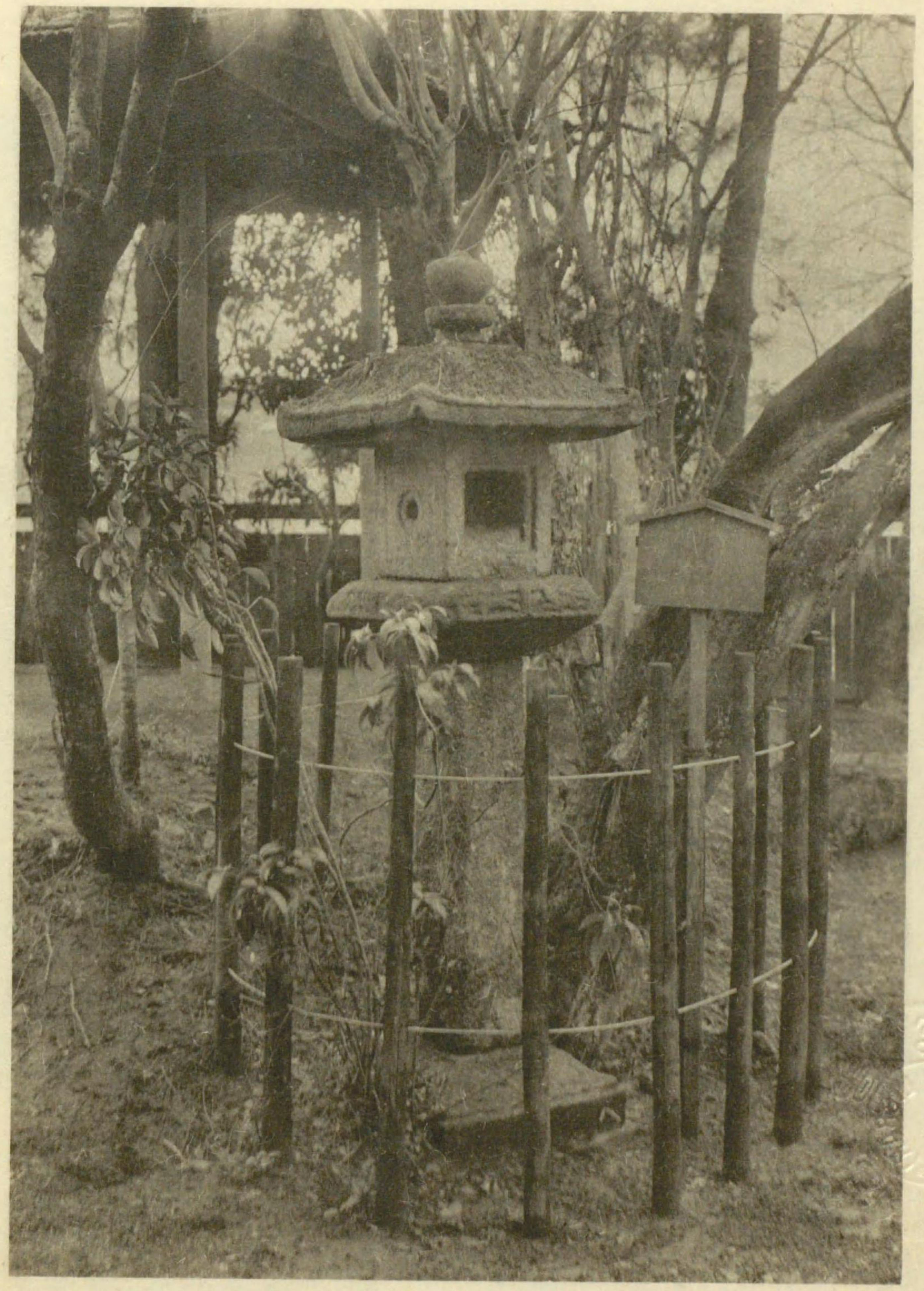
蓑虫の秋ひだるしと啼くなめり　蕪村
みのむしを打ことなかれ落葉搔　曉臺
蓑虫の吹かれ〳〵て啼く音哉　闌更
みの虫の啼かでも秋の姿かな　白雄
蓑虫も翁戀しと啼く夜かな　蓼太
みの虫に竹取が宿は荒れにけり　几董
蓑虫やよんどころなき秋の聲　葛三
みの虫の蓑もさか立つ日暮哉　巣兆
蓑虫の牡丹包めと啼きにけり　碩布
みの虫や戀知るものはさわがしき　春鴻
撫子は蓑虫が着て仕舞ひけり　道彦
みの虫は生れし日から老いに皃　定雅
蓑虫を聞く夜や芥子に入る心　石蘭
みのむしの細音まぎれず虫の中　世南
蓑虫は案山子の捨てし子なるべし　重厚
露の音蓑虫ぬれて見ゆるなり　菊明
みの虫の父よと呼ぶはかゝし哉　也有
蓑虫の運の强よさよ五月雨　一茶



蓑虫庵常什
芭蕉翁像



みのむし庵木額

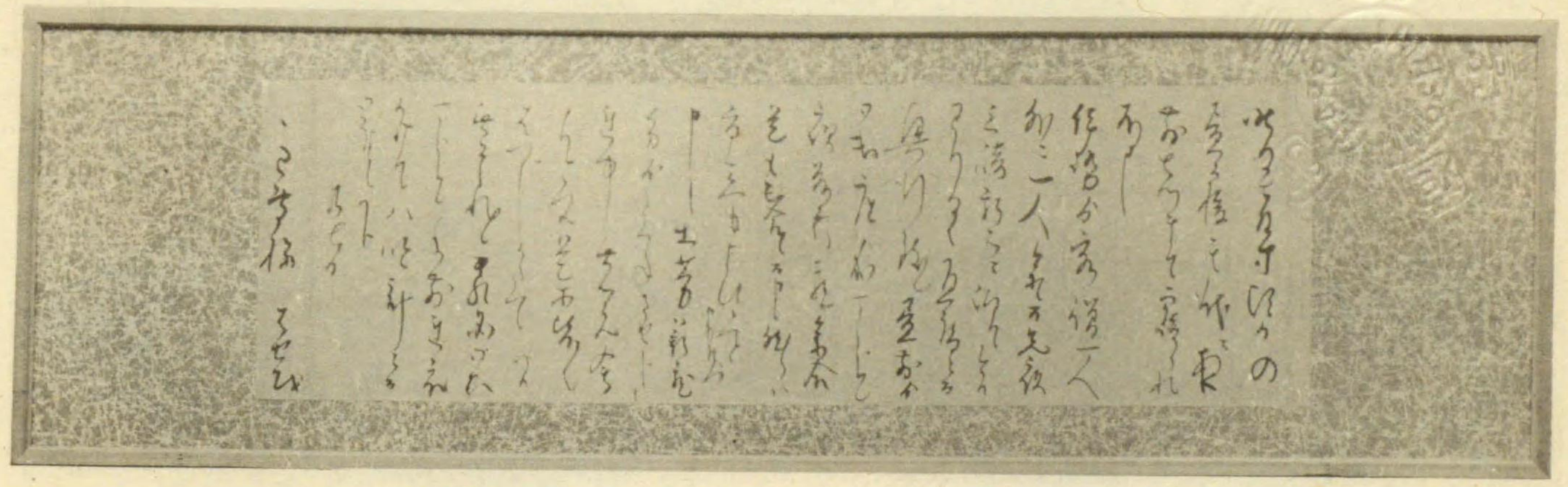


蓑虫庵庭内芭蕉翁遺愛石燈籠

花山院權大納言通齊卿筆

蓑虫庵扁額

芭蕉翁意専宛文

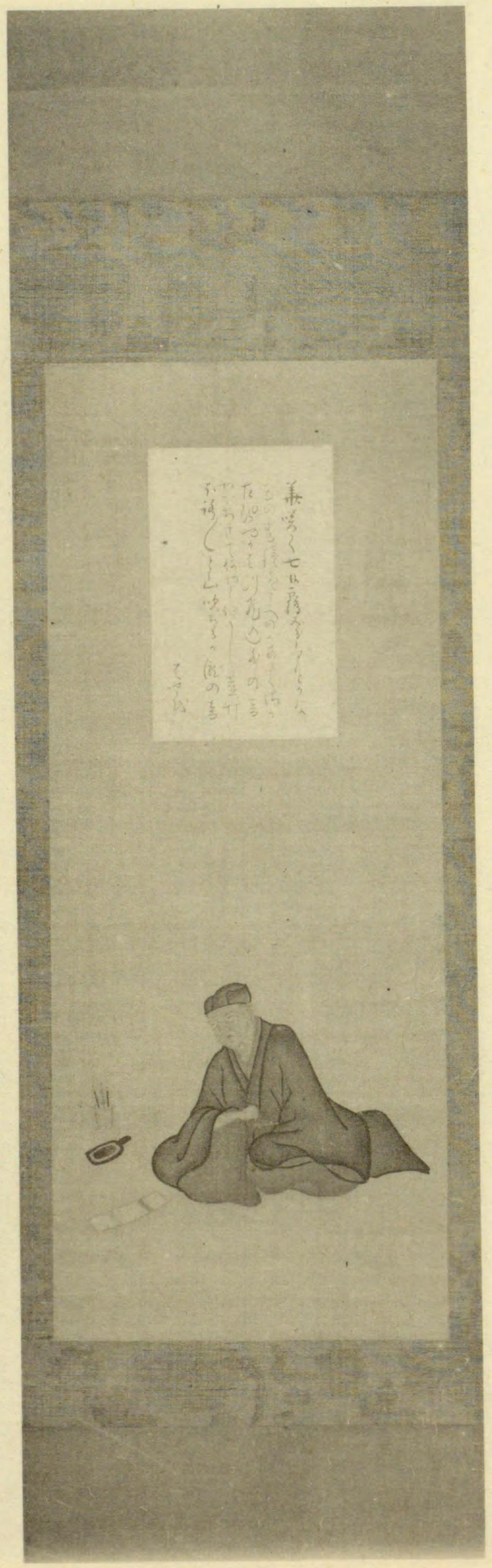


昨日者辱頃日の
晝寢其代ニ夜
前七ツまて寢られ
不申候
伊勢より客僧一人
外ニ一人參候而先夜
三崎新右ニ泊り候今日
わりなく愚庵に而
興行致シ候事晝前より
御出座被成可被下候
夜藤新藏參合
是も出合候而申候然らは
市兵衛もよひ候へと半左衛門
申候土芳は新藏
方よりたつねさせ申候
連中無心元會
申上候へ共是等皆〳〵
はつしかたく候間
無是非候貴樣必御出
可被下候手前連衆
かけて八吟計ニ而
御座候已上
廿七日
意専樣　はせを

芭蕉翁詠草五句

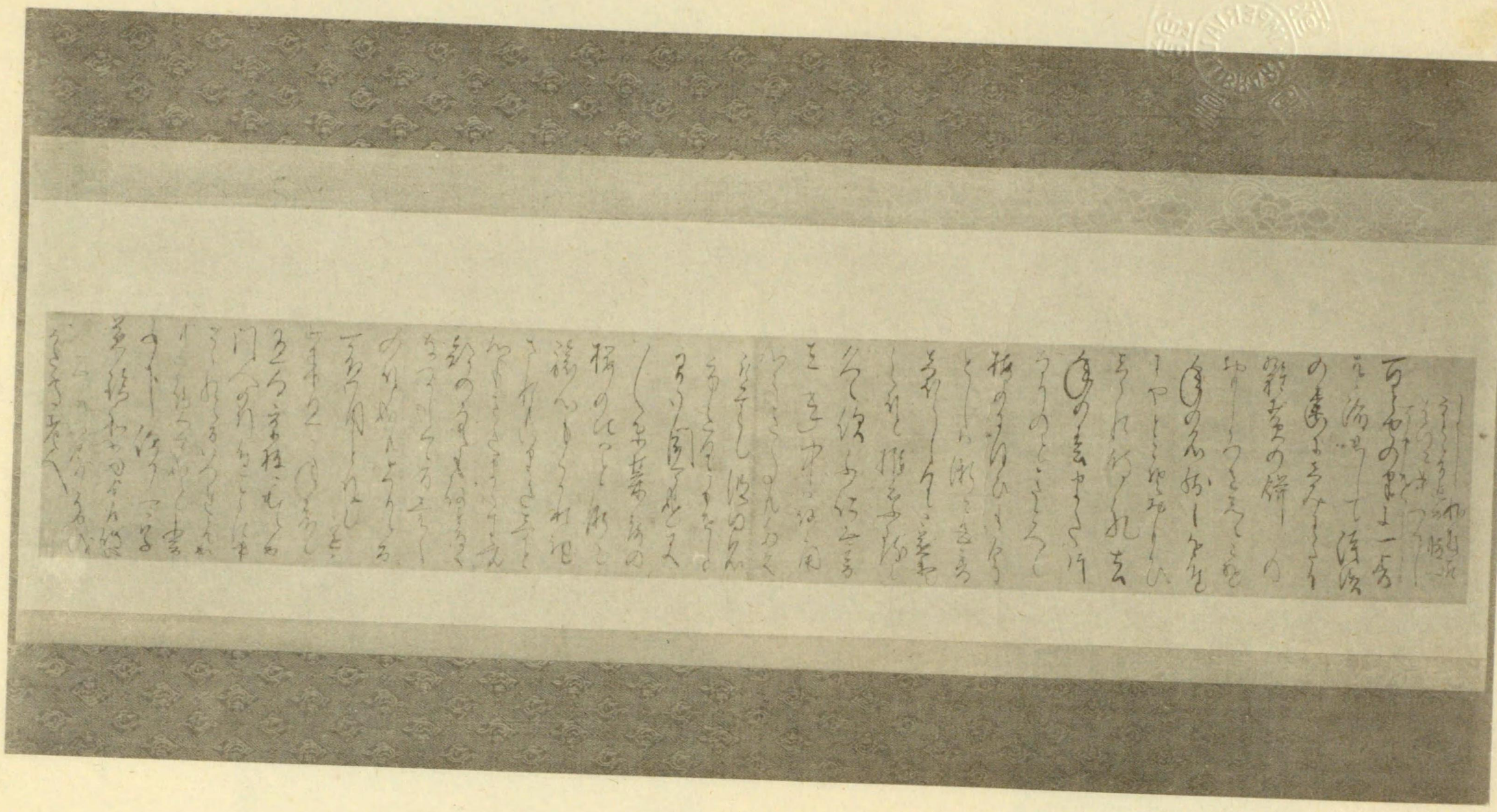
小川破笠筆

翁像



花咲て七日鶴みるふもとかな
花の雲鐘はうへのかあさくさか
古池やかはつ飛込水の音

やまちきて何やらゆかし菫艸
ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音
はせを



芭蕉翁文　意専宛

芭蕉翁文　意専宛

尙〳〵狀數取
重候間追而腹一
はいニ書つくし
可申遣候
百とせの半に一歩
を踏出して淺漬
の歯にしみわたり
雜煮の餅の
おもしろく覺候こと
年の名殘も近付候
にやとこそおもひ
しられ侍れ去
年の春また片
なりのときこへし
梅のにほひも今
としは漸々色香
しほらしく存候御慈愛
之ほと推察致候
久々便不仕無音
去年中は何角
心うき事共多く
取重候段同名
方迄具ニ申遣し候
間御聞可被成候又
〳〵東麓庵の
櫻の比は漸々
旅心もうかれ初候
され共いまたしかと
心もさたまらす候へ共
都の空も何となく
なつかしく候間しはし
のほと成共上り候而
可懸御目と存候定而
歳旦承度候
愚句京板ニ出候而
門人の引付ことに書
とられ候而いつれニて成
共御覽可被成候書
候の下便り一字
慈鎭和尙より取傳ひ候
正月廿日　はせを
意専老人

山口素堂筆

みのむし巻

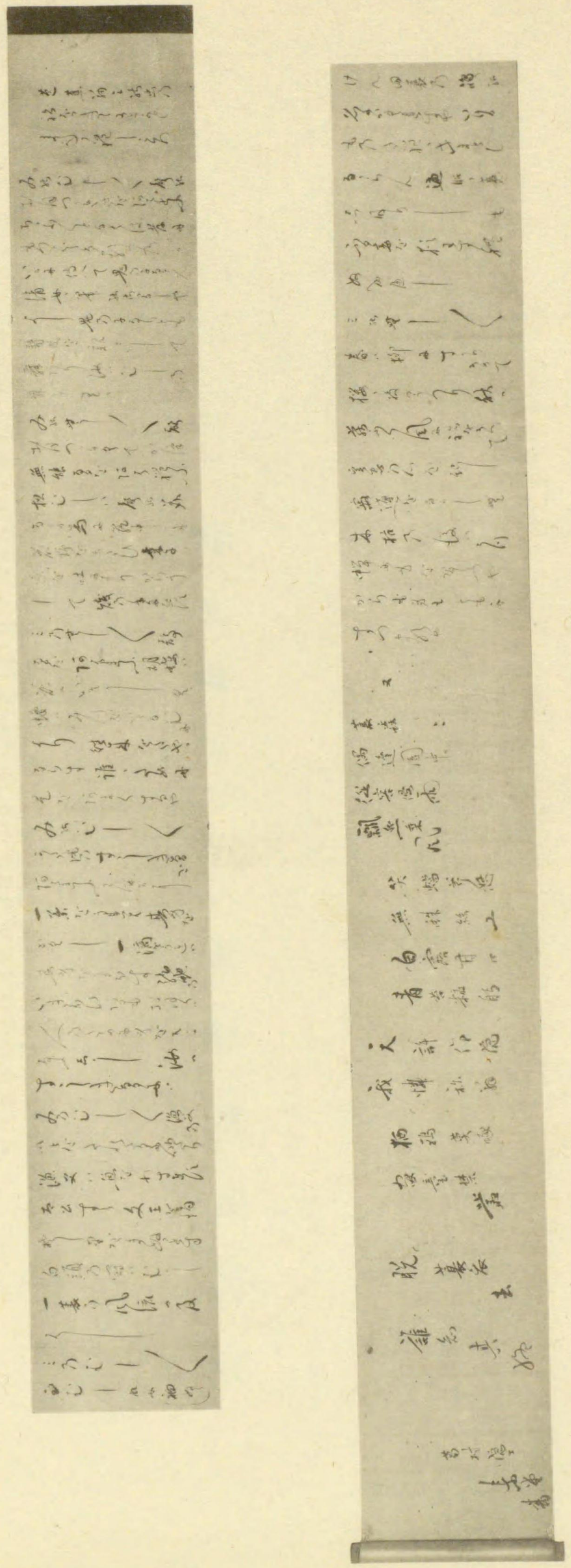
芭蕉翁みの虫の
ねをきゝにこよと
まねかれしころ
みのむし〳〵聲の
おぼつかなきをあはれふ
ちゝよ〳〵となくは孝に
もつはらなるものか
いかに傳へて鬼の子なるらん
清女か筆のきかなしや
よし鬼の子なりとも
瞽叟を親として
舜あり汝はむしの
舜ならむか
みのむし〳〵聲
おぼつかなくてかつ
無能なるをあはれふ
松むしは聲の美
なるか爲に籠中に
花野をしたひ桑子は
糸を吐によりからう
して賤の手に死す
みのむし〳〵靜
なるをあはれふ胡蝶は
花にいそかしく
蜂はみつをいとなむに
より往來をたやか
ならす誰かためにか
是をあまくするや
みのむし〳〵
かたちのすこしきなるを
あはれふわつかに
一葉をうれは其身を
かくし一滴をうれは
其身をうるほす龍蛇の
いきほひあるもおほくは
人のために身をそこ
なふしかし汝は
すこしきなるには
みのむし〳〵漁父の
いとをたれたるに似たり
漁父は魚をわすれす
太公すら文王を釣
そしりをまぬかれす
白頭の冠はむかし
一蓑の風流に及
はし
みのむし〳〵
玉むし故に袖ぬらし
けん田蓑の嶋の
名にはくれすやいける
ものたれか此まとひ
なからん遍昭か蓑を
しほりしも
ふる妻を猶わすれ
ぬ成へし
みのむし〳〵
春は柳にすかりそめて
櫻か枝にうつり秋は
荻ふく風にねをそへて
定家の心を起し
寂蓮をなかしむ
木枯の後はうつ
蝉に身を習ふや
からも身もともに
すつるや

又

蓑蟲々々
偶逢園中
從容侵雨
瓢然乘風
　笑蟷斧怒
　無蛛絲工
　白露甘口
　青苔粧躬
天許作隱
我憐稱翁
栖鴉莫啄
家童禁叢
脫蓑衣去
誰知其終
葛村隱士
素堂
書

山口素堂筆

みのむし巻



鯉屋杉風傳來

三拾五點

芭蕉翁行脚像

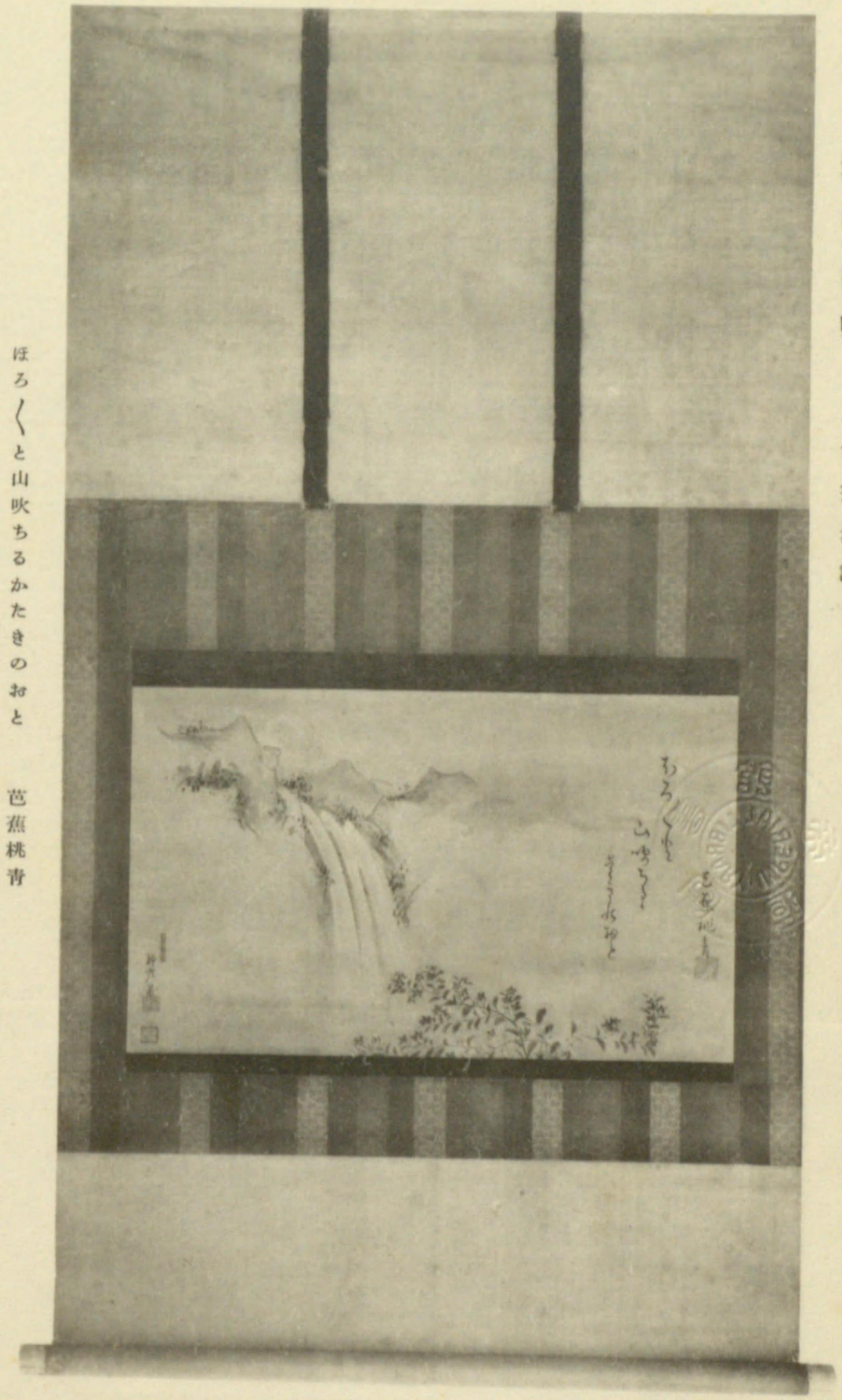
睬氏匾翅筆

ひとつぬきてうしろにおひぬころもかへ　はせを

元禄九丙子歳秋九月圖

許六瀧に山吹

芭蕉翁讃

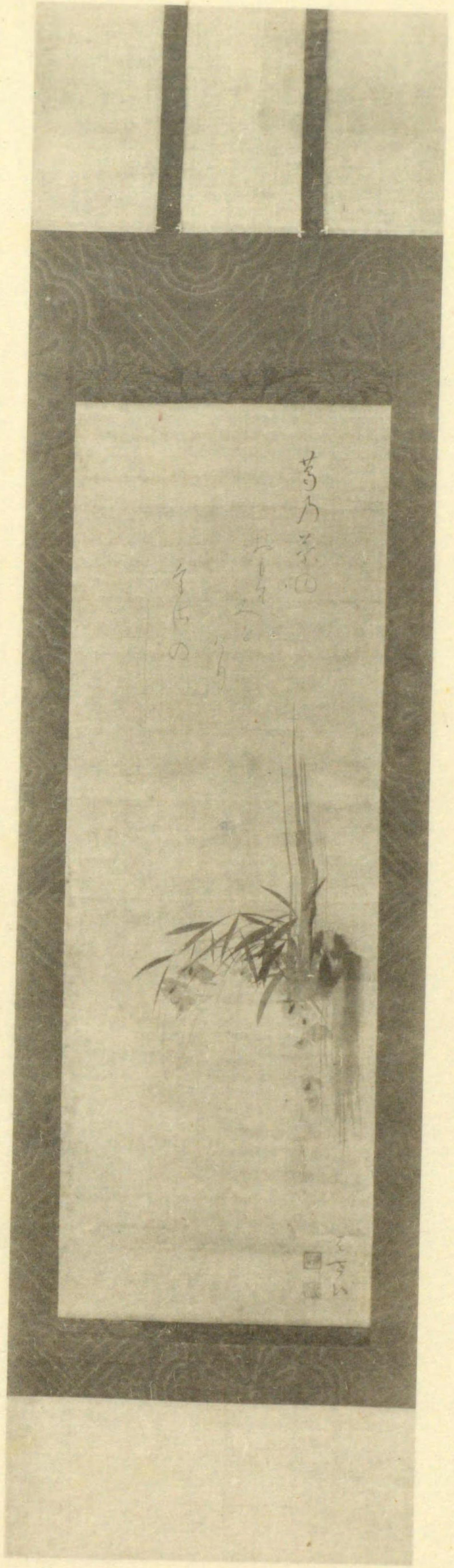


ほろ〳〵と山吹ちるかたきのおと

芭蕉桃青

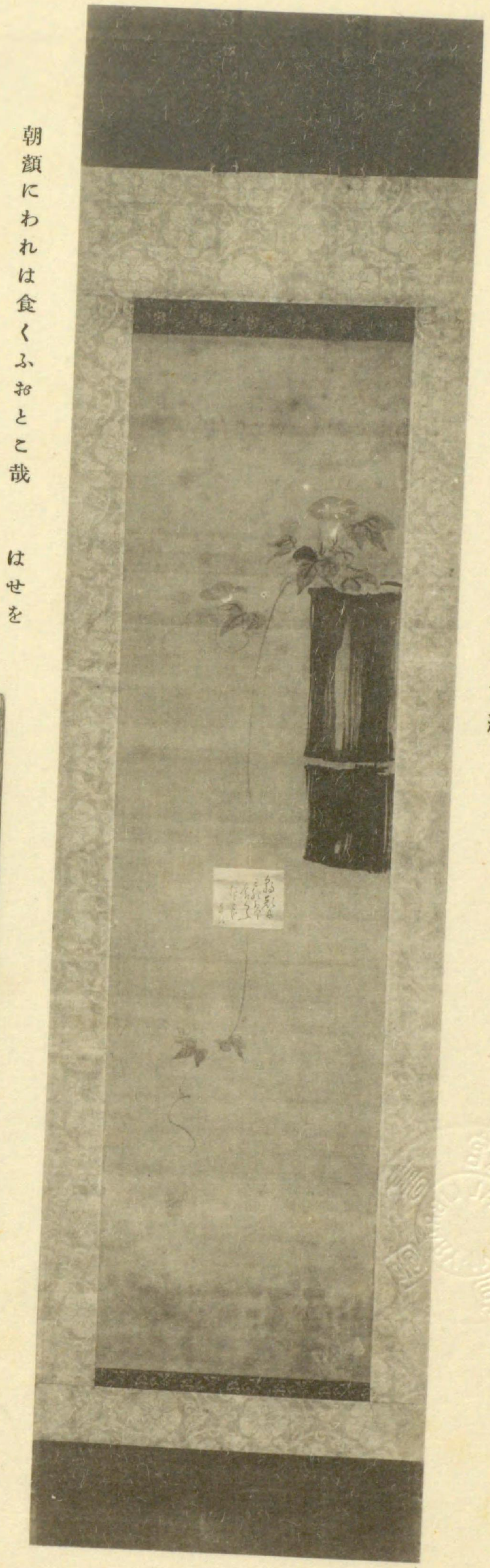
ほろ〳〵と
山吹ちるか
瀧の音
芭蕉桃青
許六畫

芭蕉翁　葛の葉書讃

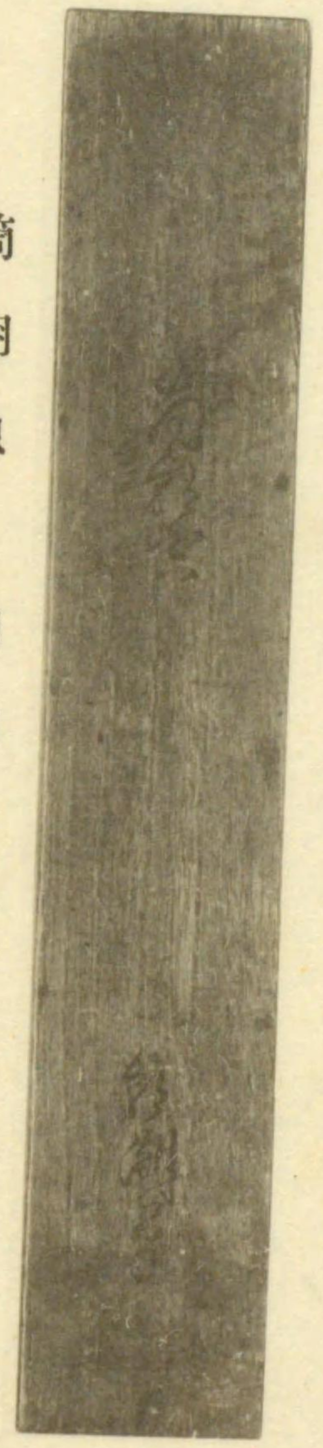


葛の葉のおもてみせけりけさのしも　はせを

朝湖朝顔の書　芭蕉翁小色紙

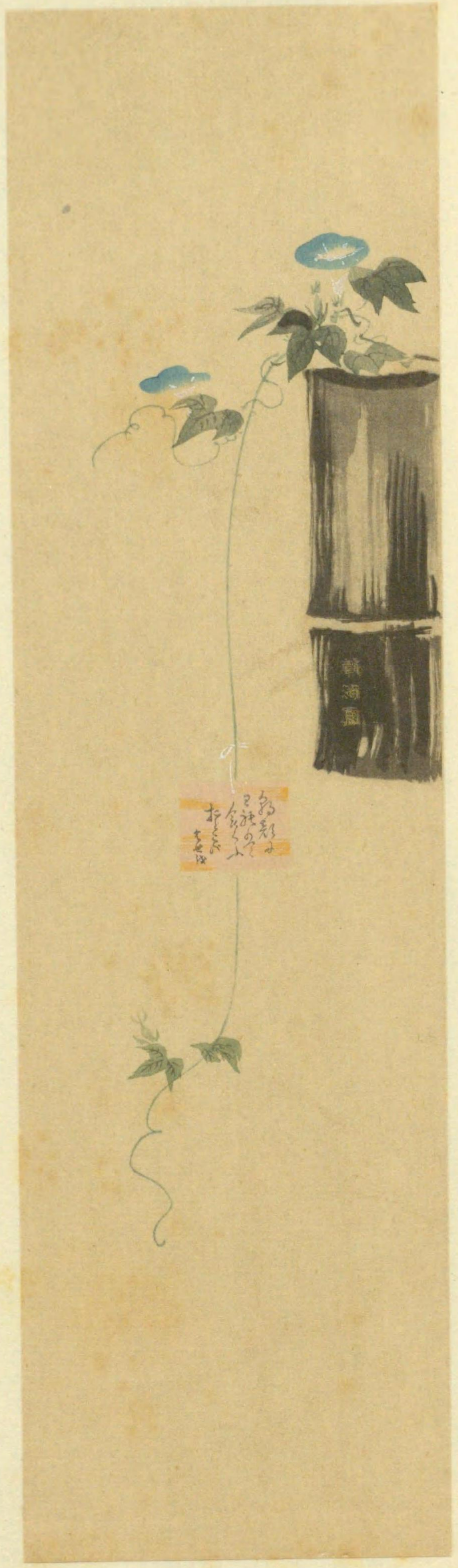


朝顔にわれは食くふおとこ哉　はせを



筒朝皃　朝潮筆

山口素堂箱書

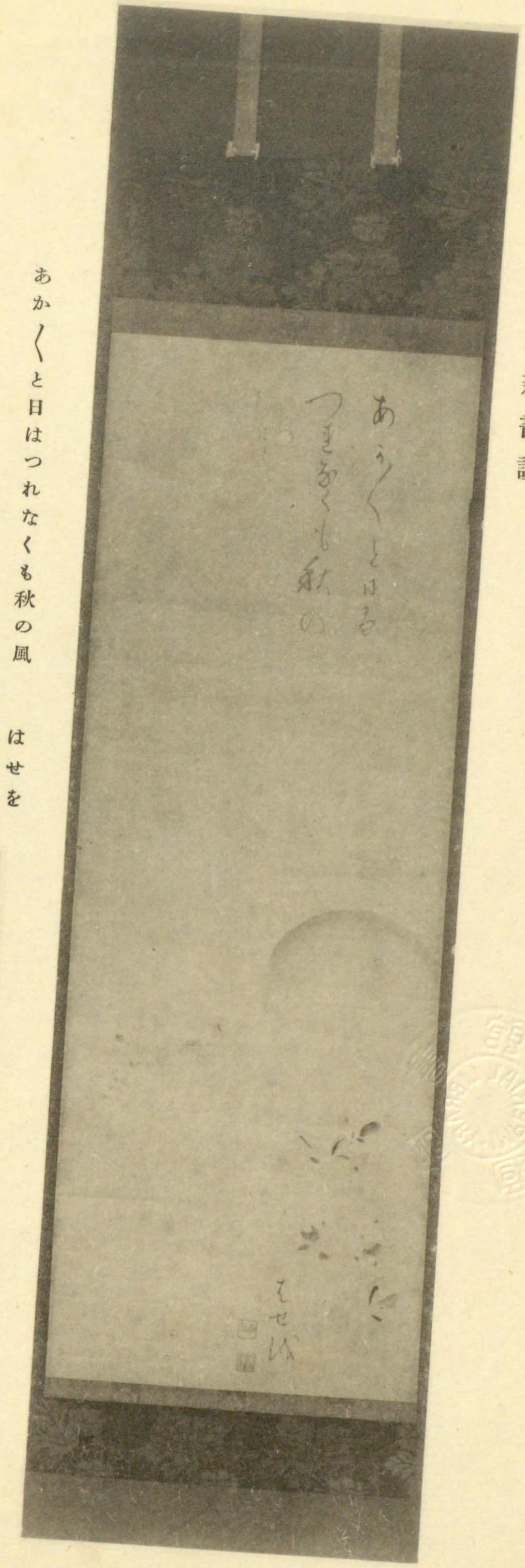


竹筒朝顔の畫　芭蕉翁小色紙

朝顔にわれは食くふをとこ哉　はせを

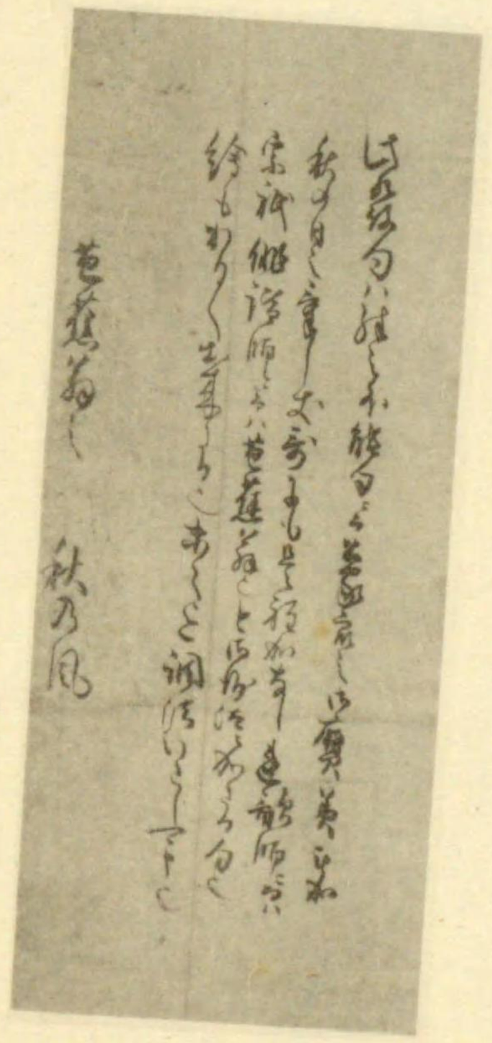
[illegible]　[illegible]

芭蕉翁　入日に萩書讃



あか〳〵と日はつれなくも秋の風

はせを



杉風添書

IMPERIAL LIBRARY

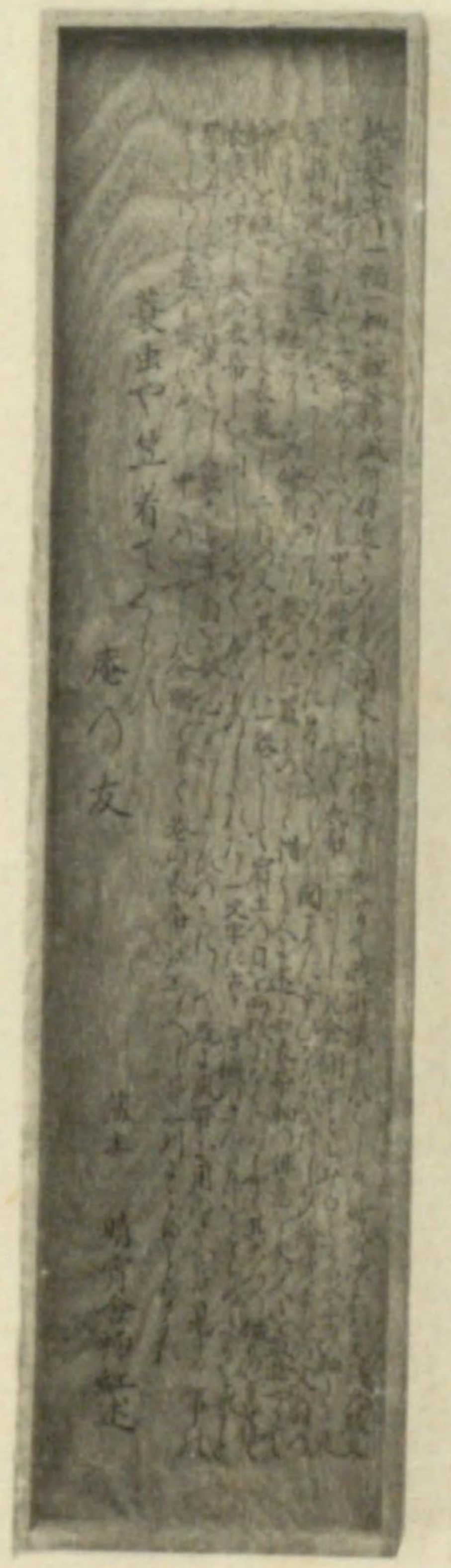
みのむし幅

朝湖畫

芭蕉翁讃

みのむしのねをきゝにこよ草の庵

はせを



此蓑虫の一幅一軸は鯉屋杉風所持近きころまて同家に持傳へしかゆへ有て我所藏とすはしめに繪讃次にかな文詩文跋文ともに繼つらねて一卷たりといへとも中比修理せしとみへて表帋にあたらしき金襴をもちゐ白々たる象牙の軸たり是蕉翁杉風か俳道の俗をうしなへるかたちありこゝにおゐてつら〱閲するに幸ひなるかなはしめの繪讃素堂の文翁の跋ともにいつれも繼口ありこの繪讃をたゝ卷の口に置ことのいと惜くまへに述る如表帋軸の俳意を失なへるを取捨やかて繪讃を繼口よりとりて表装し二翁の文は其まゝに一卷として賓主の目を兩様になくさめはやと其ころの機ものを尋得て表装の中と卷の表帋とを同うしてかくこそはものしたれたゝ一文字に古き唐機のきんらむをもちゐたるを我また驕れりとかむる罪もあらん歟こは蕉翁を敬ふ心をあらはすのみにして既に風帯に用ゐさるを見て事のたらさる意を察すへし中ころあやしき金襴をもて卷の表帋をしるへして一列にみることなかれ

蓑虫や笠着てくらす庵の友

藏主晴宵舍柳紅述

みのむし幅添巻

まねきに應してむしの
ねをたつねしころ

素堂主人

みのむし／＼聲のおほつかな
きをあはれふちゝよ／＼となくは
孝にもつはらなるをいかに
傳へて鬼の子なるらん清女か
筆のさかなしやよし鬼なり
とも瞽叟を父として舜
ありなむちはむしの舜ならんか
みのむし／＼聲のおほつかな
くてかつ無能なるをあはれむ
松蟲は聲の美なるかために
籠中に花野をなき
桑子はいとをはくによりからうして
賤の手に死す
みのむし／＼無能にして
静かなるをあはれふ故蝶は花
にいそかしく蜂はみつを
いとなむにより往來をたやかなら
す誰か惱にこれを
あまくするや
みのむし／＼かたちのすこしき
なるをあはれふわつかに一滴を
うれは其身をうるほし一葉
をうれはこれかすみかとなれり
龍蛇のいきほひあるもおほくは
人のために身をそこなふしかし
汝かすこしきなるには
みのし／＼漁父の一緡を
たつさへたるに同し漁父は
魚をわすれす風波にたえ
す幾度かこれをときて
さけにあてんとする太公すら文
王を釣のそしりあり子陵
漢皇に一味の閑をさまたけらる
みのむし／＼たま蟲ゆふへに
袖ぬらしけむ田みのゝしまの
名にかくれすやいけるものたれか
此まとひなからん鳥は見てた
かくあかり魚は見てふかく入ル
遍昭か蓑をしほりしも
ふる妻を椅わすれさるなり
みのむし春は柳につき
そめしより櫻のちりにすかりて
定家のこたつを起し秋は
荻ふく風に音をそへて寂
蓮に感をすゝむこからし
の後はうつせみに身を習ふや
からも身もともにすつるや

又以男文字云古風

蓑蟲蓑蟲　落入牕中
一絲欲絶　寸心共空
似寄居狀　無蜘蛛工
白露甘口　青苔粧躬
從容侵雨　飄然乘風
栖鴉莫啄　家童禁叢
天許作衣　我儕稱翁
脫蓑去隱　誰識其終

貞享至南日誌

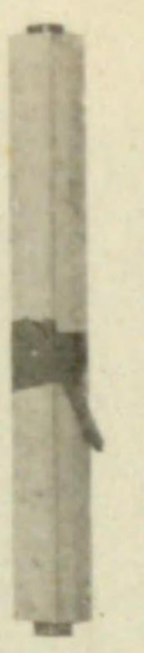
丁亥郎蚊足書

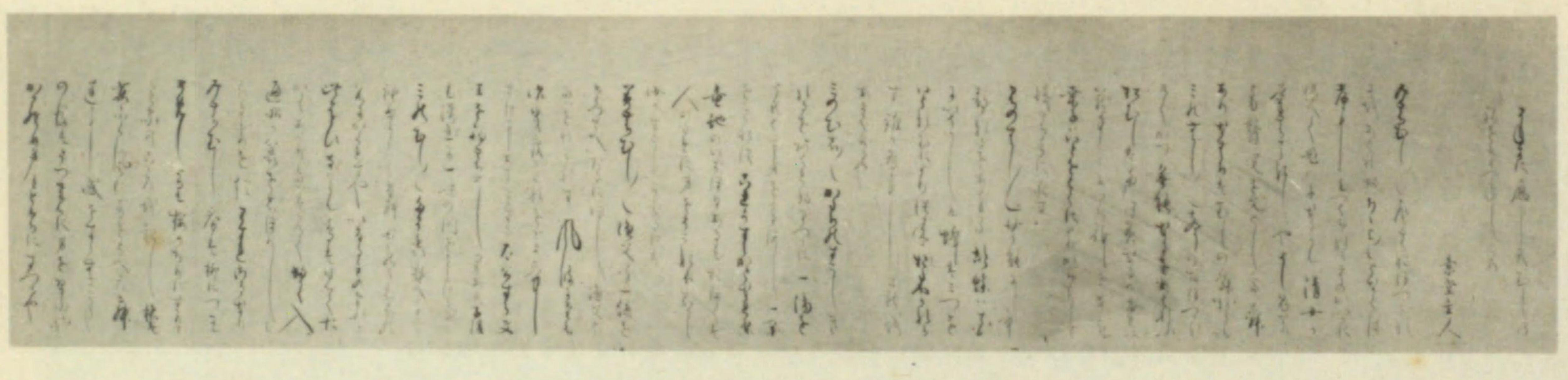
草の戸さしこめてものゝ侘しき
折しも偶蓑蟲の一句をいふ
我友素翁はなはた哀かりて
詩を題し文をつらぬ其詩や錦
をぬひ物にし其文や玉をまろ
はすかことしつら／＼みれは離騷
のたくみ有にゝたり又蘇新黄
奇ありはしめに虞舜曾參
の孝をいへるは人におしへを
とれと也其無能不才を感る
事はふたゝひ南花の心を見よ
となり終に玉むしのたはれは
色をいさめむとならし翁に
あらすは誰か此むしの心をしらん
静にみれは物皆自得すと
いへり此人によりてこの句をしる
むかしより筆をもてあそふ人の
おほくは花にふけりて實を
そこなひみを好て風流を忘る
此文やはた其夜を愛すへし
其實猶くらひつへしこゝに
朝湖と云有この事を
傳へきゝてこれを畫きことに
丹青淡して情こまやか也
こゝろをとゝむれは蟲うこくかことく
黄葉落るかとうたかふ
みゝをたて是れを聽けは
其むし聲をなして秋の
かせそよ／＼と寒し
猶閑窻に閑を得て兩士の
幸に預る事蓑むしの
めいほくあるにゝたり

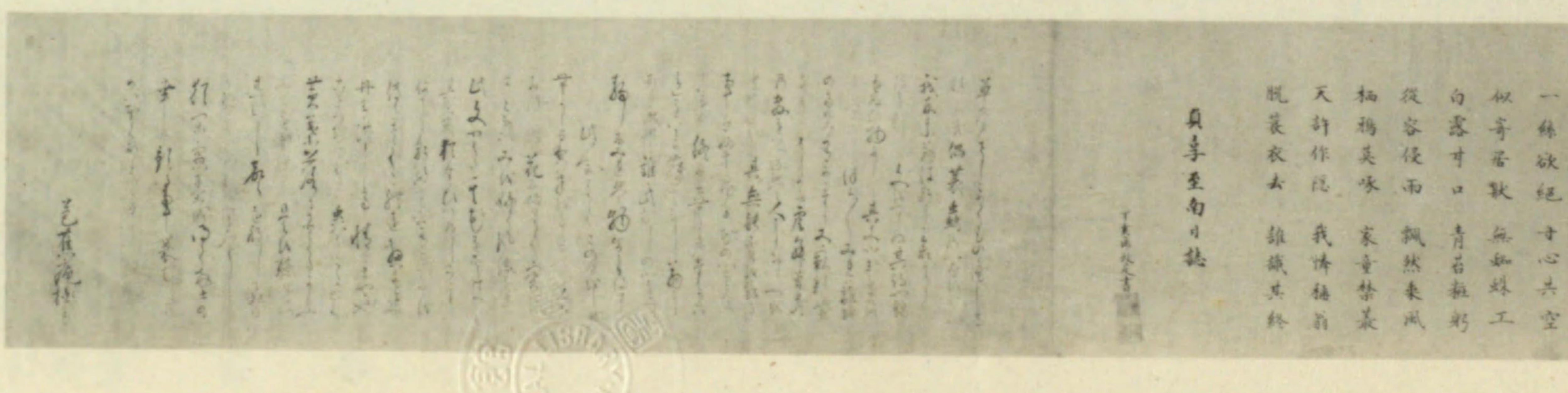
芭蕉庵桃青

みのむし幅添巻

芭蚊素
蕉足堂







芭蕉翁　短冊

歳旦　元日やおもへはさひし秋の暮　桃青

元朝心感有　餅を夢に折結齒朶の草枕　華桃青

誰やらかかたちに似たりけさの春

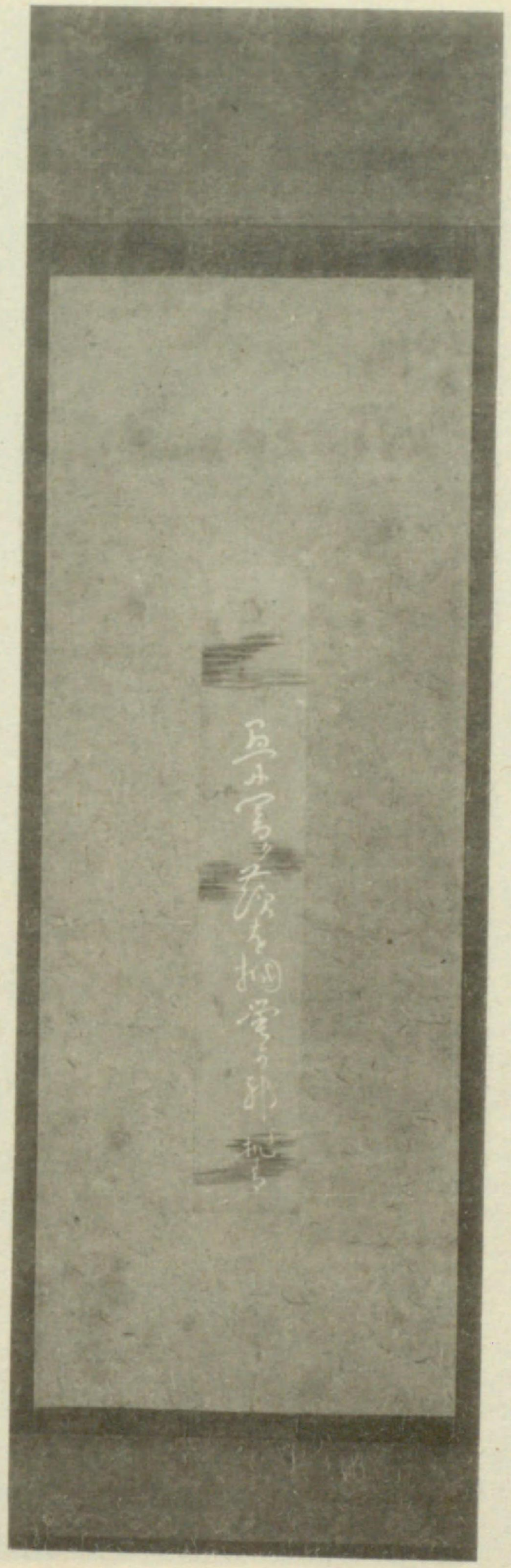
たかむこそしたにもちおふうしのとし　はせを

ほうらいにきかはやいせの初便　はせを

芭蕉翁　鉢たゝき畫讃

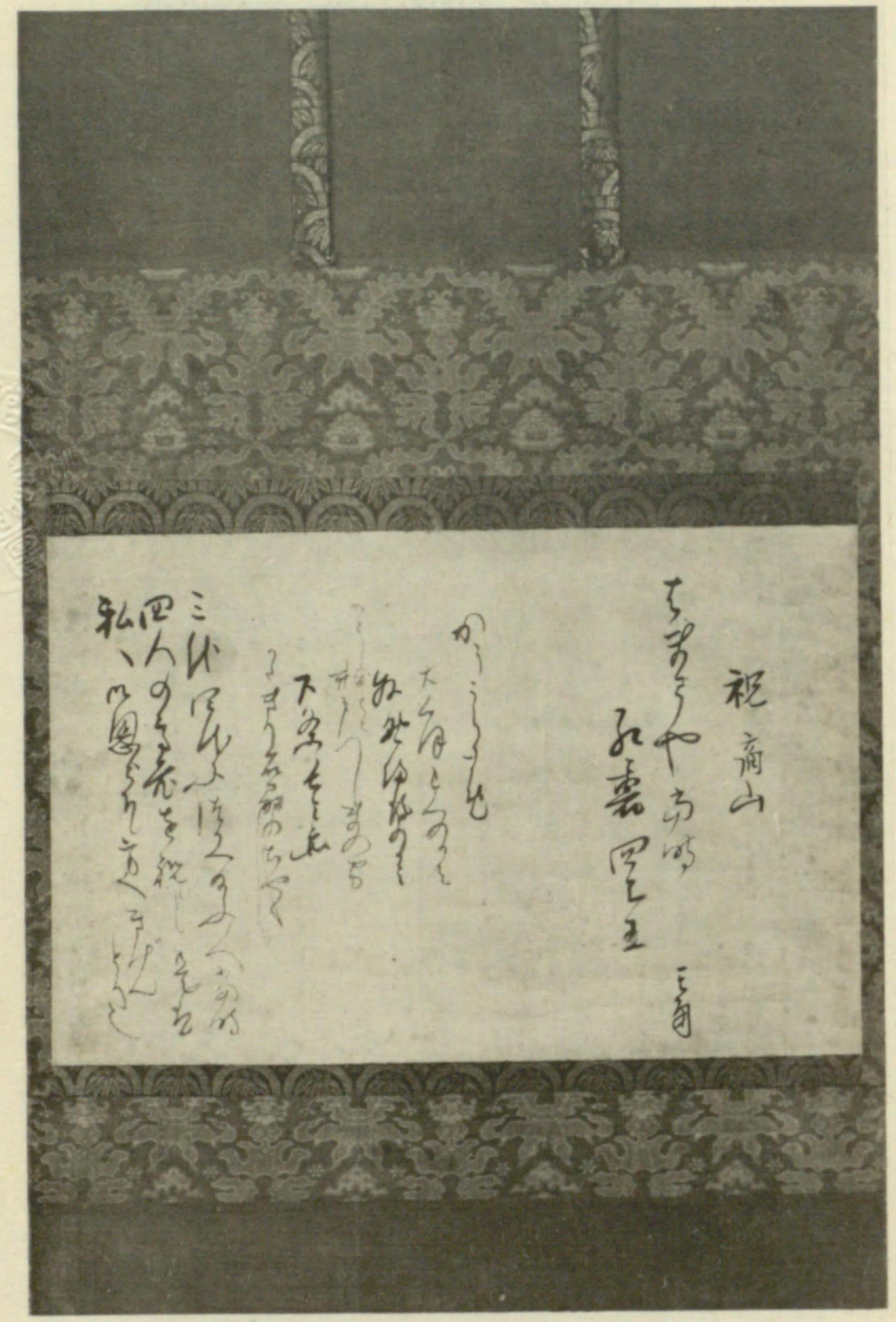
長嘯のはかもめくるか鉢たゝき　芭蕉

芭蕉翁　白字短冊

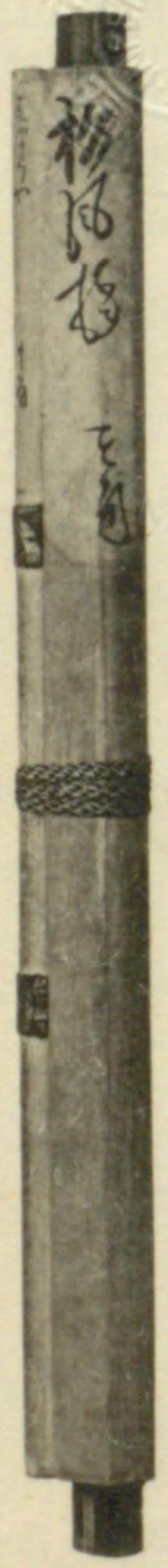


愚に闇ク茨を摑螢かな　桃青

其角　はま弓の句

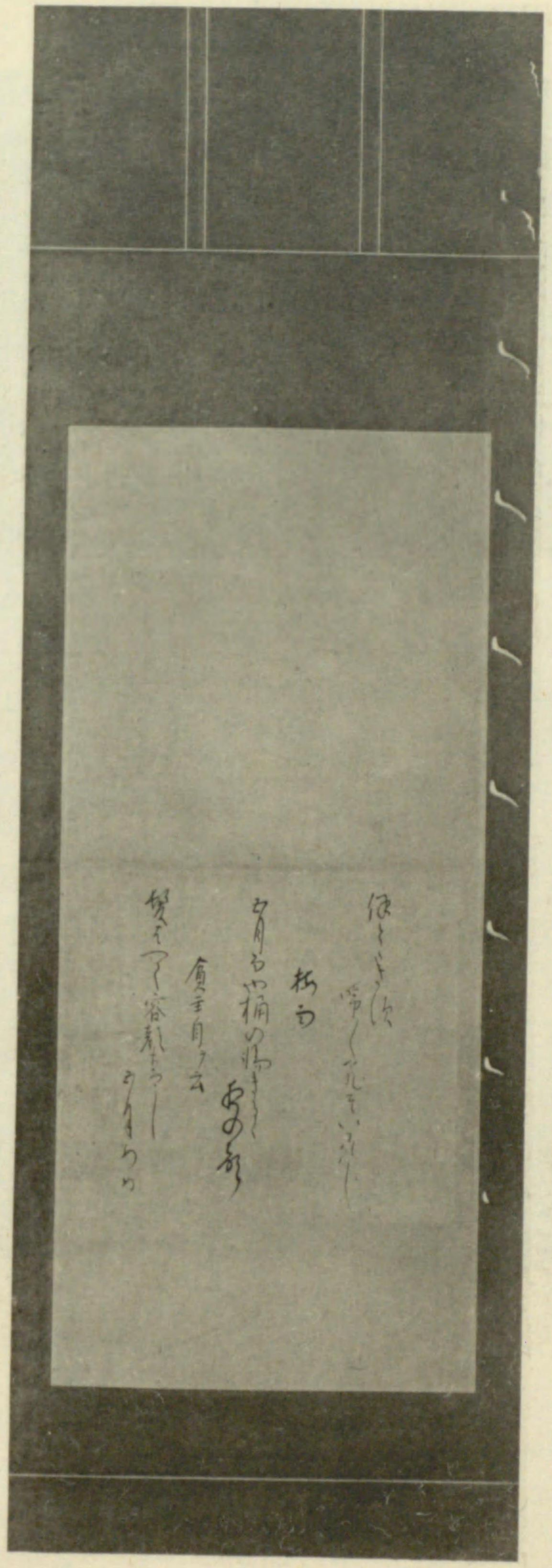


祝商山
はま弓や當時
　紅裏四天王　　其角
からら御免
大久保もくのかみ
牧野備後のかみ
御としおとこ
井戸つしまのかみ
下　條　長　兵　衛
かたぎり石州のちやくし
三代四代につかへ給ふ當時
四人の高老を祝申候是は
私へ御恩被下候方へきげん
　とり也



巻止　其角

芭蕉翁　三句詠草



ほとゝきす啼〳〵飛そいそかはし

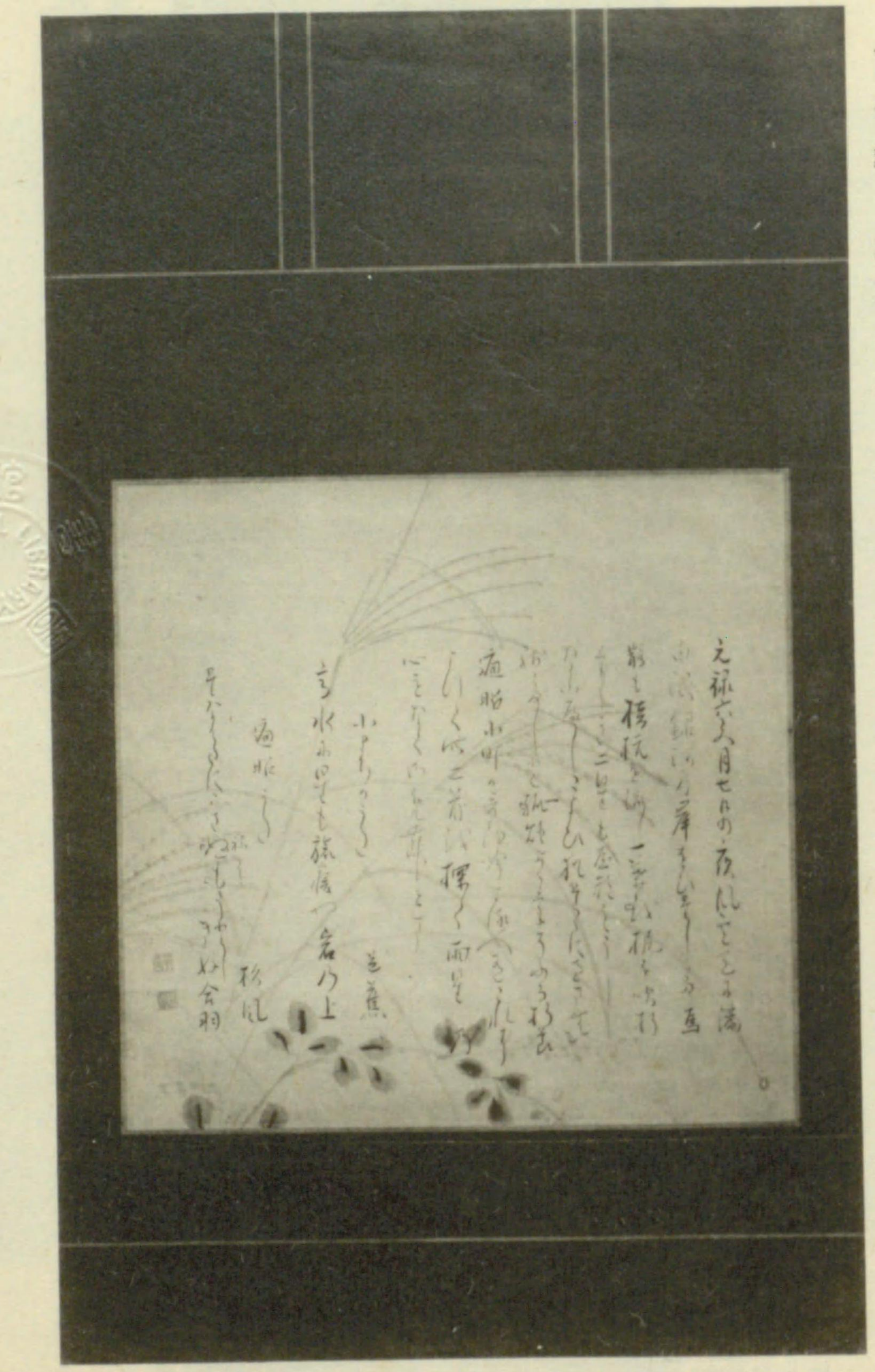
梅雨

五月雨や桶の輪きるゝ夜の聲

食主自ヲ云

髪はへて容顔青し五月あめ

芭蕉翁　秋草書　七夕句文

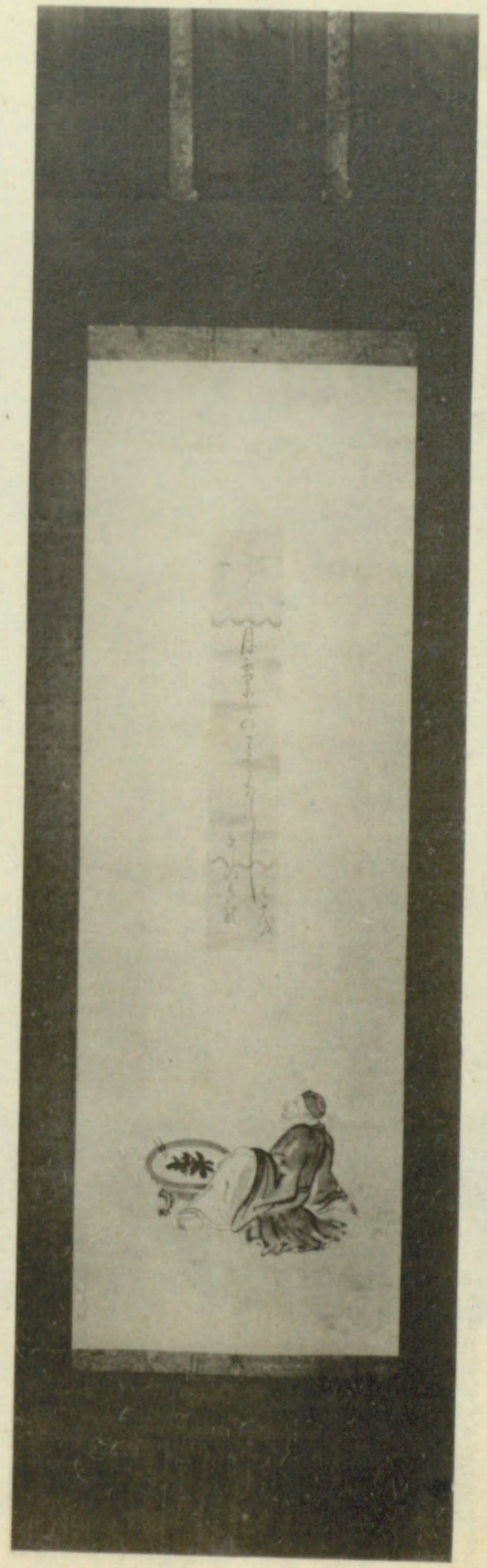


元祿六文月七日の夜風雲天に滿
白浪銀河の岸をひたして烏
鵲も橋杭を流し一葉梶を吹折
氣しき二星も屋形をうし
なふへしとよひ猶たゝに過さむも
殘多しと一燈かゝけそふ折節
遍昭小町か歌を吟する人有これに
よつて此二首を探て雨星の
心をなくさめんとす

小まちかうた　芭蕉
高水に星も旅寝や岩の上
遍昭うた　杉風
たなはたにかさねはうとしきぬ合羽

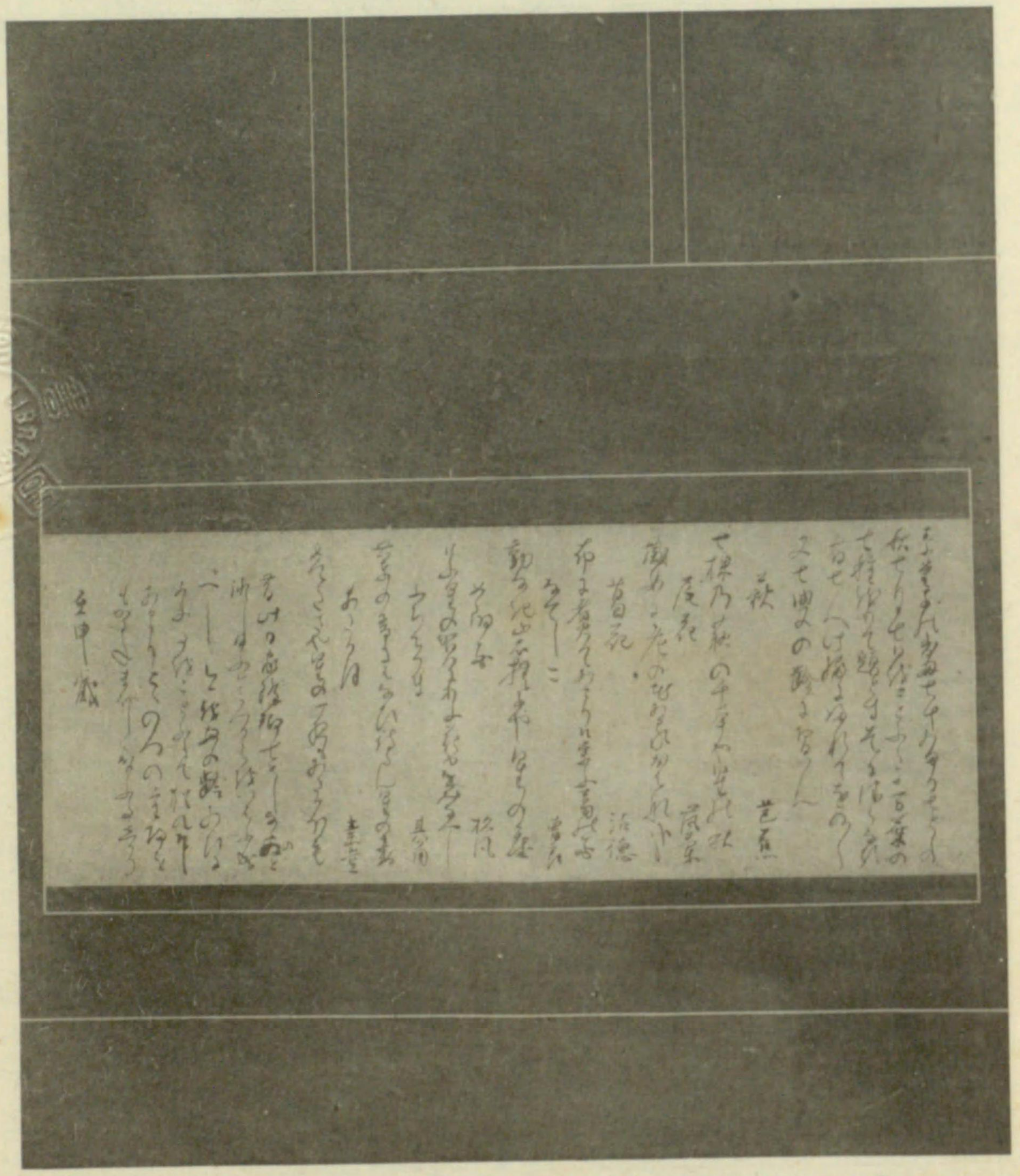
芭蕉翁短冊

杉風筆　芭蕉翁像



月雪とのさはりけらしとしのくれ　はせを

芭蕉翁筆　素堂壽母七十七賀句



素堂子の壽母七十あまり七としの
秋七月七日をことふくに万葉の
七種をもて題とす是につらなる
者七人此緣にふれてをの〳〵
又七叟の齡に習はん

　萩　　　　　　　　芭蕉
七株の萩の千本や星の秋

　尾花　　　　　　　嵐蘭
織女に老の花あるおはな哉

　葛花　　　　　　　沾德
布に煮てあまりそ榮ふ葛の花

　なてしこ　　　　　曾良
動なき岩撫子や星の床

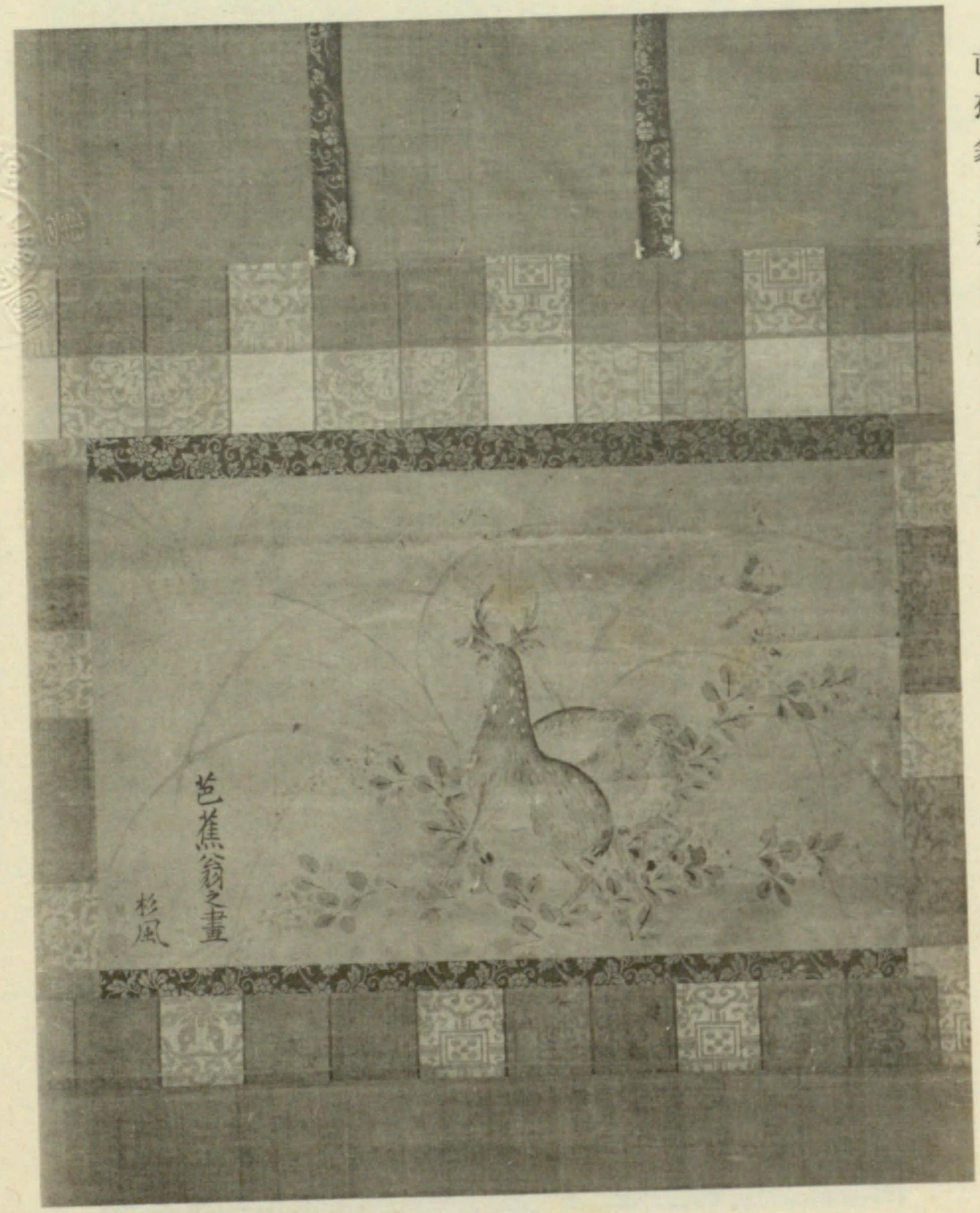
　女郎花　　　　　　杉風
けふ星の賀にあふ花やをみなへし

　ふぢはかま　　　　其角
蘭の香にはなひ待らん星の妻

　あさかほ　　　　　素堂
めてたさや星の一夜もあさかほも

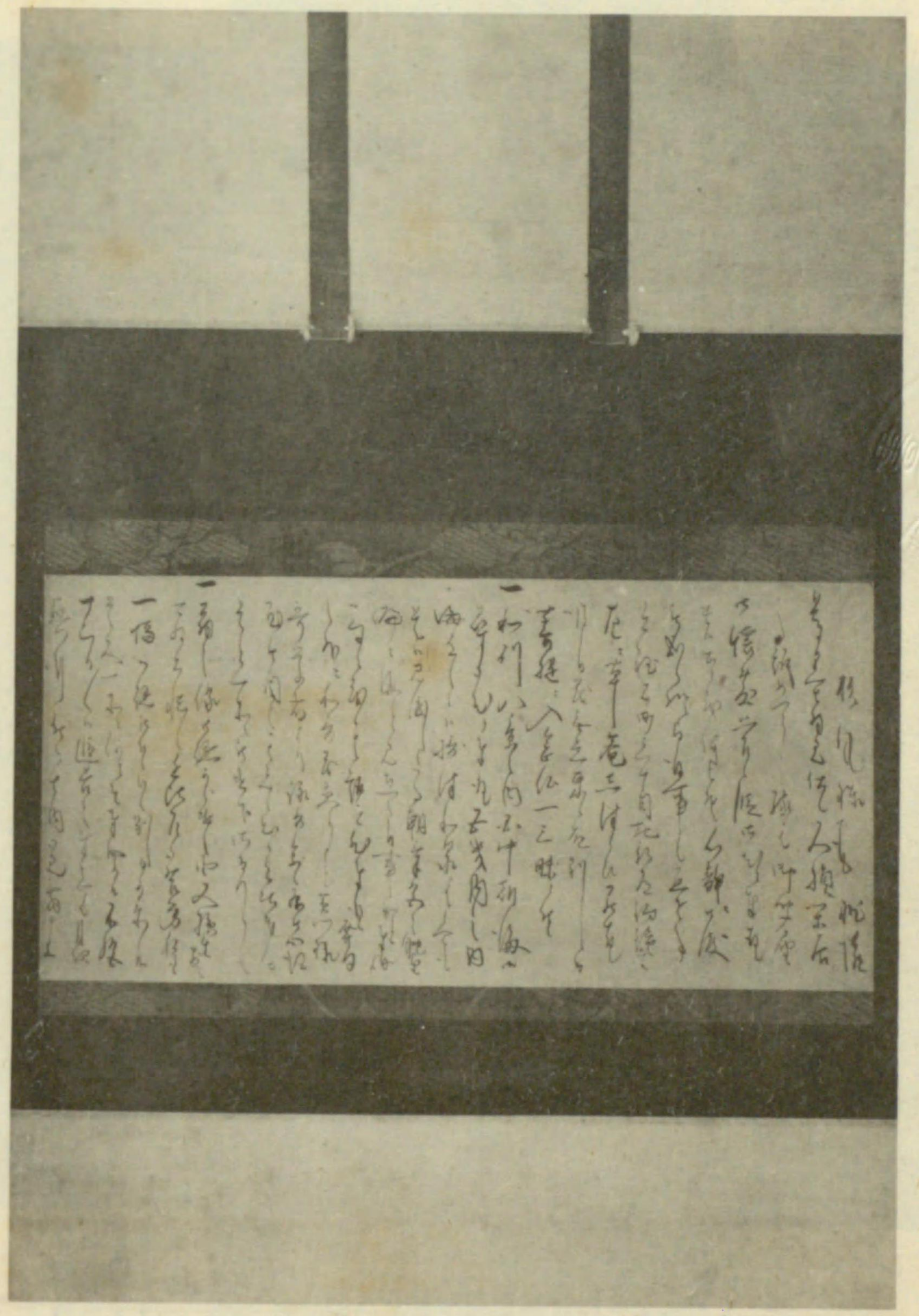
昔此日家隆卿七そしなゝのと
詠し給ふてみつからをいはふ成
へし今を母の齡あひに
あふ事をことふきて猶九そし
あまりこゝのつの重陽を
もかさねまほしくおもふ事しかり

壬申歲



芭蕉翁　萩に鹿の畫

杉風紙中袱

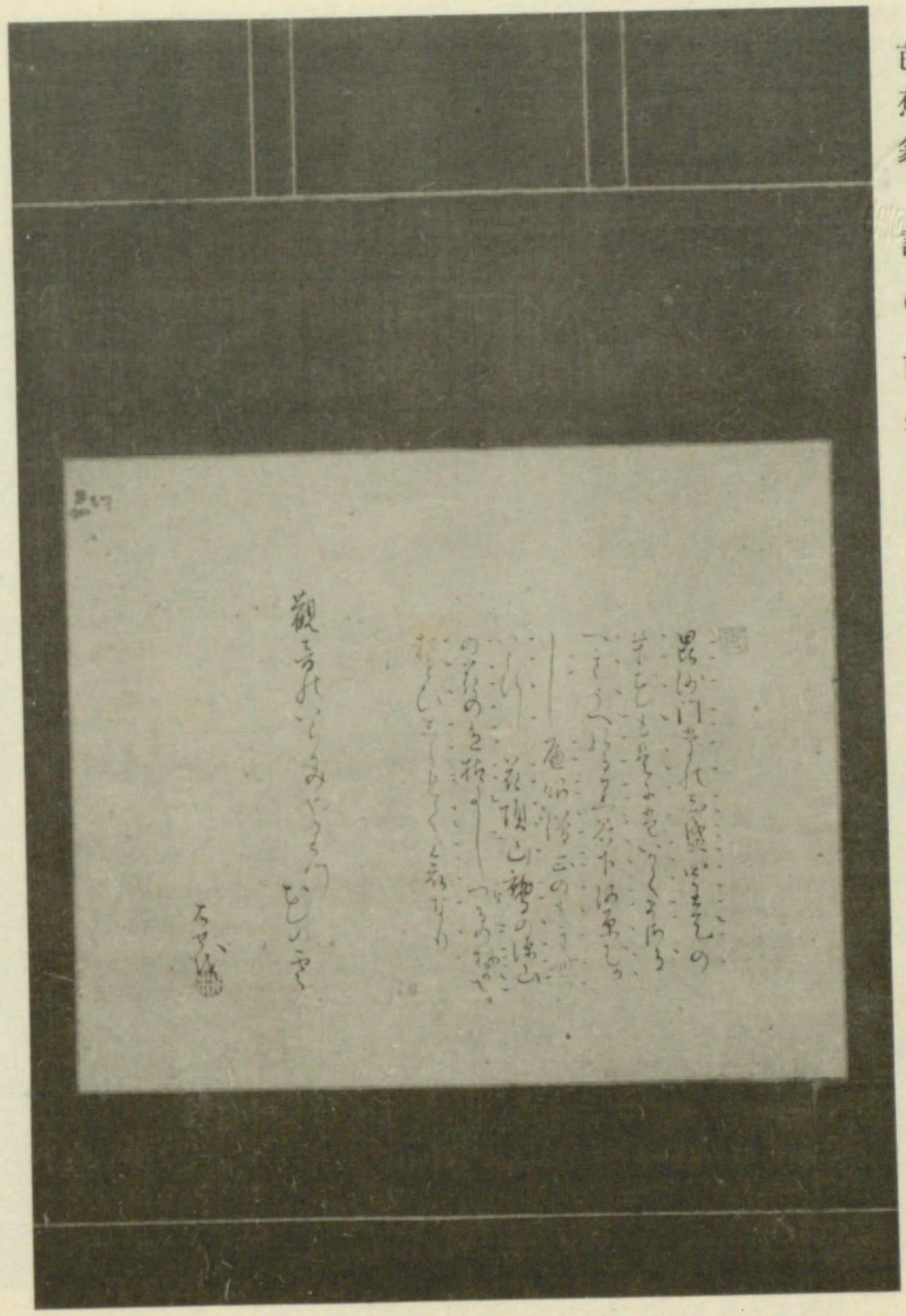


桃隣　杉風宛文

杉風樣　桃隣

尊墨拜見仕候又損閑居
之趣めつらし緣にて御聞届
御懷歎思召候段御尤に奉存候
貴公にも何とそ心靜ニ御渡
被成候樣に與存事に候愚老事
今程石町三丁目北新道釣鐘堂
左ニ草庵しつらひ罷在候
明日も無覺束候故別し而
菩提ニ入念佛一三昧ニ御座候
一和州八景之內國中朝海御
尋御尤ニ奉存候五畿內之內
海有之候は攝津和泉ニて候へ
とも
是は見渡したる朝氣色之眺望
偏ニ海と見立たる事かと奉存
より
御句にも其趣可然奉存候發句
之外ニ和歌も交り申候黃門樣
歌學者より詠歌參候爲御心得
懸御目候其元之出來次第ニ
そと一所ニ被遣下さるへく候
一翁之像御認可被遣之由又損生
前之
可爲大悅候近頃乍御苦勞私
にも
一幅御認被下候はゝ別而可
忝候
是又一所に何とそ奉冀候不絕
十二日〳〵は追善之寸志にて
月次
興行仕候其內御見舞申上

芭蕉翁謠の前書　花の句



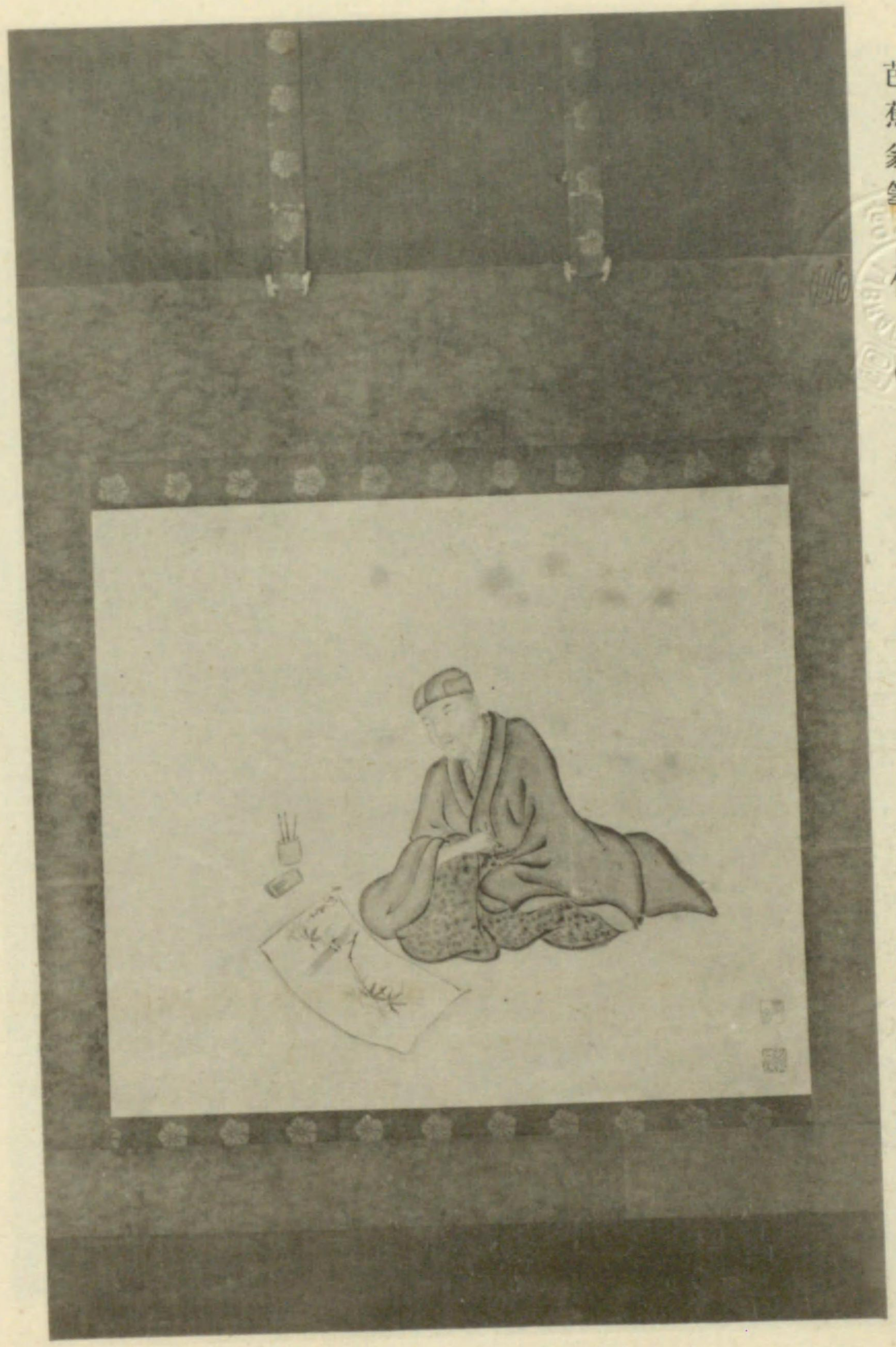
昆沙門堂の花盛四王天の
榮花も是にはいかでまさる
へきうへなる黒谷下河原むか
し遍昭僧正のうき世ヲ
いとひし花頂山鷲の深山
の花の色枯にしつるの林まて
おもひしられて哀なり
觀音のいらかみやりつ花の雲
はせを

杉風　芭蕉翁馬上書讃

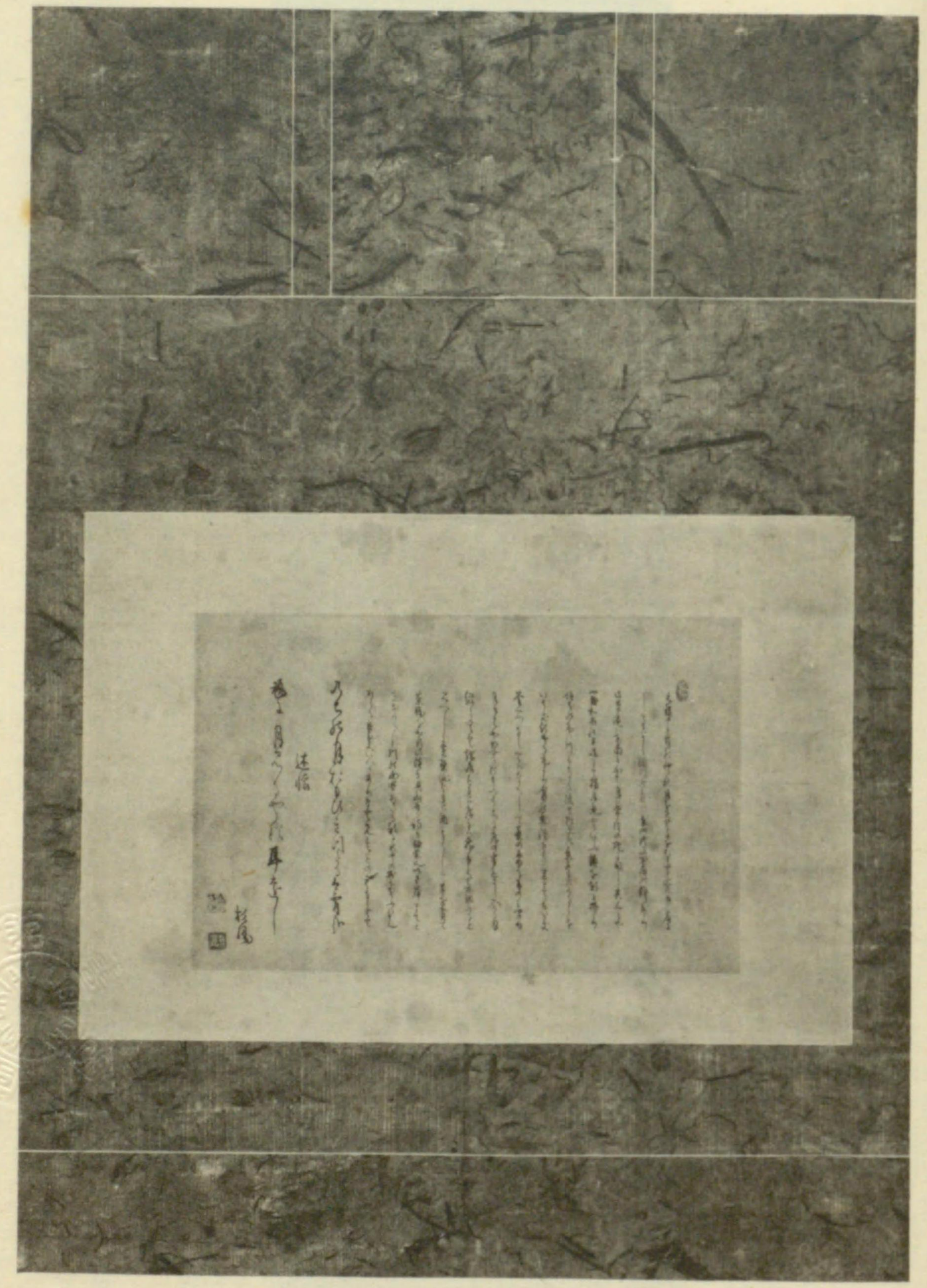
馬ほく〳〵我を繪に見ん夏野かな
芭蕉翁之吟

杉風筆芭蕉翁像

芭蕉翁筆竹の繪



杉風月二句



杉風月の句の文

元祿十とせの仲秋月を見むことをおもふに宿は市店にしてさはかし深川の邊に年比語ふ閑居の僧あり此草庵は東西に向て用は常住の燈に同し其心にや心越和尙の事跡にて指月庵といふ額を軒に掛たり垣ほの外は川もちかく流て猶更の景あれはくるゝをいそき行ける元より貧の樂僧なれは器とてはちいさき釜一つならではなくして茶のにゆる音のみ聞ゆ月もはや出むおもふうちに庵の半迄さし入ける句を綴らむと端居すれは庵主は勝手に入て物調ふると見へしに黄檗派なれは酒はならうして芋を煮て茶碗を出す此淡き興山谷か詩も眼前也いさ岸まてと立出けるに川の面照りたる影に水中の砂もかそふる斗也かゝる良夜又いつかありなむ先是迄の空ならむと

のちの月おもひきつたる今宵哉

述懐

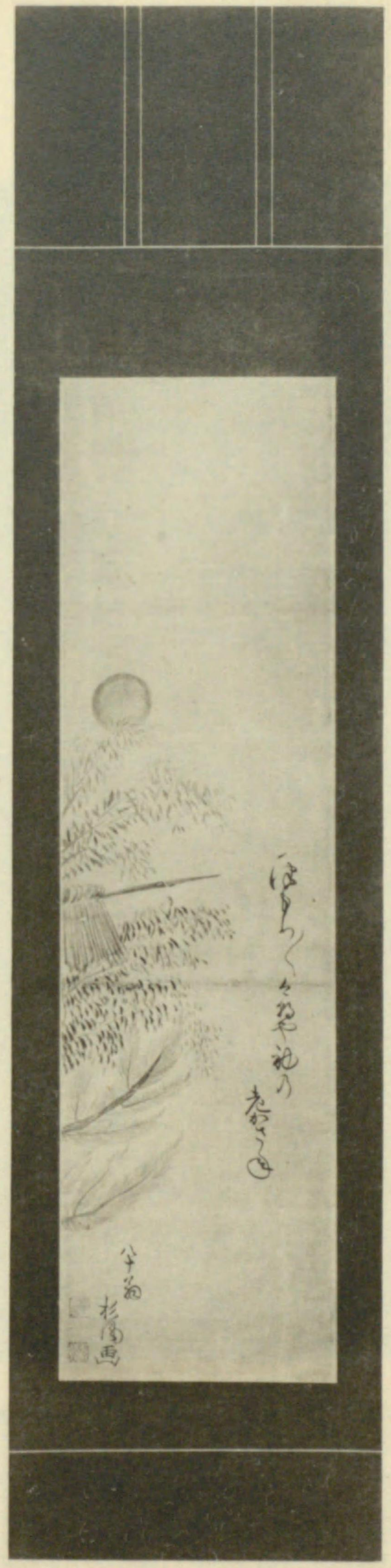
頭に月見るや猶耳遠し

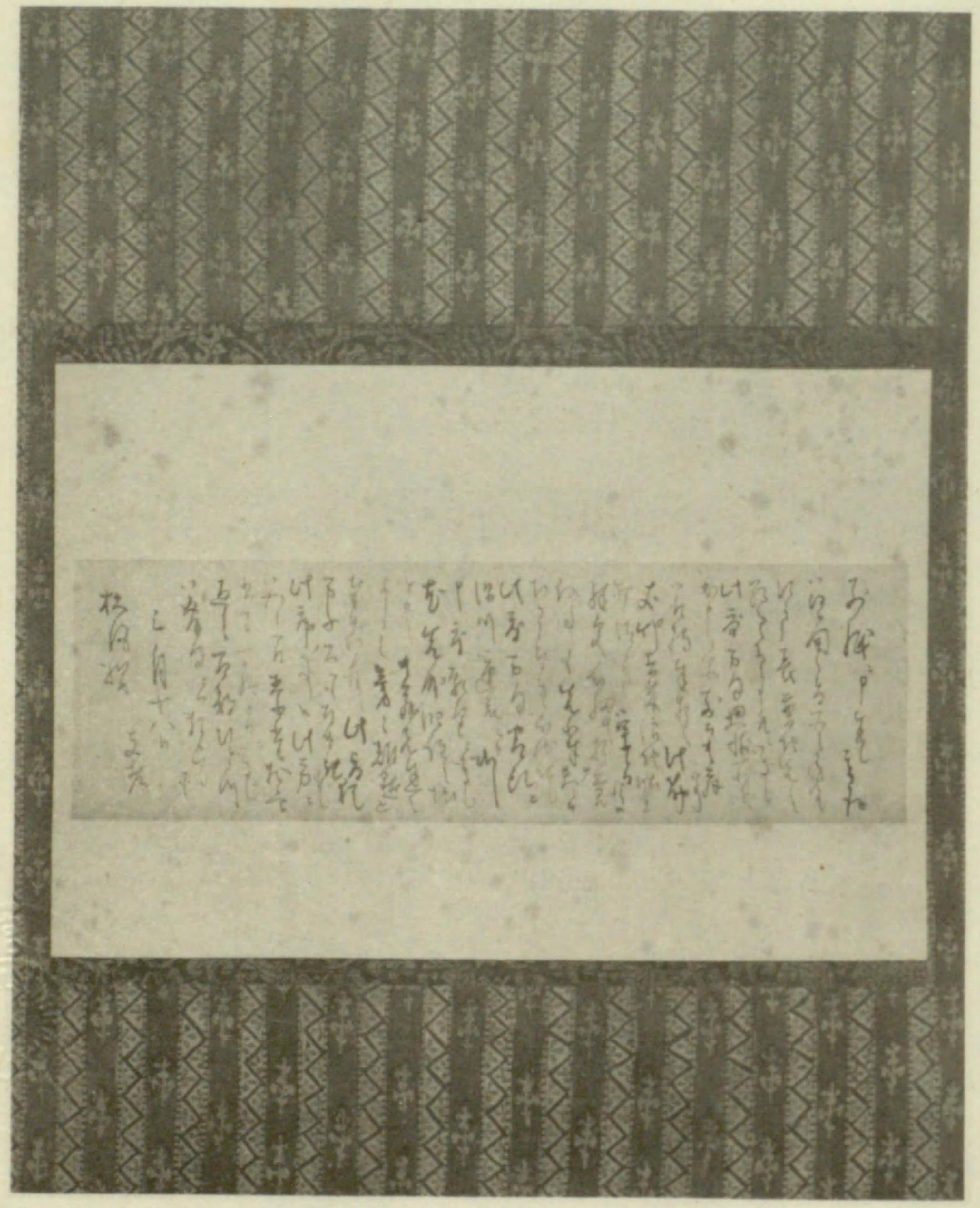
杉風

杉風　松かざり書讃

つもり〳〵今朝や初の老かさね

八十翁　杉風





支考文

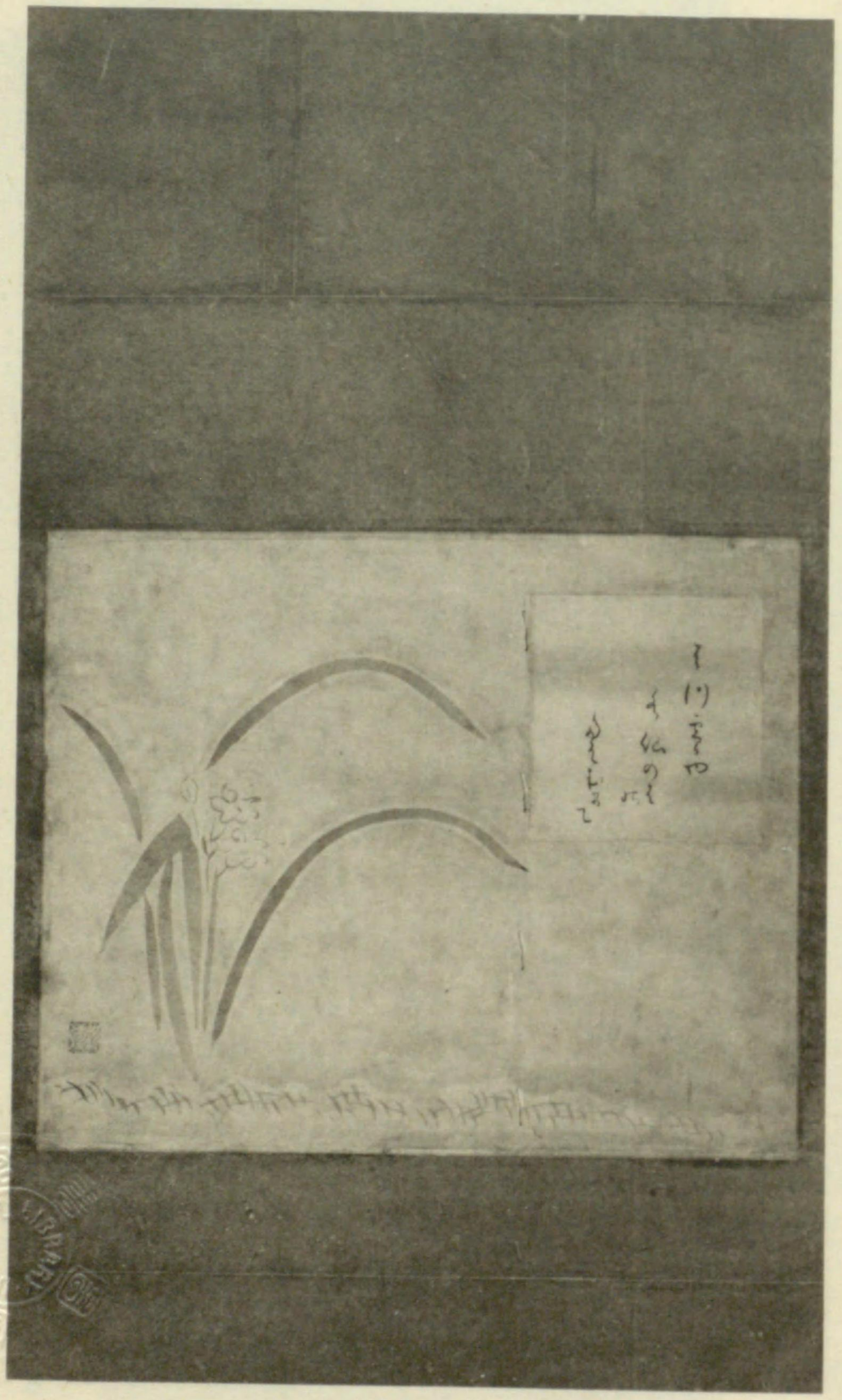
支考の文

別紙ニ申達候其己後
御堅固之旨所々に承及候
江戸表變地先々
驚たる事共に御座候
此度万句廻狀所々へ
出申候所別而貴翁御事
御取持奉頼候此筋
丈艸去來浪化公なと
打つゝき御果候而今は
殊更心細キ折節
何事も先聚失候而
ちからなき心地仕候
此度万句卷頭ニ
深川御連衆ニ而出し
申度願望に御座候
尤先師舊住之地
と申貴翁先達之
よしみ旁々難默止
奉頼存候此旨猶
万子公へもなけき出申候
此序ノ事は此方ニ
而入候間素堂へ頼候へは
書て可給旨ニ御座候
返々百韻ひとつ
御發句ニ而頼上候　己上
三月十八日　支考
杉風様

杉風　芭蕉翁像書讃

さらしなの月を想像て
元日は田毎の日こそこひしけれ
芭蕉翁之吟

杉風　水仙書　芭蕉翁色紙

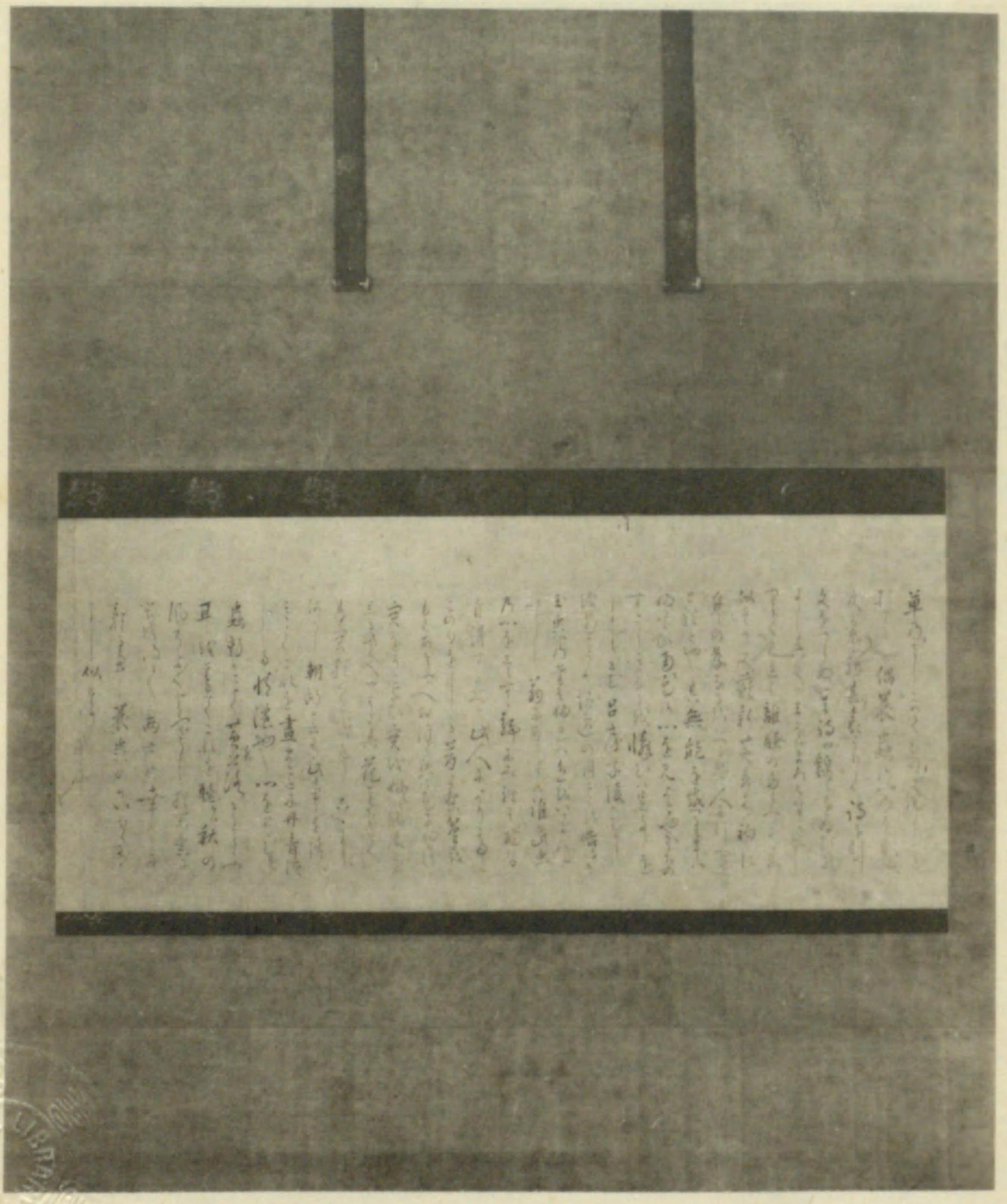


はつ雪や水仙のはのたはむまで

杉風　枯木鹿書讃

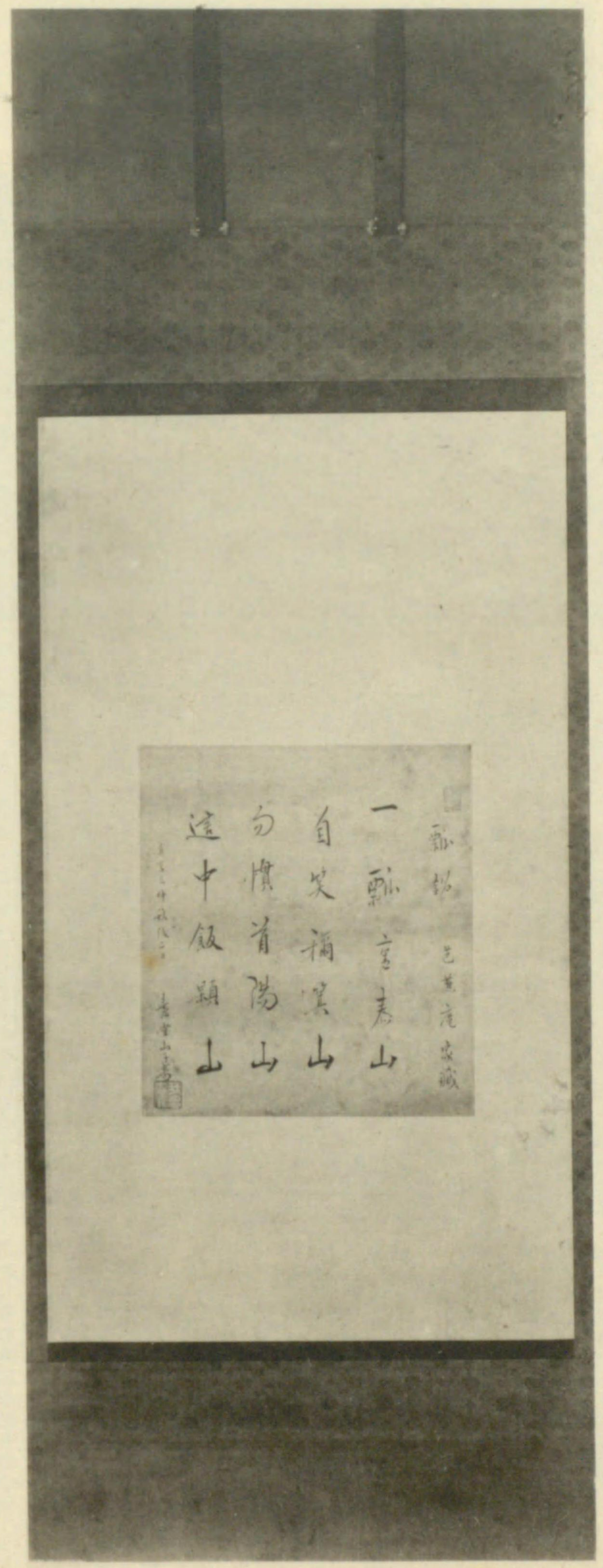
猶更に枯木に鹿の辟淋し　七十七翁杉風

芭蕉翁　みのむし草稿



草の戸さしこめてもの丶侘しき
折しも偶簑蟲の一句を云我
友素翁甚哀かりて詩を題し
文をつらぬ其詩や錦をぬひ物
にし其文や玉をまろはすかことし
つら〳〵見れは離騷のたくみ有に
似たり又蘇新黄奇有初に
舜の孝なるをいへるは人におしへを
とれと也其無能を感る事は
ふたゝひ南花の心を見よと也かたちの
すこしきなるを憐むは足事を
しらしむ呂房子陵かむかし
をひきて隠逸の用意を告るか
玉蟲のたはふれは色をいさめんと
ならし翁にあらすは誰か此虫
の心をしらむ静にみれは物皆
自得すといへり此人によりて
この句をしる昔より筆を
もてあそふ人おほくは花にふけりて
實をそこなひ實を好て風流を
忘る此文やはた其花を愛すへし
其實猶くらひつへしこゝに
何かし朝湖と云有此事を傳へ
きゝてこれを書きことに丹青淡
して情濃也心をとゝむれは
蟲動かことく黄葉落るかとうたかふ
耳をたれてこれを聽けは秋の
風そよ〳〵と寒し猶閑窓に
閑を得て兩士の幸に
預る事簑蟲のめいほく有
に似たり

素堂瓢銘



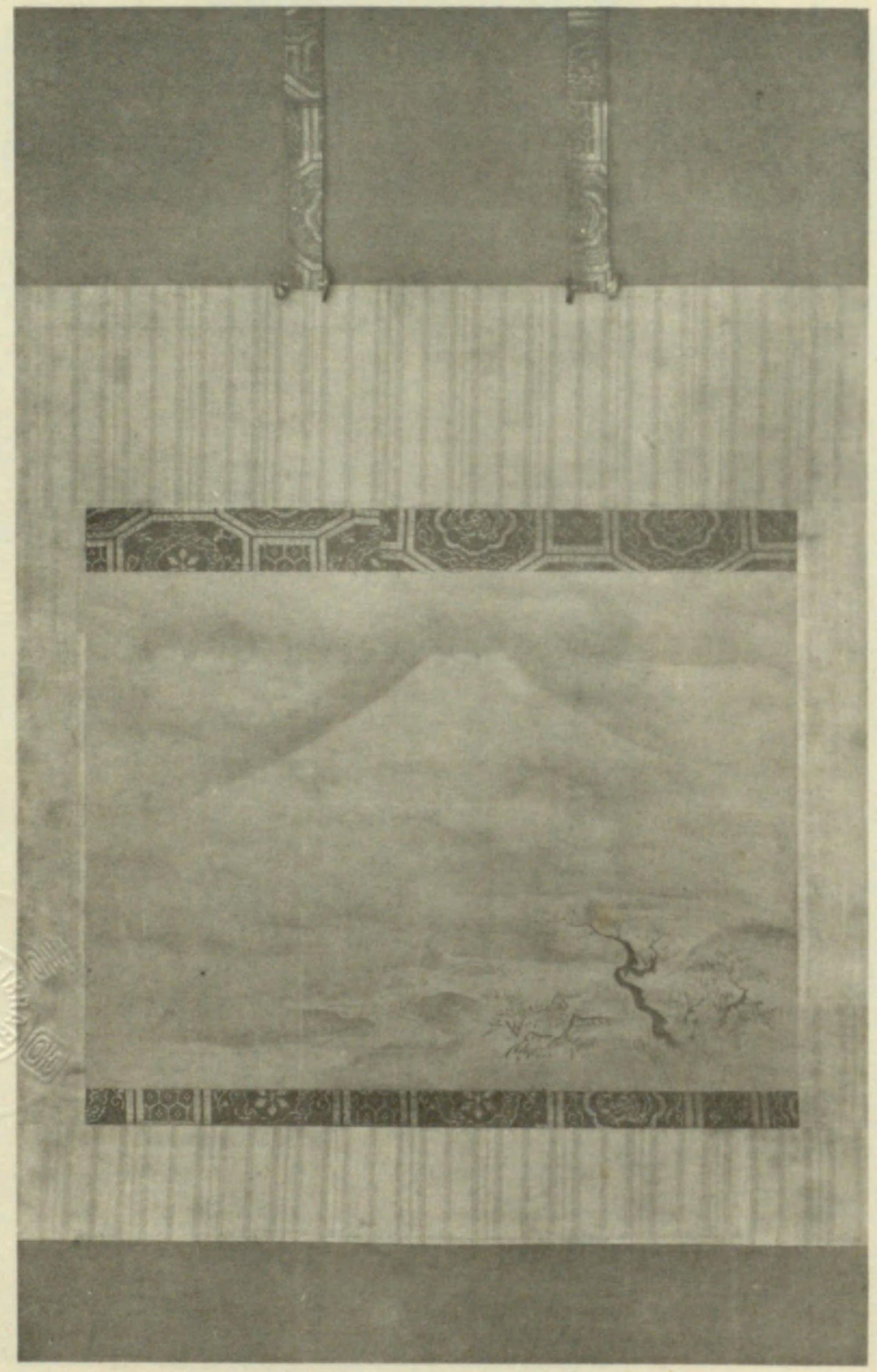
芭蕉庵家藏

瓢銘

一瓢重泰山
自笑稱箕山
勿慣首陽山
這中飯顆山

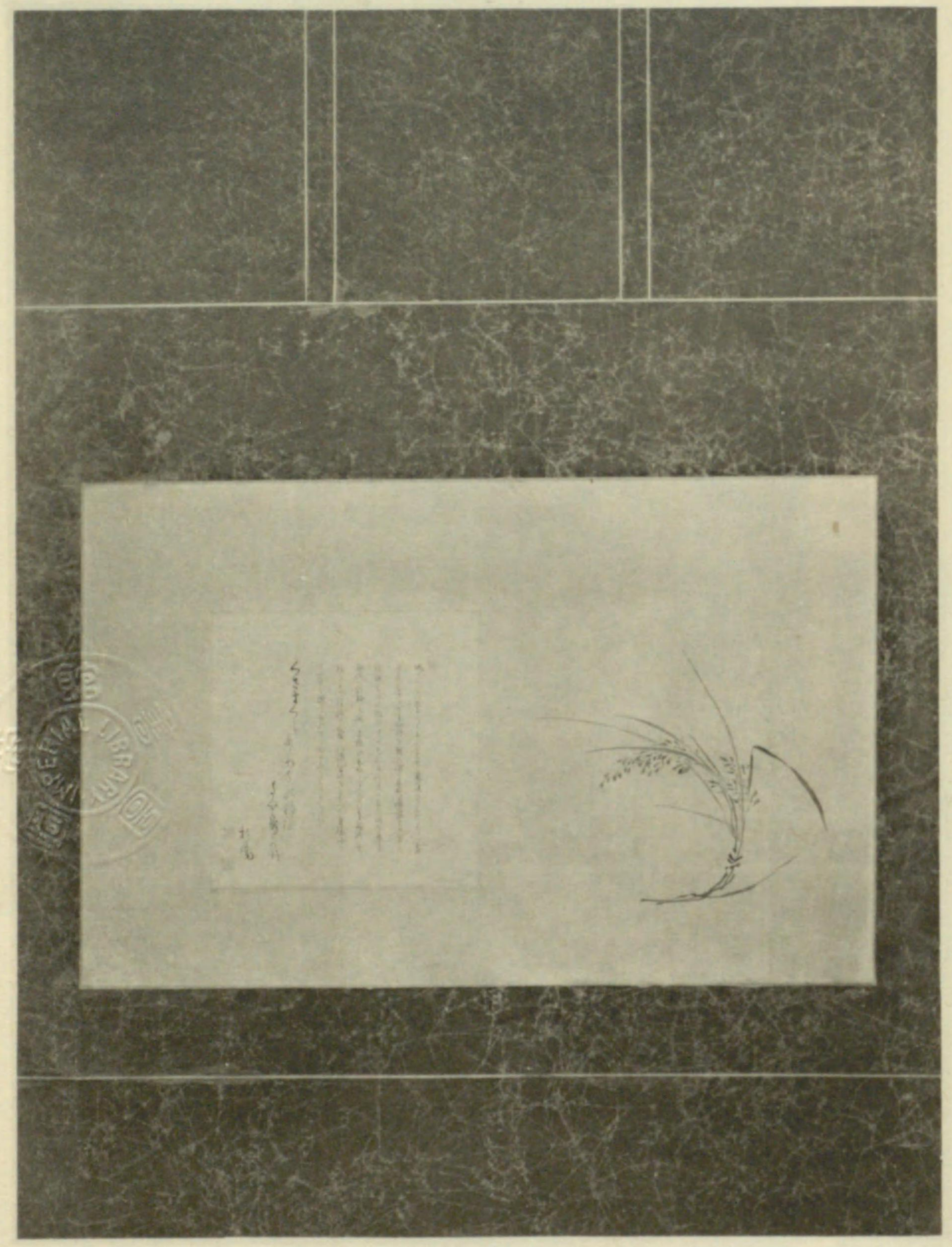
貞享三仲秋後二日　素堂山子書

杉風筆　富嶽遠望



杉風筆　葡萄栗鼠

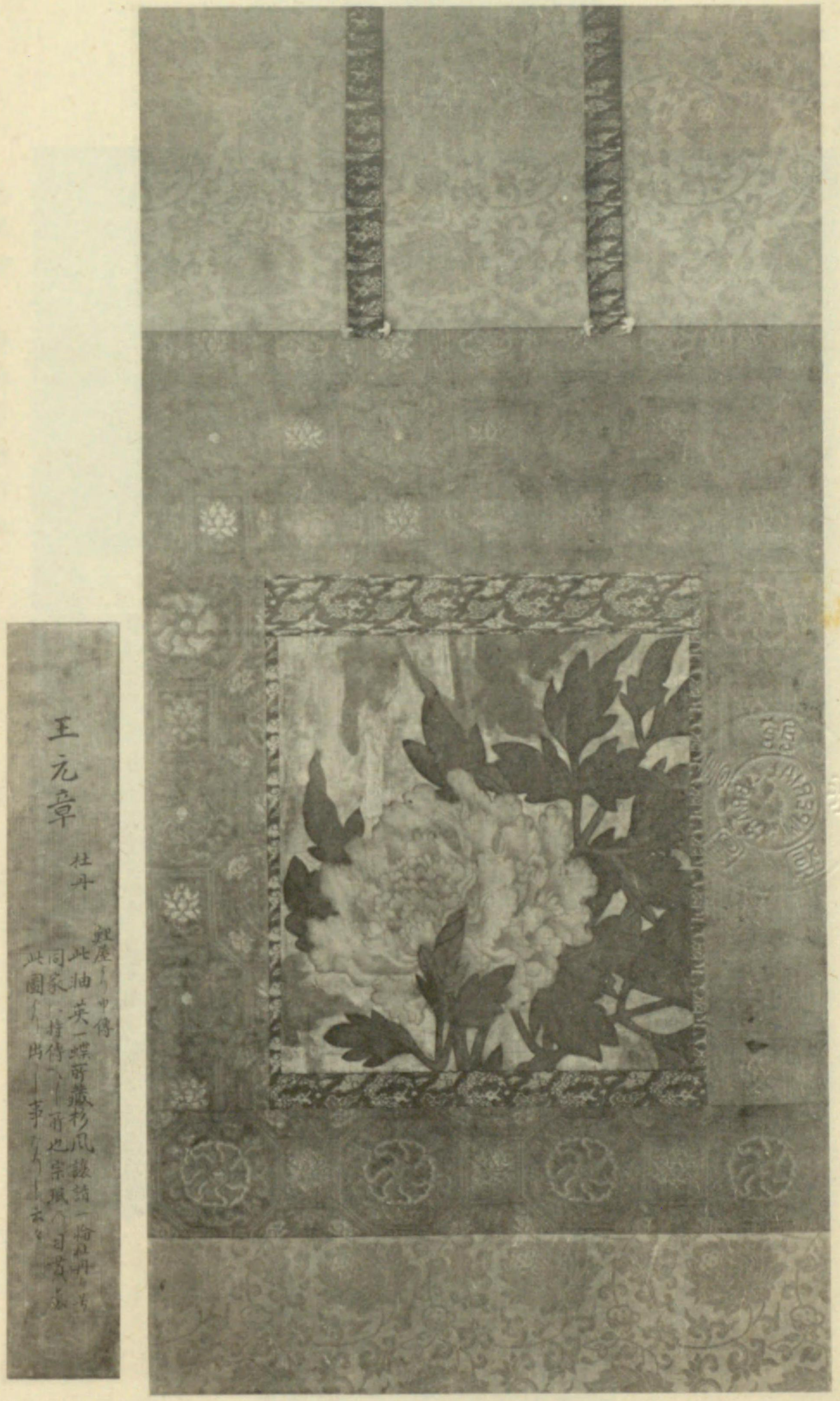
杉風筆　稲穂草枕の句



杉風稲の圖に題す
魂まつる比形斗のこりたる庵に芭蕉の下葉をしとふ友の打寄色々の手向種を題に探て發句塚へ備けるに予も稲穂といふ題をとりておもふに一とせ亡師陸奥より越路へ行脚の時早稲の香や分入右は有磯海と結はれける程經て越中の浪化公此句をもつて有磯海といふ集を撰て末の世のかたみとなりけれは
くさまくらありその稲穂
たむけかな
杉　風

王元章　極彩色一輪牡丹

朝湖舊藏



鹿島紀行

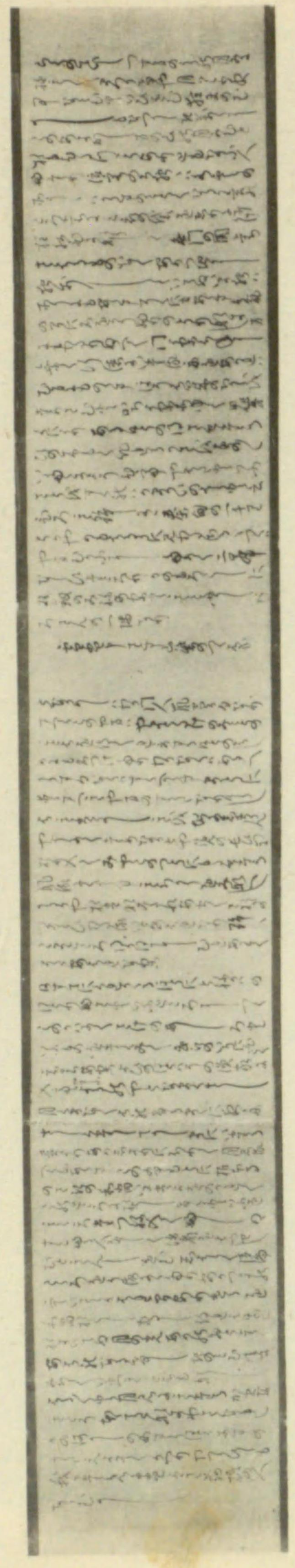
あつめ句

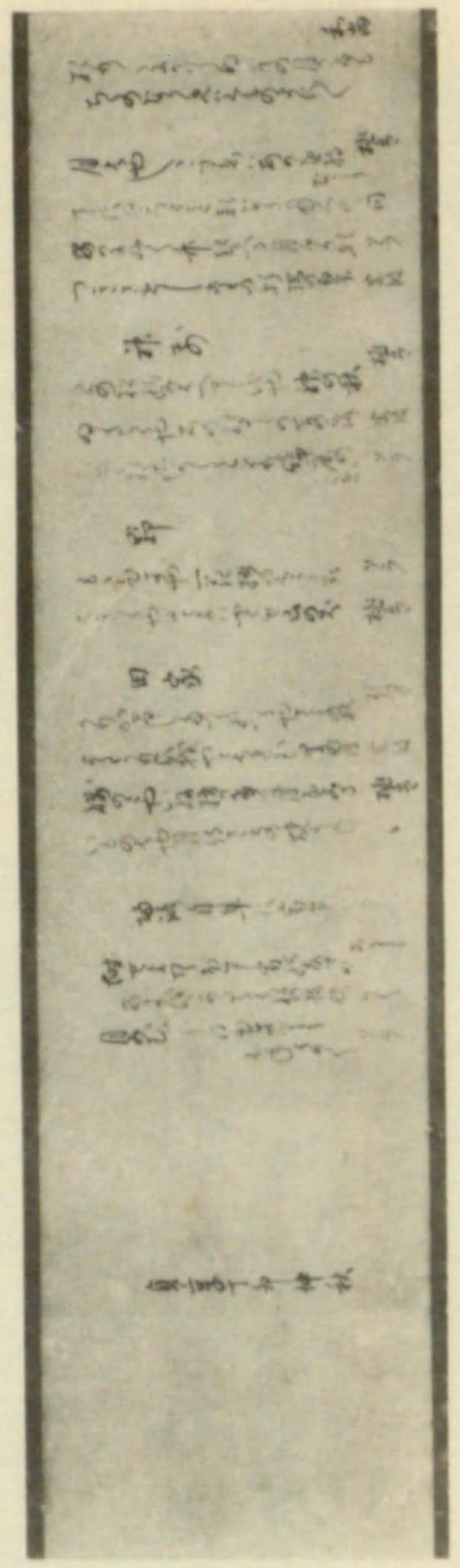
野さらし紀行

許六癸酉紀行

四巻

芭蕉翁　かしま紀行巻





かしま紀行

らくのていしつすまのうらの月みに
ゆきてまつかげや月は三五夜
中なごんといひけむ狂夫のむ
かしもなつかしきまゝに
このあきかしまの山の月みむと
おもひたつことありともなふ人
ふたり浪客の士獨は水雲の
そうゝはからすのことくなる墨の
ころもに三衣の袋をえりにうちかけ
柱杖ひきならして無門の關も
さはるものなくあめつちに
獨歩していでぬいま獨は
そのそうにもあらすそくにもあらす鳥鼠
の間に名をかうふりのとりなきしま
にもわたりぬへく門よりふねに
乘て行徳にいたる舟をあかれは
むまにものらすほそはきのちからを
ためさむとかちよりそゆく甲斐の
くによりあるひとの得させたる
ひの木もて作れるかさをの／＼
いたゝきよそひてやはたといふ
さとをすくれはかまかいのはらと云
ひろき野有秦甸の一千里
とかやめもはるかに見わたさるゝつくは
やまむかふにたかく二峯
ならひたてりかのもろこしに
双劔のみねありときこえしは
ろさんの一隅なり

　雪は申さすまつ紫のつくは哉

となかめしはわか門人嵐雪か句なり
すへてこのやまはやまとたけるのみことの
ことはを傳て連歌するひとのはし
めにも名つけたりわかなくはあるへ
からす句なくはすくへからすまことに
愛すへきやまのすかたなりけらし
はきはにしきを地にしけらん
やうにてためなかとや簞の長ひつに
おり入てみやこのつとにもたせたる
風流にくからすきちかうをみなへし
かるかやおはなみたれあひてさおしかの
つまこひわたるいとあはれなり野ゝ
こまところ得かほにむれありく
またあはれなり
日すてにくれかゝるほとにとねかはの
ほとりふさといふところにつく
このかはにてさけのあしろと
いふものをたくみて武江のいちにひさく
ものありよひのほとはその漁家に
入てやすらふよるのやとなまくさし
月くまなくはれけるまゝに夜舟
さしくたしてかしまにいたる
昼よりあめしきりにふりて月見る
へくもあらすこのふもとに根本寺
のさきの和尚いまはよをのかれて
このところにおはしけるといふを
きゝてたつね入てふしぬ
すこふる人をして深省をはつせし
むとよんけむしはらく清浄
の心をうるにゝたりあかつきの
空いさゝかはれ間ありけるを
和尚おこし驚し侍れはひと／＼
おきいてぬ月の光あめのおとたゝ
あはれなるけしきのみむねに
みちていふへきことはもなし
はる／＼と月見にきたるかひな
きこそ本意なきわさなれ
かの何かしの女すらほとゝきすの
うたえよまてかへりわつらひしも
我ためにはよき荷擔の人
ならむかし

おり／＼にかはらぬ空の月かけも
ちゝのなかめはくものまに／＼　和尚

月はやしこすゑはあめを持なから　桃青
てらにねてまことかほなる月見哉　同
あめにねて竹起かへる月みかな　ソラ
つきさひし堂の軒端の雨雫　宗波

神前

この松のみはへせし代や神の秋　桃青
ぬくはゝや石のおましの苔の露　宗波
ひきおるやかしこまり啼鹿のこゑ　ソラ

田家

かりかけしたつらのつるやさとの秋　おなしく
よたかりに我やとはれん里の月　宗波
賤のこやいね摺かけて月をみる　桃青
いものはや月待さとの焼はたけ　ゝ

野

もゝひきや一花摺のはきか衣　ソラ
はきはらや一夜はやとせ山の犬　桃青

歸路自準に宿す

塒せよわらほす宿の友すゝめ　あるし
あきをこめたるくねの指杉　かく
月みんとしほひき登るふねとめて　ソラ

貞享丁卯仲秋

あつめ句

やまかにとしをこえて
たかむこそしたにもちおふうしのとし
　またのはるはあむに
　ありて
いくしもにこゝろはせをの松かさり

ふるはたやなつなつみゆくおとこども
おきよ〳〵わか友にせむぬるこてふ

　あるひとのかくれかを
　たつね侍るにあるしは
　寺に詣てけるよしにて
　とし老たるおのこ獨
　庵をまもりゐ暮ける
　かきほに梅さかりなり
　けれはこれなむ
　あるしかほなりといひ
　けるをかのおのこよそ
　のかきほにてさふらふ
　と云ふをきゝて
るすにきて梅さへよそのかきほかな

　ひとゝせみやこの空に
　たひ寝せしころみち
　にて行脚の僧に
　しる人になり侍るにこの
　はるみちのおく見にゆく
　とてわか草庵をとひ
　けれは
またもとへやふの中なる梅花

　里梅
さとのこよ梅おりのこせうしのむち
ふる池や蛙とひこむ水のおと
はらなかやものにもつかす啼ひはり
永き日もさえつりたらぬひはり哉

　華
花さかて七日つるみるふもと哉
はなのくもかねはうへのかあさくさか

　隣庵の僧宗波たひに
　おもむかれけるを
ふるすたゝあはれなるへき隣かな

ほとゝきすなく〳〵とふそいそかはし
時鳥むつきは梅の花さけり
ほとゝきすまねくか麥の村お花
さみたれに鳰のうき巣を見にゆかむ
髪はえて容顔青しさ月雨

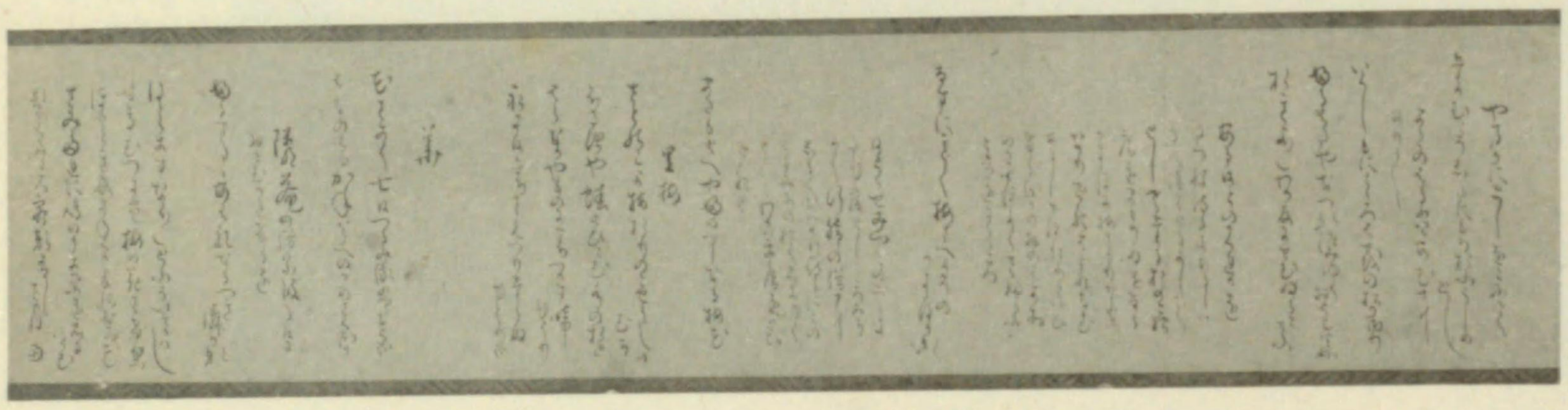
　門人杉風子夏の料とて
　かたひらを調し送りけるに
いてや我よきぬのきたりせみころも

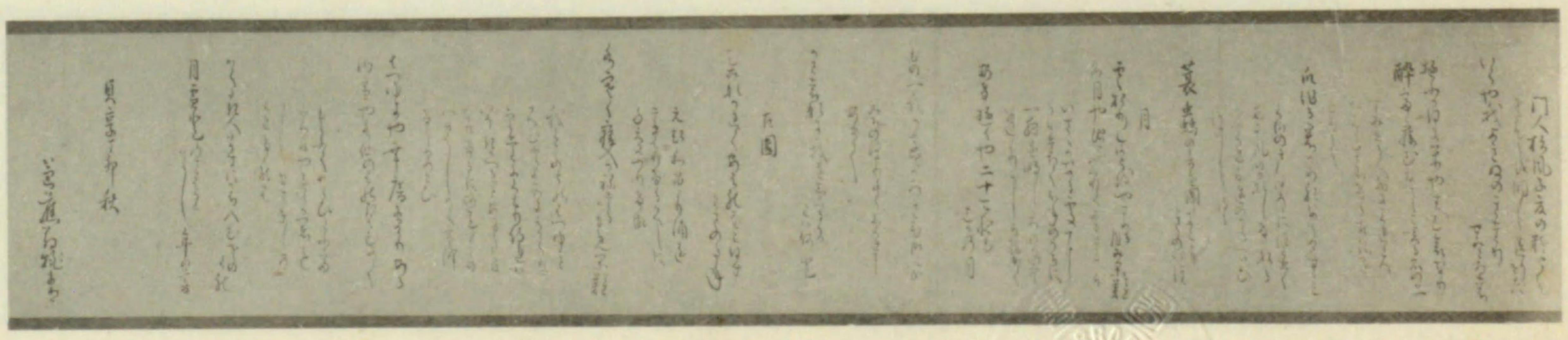
ゆうかほに米（揚ノ字脱カ）やすむ哀なり
酔て寝むなてしこ咲る石の上
　すみける人外にかくれて
　むくら生しける古跡を
　とひて
瓜作る君かあれなと夕すゝみ
　くさの戸ほそに住わひて
　あき風のかなしけなる
　ゆふくれ友達のかたへいひ
　つかはし侍る
蓑蟲の音を聞にこよくさのいほ

　月
雲おり〳〵ひとをやすめる月みかな
名月や池をめくりてよもすから
　いさゝかなる處に
　たひたちてふねのうちに
　一夜を明して曉の空
　篷よりかしら指出て
あけゆくや二十七夜も三日の月
もの一我かよはかろきひさこ哉
　みちのほとりにてしくれに
　あひて
かさもなき我をしくるゝかとは何と

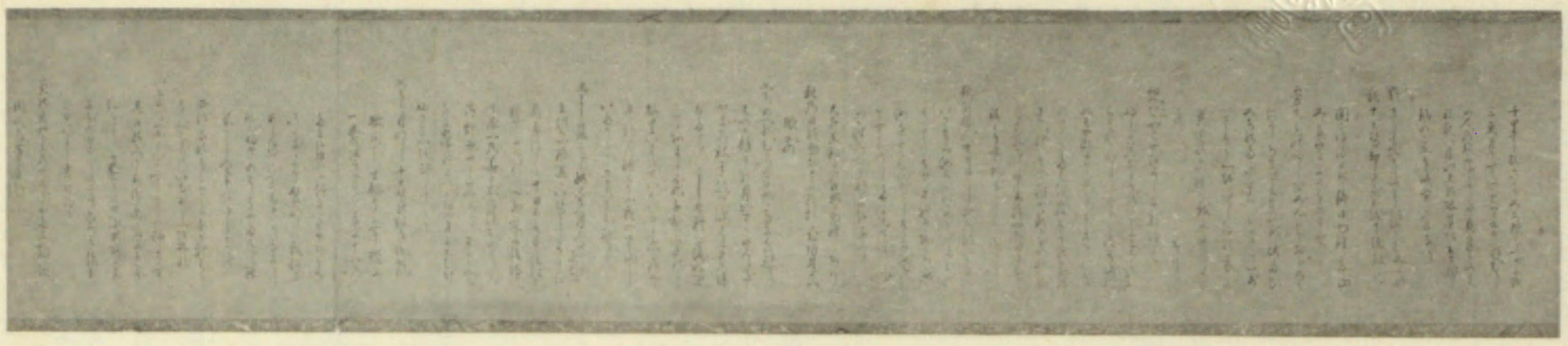
　古園
花みなかれてあはれをこほすくさのたね
　元起和尚より涌を
　たまはりけるかへしに
　たてまつりける
水寒く寝入かねたるかもめかな
　我くさのとのはつゆき
　見むとよそに有ても
　空たにくもり侍れは
　いそきかへることあまたゝひ
　なりけるに師走中の
　八日はしめて雪降
　けるよろこひ
はつゆきや幸庵にまかりある
初雪や水仙のはのたはむまて
　もらふてくらひこふて
　くらひやをらかつゑも
　しなすとしの
　くれけれは
めてたき人のかすにも入む老のくれ
月雪とのさはりけらしの年の暮
　貞享丁卯秋
　　　芭蕉翁桃青

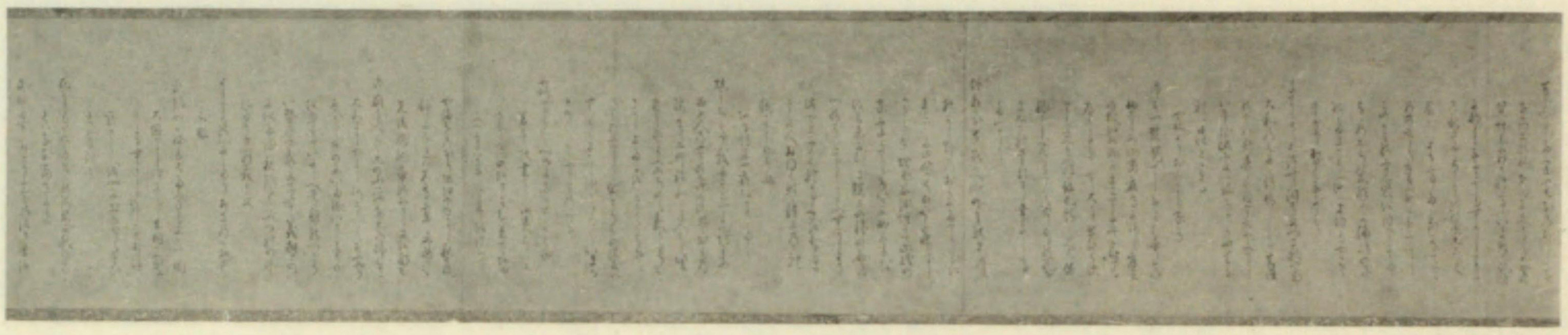
芭蕉翁　あつめ句巻





芭蕉翁　野さらし紀行巻





野さらし

千里に旅立てみち粮をつゝます
三更月下無何に入と云けんむか
しの人の杖にすかりて貞享きの
えね秋八月江上の破屋を出るほ
と風のこゑそゝろ寒氣なり
野さらしをこゝろに風のしむかな
秋十とせ却てゑとをさす故郷
關こゆる日は終日雨降て山はみ
な雲にかくれたり
霧しくれふしをみぬ日そおもしき
何かしちりと云けるは此たひみ
ちのたすけとなりて萬いたはり
心を盡し侍る常に莫逆の交深く
我にまことを有哉この人
ふかゝはやはせをふしに預ゆく
ふしかはのほとりをゆくに三は
るかりなるちこのかなし氣に泣
有此川のはや瀬にかけてうき世
の波をふせくにたえす露はかり
の命待まと捨置けん小萩か本の
秋の風こよひやちらむあすやし
ほれむと袂より喰物なけてとを
るに
猿を聴人すて子に秋の風いかに
いかにそや汝ちゝにゝくまれた
るかはゝにうとまれたるかちゝ
は汝をうとむにあらしたゝ是天
にして汝か性のつたなきをなけ
大井かはわたる日は雨降
秋の日の雨ゑとに指折ンおほ井かは　ちり
眼前
みちのへのむくけは馬にくはれけり
はつか餘りの月かすかに見えて
やまのねきはいと暗くこまの蹄
もたと〳〵しけれは落ぬへきこ
とあまたゝたひなりけるに數里
いまたけいめいならすとほくか
早行の殘夢小夜の中山にいたり
てたちまち驚く
馬に寢て殘夢月遠し茶の煙
まつはや風瀑かいせに有けるを
尋音信て十日はかり足を休るほ
とにくれて外宮に詣侍りける一
の華表の蔭ほのくらく御燈處々
にみえてまたうへもなき峯のま
つかせ身にしむ計ふかき心を起
して
みそか月なし千とせの杉を抱嵐
腰間に寸鐵を不帶襟に一嚢をし
かけて手に十八のたまを携ふ僧
にゝてちり有そくにゝて髪なし
我僧にあらすといへ共もとゝり
なきものはふとのそくにたくへ
て神前に入事をゆるさす
西行谷のふもとになかれありをん
な共のいもあらふをみる
いもあらふ女さいきやうならは歌よまむ
其日のかへさある茶店に立寄侍
るにてふと云けるあか名にほ句
せよと云てしろき絹出しけるに
書付侍る
蘭の香やてふのつはさにたき物す
閑人の茅舎をとふ
蔦うへてたけ四五本のあらしかな
なかつきの初故郷にかへりて北
堂の萱艸も霜かれていまは跡た
になしなにこともむかしにかは
りてはらからの鬢しろく眉しは
よりてたゝ命有てとのみ云て言
葉はなきにこのかみの守袋をほ
ときてはゝのしら髪拜めよ浦島
の子のたまてはこ汝かまゆもや
ゝ老たりと暫くなきて
手にとらは消む泪そあつき秋の霜
大和のくにゝ行脚して葛城の下
の郡竹の内と云處にいたる此處
は彼ちりか舊里なれは日比とゝ
まる
やふよりおくに家有
綿弓や琵琶になくさむ竹のおく
ふたかみ山當麻寺に詣て庭上の
松をみるにことに千とせもへた
るならむ大イサ牛をかくすとも
云へけむ彼非情といへ共佛縁に
ひかれて斧斤の罪をまぬかれた
るそ幸にしてたふとし
僧朝かほ幾死かへるのりのまつ
獨よし野のおくにたとりけるに
まことに山ふかく白雲峯にかさ
なり煙雨谷を埋て山賤の家處々
にちいさく西に木を伐香東にひ
ゝき院々の鐘の聲は心のそこに
こたふむかしより此やまにかく
れて世をわすれたる人おほくは
詩にのかれ歌にあそふ
ある坊に一夜をかりて
碪うちて我にきかせよ坊か妻
西上人の草の庵の跡はおくの院
より二町程わけ入て柴ひとのか
よふみちのみわつかに有てさか
しきたにをへたてたるそいとた
ふとし彼とく〳〵の清水はむか
しにかはらすとみえていまもと
く〳〵と雫落ける
露とく〳〵心みに浮世すゝかはや
若是扶桑に伯夷あらはかなら
すロをすゝかむ若是許由につ
けはかならす耳を洗はむ
やまをのほり坂を下るに秋日既
斜になれは名有處々み殘して先
後醍醐帝のみさゝきを拜む
御廟年へてしのふは何をしのふくさ
大和よりやましろをへてあふみ
ちに入てみのにいたるいます中
山を過ていにしへ常盤のつか有
伊勢の守武か云けむ義朝とのに
似たる秋風とはいつれの所かに
たりけむ我も又
よしともの心にゝたりあきのかせ
不破
秋風やゝふもはたけもふはの關
大垣にゆきて木因か家にとま
るむさし野を出し時野さらし
を心におもひてたひ立けれは
死にもせぬたひ寢の果よ秋の暮
くはな本當寺にて
冬ほたむちとりよ雪のほとゝきす

あつたに詣つ
社頭大イニ破れ築地はたふれて
くさむらにかくる爰に縄をはり
て小社の跡をしるしかしこに石
をすゑて其神となのる蓬しのふ
こゝろのまゝにおいたるそなか
〳〵にめでたきよりも心とまり
ける

しのふさへかれてもちかふやとりかな

なこやに入みちのほと風吟ス

狂句こからしのみは竹齋ににたる哉

くさ枕いぬもしくるゝかよるの聲

雪みにありて

市人よ此傘うらふゆきのかさ

たひ人をみる

馬をさへなかむる雪のあしたかな

海邊に日くらして

うみくれてかものこゑほのかに白し

爰に草鞋をときかしこに杖を
すてゝ旅寢なからに年の暮けれは

としくれぬ笠きて草鞋はきなから

と云々も山家にとしを越て

たかむこそしたに餅負牛の年

ならに出るみちの程

はるなれや名もなき山の朝かすみ

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の沓のおと

きやうにのほりてみつ井
秋風か鳴瀧の山家をとふ

梅林

むめしろしきのふや鶴をぬすまれし

かしの木の花にかまはぬ姿かな

伏見西岸寺任口上人に逢て

我きぬにふしみのもゝの雫せよ

大津にいつる道やまちを越て

やまちきて何やらゆかしすみれ草

湖水の眺望

辛崎の松は花よりおほろにて

みなくちにて廿年をへて故人に
あふ

いのちふたつのなかにいきたる櫻かな

伊豆の國蛭か小嶋の桑門是も
去年の秋より行脚して我跡を
したひおはりのくにまて尋き
たりけるに

いさ共に穂麥くらはむくさまくら

此僧我につけていはく圓覺寺
大顛和尚むつきのはしめ迁化
したまふよしまことや夢の心
地せらるゝに先道より其角か
方へ云遣はしける

梅戀て卯の花拜むなみたかな

とこくにおくる

しらけしにはねもくてふの形見哉

ふたゝひあつたの桐葉子か許に
有ていまや吾妻に下ンとするに

ほたむしべふかくわけ出る蜂の余波哉

かひの國山家に立よる

ゆく駒の麥になくさむやとりかな

卯月の末庵に歸りてたひのつか
れをはらす程に

夏衣いまたしらみをとりつくさす

ゐとをたつ日
はせを野分其句に草鞋かへよかし　李下　蕉

月ともみちを酒の乞食

自烏巾を持きたりて
頭巾きて君見よふしの初下風
いせやまたにていも洗ふ
と云句を和す　コ齋

翁まいらせむさいきやうならは秋暮
はせをとこたふ風の破かさ　いせ山田 雷枝　蕉

花の咲みなから草の翁かな
秋にしほるゝ蝶のくつをれ　同 勝延　蕉

師の櫻むかし拾ンこの葉かな
薄に霜の髭四十一　みの大垣 嗒山　蕉

霜の宿の旅寢に蚊屋をきせ申
古人かやうの夜のこからし　同所 如行　蕉

われもさひよ梅よりおくの藪椿
ちやのゆに殘る雪とひよ鳥　伊賀 雅良　蕉

我櫻あゆさく枇杷の廣葉かな
筧にうごくやま藤の花　京 秋風　蕉

樫の木の花にかまはぬ姿かな
家するつちをはこふつはくら　同 秋風

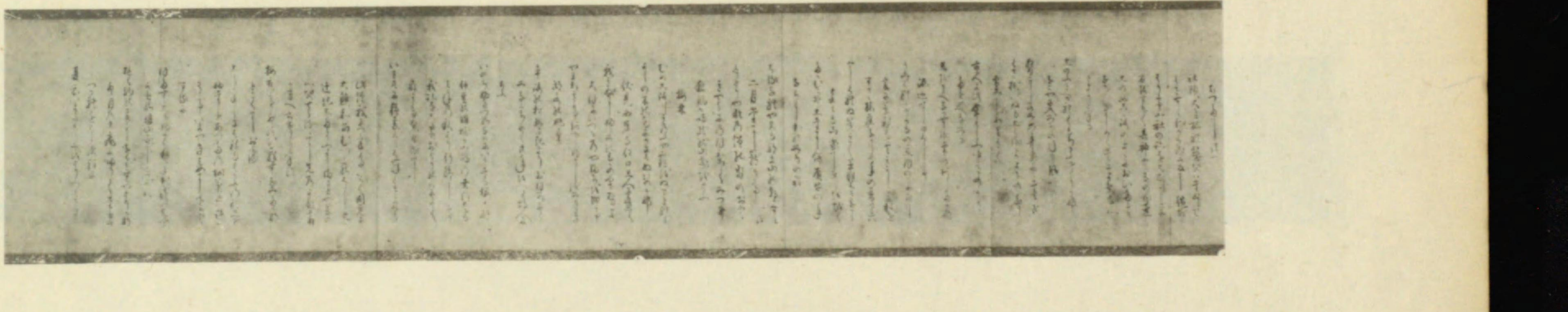
我頓てかへらむと云を
人をあたにやらうと待や江戸櫻　伏み 任口

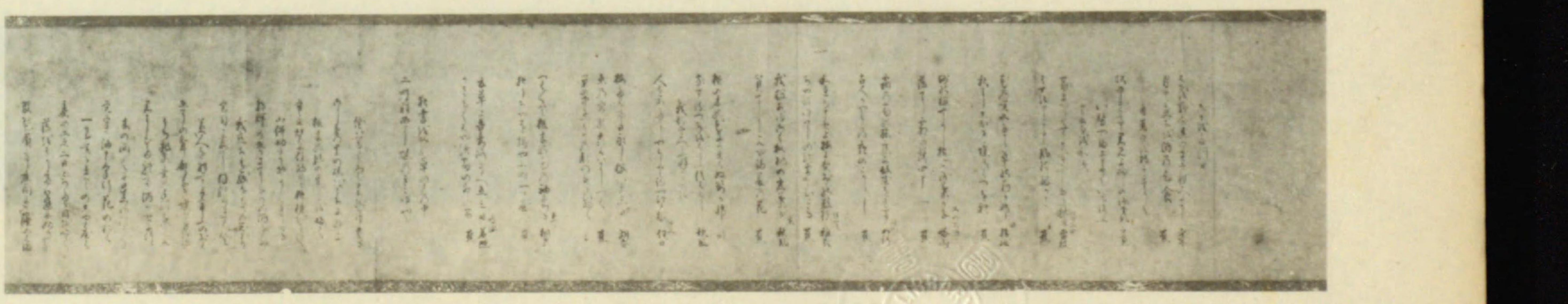
梅たえて日永し櫻いま三日
東の窓の蟲くはにつく
巣の中につはめの顔のならひゐて　湖春　ゝ應

つく〳〵と榎木の花の袖にちる
獨りちやを摘むやふの一ッ屋　あつた 桐葉　蕉

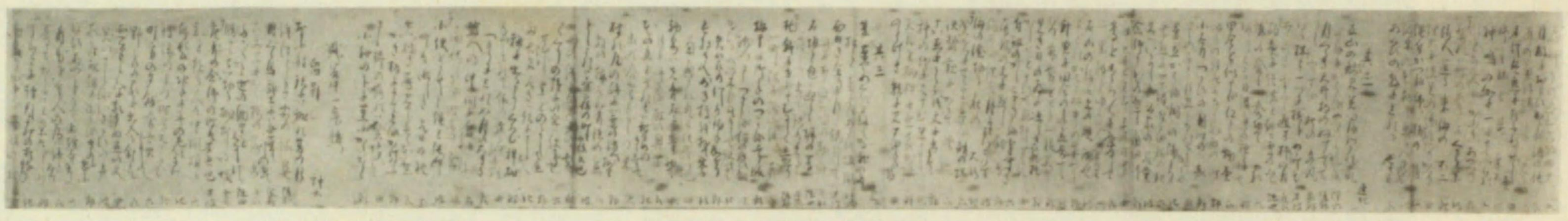
夏草よ吾妻路まとへ五三日
かさもてはやす宿の卯の雪　鳴海 若照　蕉

獨書をみる草の戸の中
二町程西に碪のきこゆ也
佗おもしろくとちのかゆ煮る
さらしなの里の碪をうちにゆき
榎木の風の豆からをふく
寒き爐に住持は獨柿むきて
小僧ふたりそかしこまりける
朝鮮のゑかきにならの酒をくみ
我戀は色紙をもてる笑より
宮司か妻にほれられて佗
美人を拜むかけらふのおく
ゑその聟壻なき蝶と身を泣て
うち被前垂の香のなつかしく
君にもたれて酒かひに行ク
木の間〳〵に星みゆるかけ
宮守か油さけ行花のおく
一リン咲るまとのしやく〳〵
恭の工夫二日とちたる日を明て
薄をきりて篷にふきけり
琵琶負て鹿聞に入篠のくま





五老井許六　癸酉紀行卷



許六巻物

癸 酉 記 行

許六離別詞

去年の秋かりそめに面をあはせことし五月の初
深切に別をおしむ其わかれにのそみてひとひ草
扉をたゝいて終日閑談をなす其器畫を好む風雅
を愛す予こゝろみにとふ事有畫は何の爲好や
風雅の爲好といへり風雅は何の爲愛すや畫の爲
愛といへり其まなふ事二にして用をなす事一な
りまことや君子は多能を恥と云れは品ふたつに
して用ひとつなる事可感にや畫はとつて予か師
とし風雅はをしへて予か弟子となすされとも師
か畫は精神徹に入筆端妙をふるふ其幽遠なる所
予か見る所にあらす予か風雅は夏爐冬扇のこと
し衆にさかひて用る所なしたゝ釋阿西行のこと
はのみかりそめに云ちらされしあたなるたはふ
れこともあはれなる所多し後鳥羽上皇のかゝせ
給ひしものにもこれらは歌に實ありてしかも悲
しひをそふるとのたまひ侍しとかやされはこの
みことはを力として其細き一筋をたとりうしな
ふ事なかれ猶古人の跡をもとめす古人の求めた
る所をもとめよと南山大師の筆の道にも見えた
り風雅も又これに同しと云て燈をかゝけて柴門
の外に送りてわかるゝのみ

元祿六孟夏の末　　風羅坊芭蕉述

送 行

木曾路を經て舊里に
かへる人は森川氏許六と
云ふ古しへより風雅に情
ある人々は後に笈を
かけ草鞋に足を
いため破笠に霜露
をいとふてをのれか
心をせめて物の
實としる事を
よろこへり今仕官
おほやけの爲には長劔
を腰にはさみ乘かけの後
に鑓をもたせ歩行若黨
の黒き羽織のもすそは風
にひるかへしたるありさま此人の
ほたにはあかるへからす

椎の花の心にも似よ木曾の旅　はせを

餞 許 六

枇杷の大臣の扇を
生の松原によせられけむ
折からの贈別におもひ
あはせて何かよせむとた
はむれの狂句に
別るゝや我は扇に
繪をこのむと主人酘掌の

しはざをせめて一日は
晝一夜は俳諧に
明たり
木曾路とや
涼しき味を
しられたり
癸 酉 五 月　晉 其角

餞 別

笠摺や葺わたしたるあやめ草　杉風
梟啼て跡も更なる青田かな　桃隣
木を流し〳〵行涼しさよ　百里

誹友とも打とぞりてわかれを
おしみける

其 唫

木曾路の旅行は畫圖誹諧の
用ならんといひて

蚊のなきを又かこつけて旅寢かな　許六
魚灯もへ込むみしか夜の月　波
我足の足半作るひま明て　才
もむやもまずに新茶干也　隣
薄霞馬乘ル爲に舟廣く　泉
われ〳〵に成る春の雁ヶ音　瓦
ウ
一ト里の名主の羽織裾ながく　陳
しかれどいなぬ見せの淨瑠璃　達
鐵ッ張のきせるはねつき物數寄に
ふくれ傘たる葛餅の腹
ス
徒草鞋にかたびらかるき草枕
不慮に來て見る江の島の月
皮つきの松の夕風秋さむく
娵の嘉例かはる指鯖
色ふかきお寮は人にうたがはれ
泪のかゝる刷毛塗の壁
花曇京の匂ひのなつかしく
雨の蛙もなかぬ新田
ニ
水ぬるむ井戸に斗樽を掘居へて
ホウロク釜はわれやすきなり
灸おろし此一村に世をわたり
題目講の人數はねられ
箸入レと成てふるびし扇箱

六 郭鮮良曲 化波鮮六 郭良鮮曲郭鮮六化 波郭良曲鮮

飛脚なげ込む大坂の文
月故におもひ出たる酒の帳
隣の菊を垣こしに見る
身代は懸にたふれて孛から
姉も妹も姿奉公
神鳴の伽に一日とられけり
門をならへしかぶきあやつり
ニウ
制札は畔のあなたにくさり果
旅人送る東海の不二
埋火に洗足の湯のわきかへり
細付かへる佛ッ精の筒
約束の花持て來る八瀬の者
あくひの數にしれる長き日

六良波曲化六郭 波鮮曲 六他良

其 二

夏山の形見疊ゆるわかれかな　達
夜毎にかはる宿のかり蚊屋　許
月くらき天井板のふすぶりて　隣
ゆかたふかする秋の夕風　泉
いく株も一ッに植し女郎花　才
打かたぶきて通す杼の目　瓦
ウ
駒寶に信濃と越が雪の空　陳
隣の食も喰物でやる
嬉しくも日護摩の施主に綿入て
田舍を似せる江戸の物賣
坂下の住居はならぬ雨の時
小太刀つかひの用心の額
芋の子も月見となれはもてなさせ
霧立かはる國の隔たり
乘懸に藥鑵付たる旅の秋
名はいかめしき公家の若黨
念佛も花の盛も角田川
ニ
唐茶をわかす春の日中
鶯とこゝろ〳〵に發句して
二里ほとゆくは人の發生
石山の後は上の醍醐なり
よだれかはかぬ牛の鼻つら
針買に田舍のもののゝ立寄て
いつ前髪をとらん猿若
暑き日の爲に涼しき籠枕
かしらをそひて目利する瓜
付劔のかしこまりたる背中つき
屛風の上に懸し飼鳥
獨ある僕は月にもよろこばず
ニウ
海の澄切る秋の大島
箸先にせゝり置たる鯖の靈
鐵漿親にかくす懷胎
眞直にうらみを文に書たてゝ
秤の代にはさむ米さし
天目を柄杓に乘せる花の下
のとけき影に見する手の筋

其 三

夏草やあくひを移す駕籠の者　瓦
松と松とにあたる涼風　良
許
六

化波郭六曲良鮮化郭波六良 六 化波郭六曲良鮮化郭波六良 曲鮮波郭良 六

面白き余りに月と誘引て　才
舟に打込む磯の初汐　泉
石垣を包み廻して塀の蔦　陳
首とり上けて跡は覺えす　達
ウ
托鉢をけふもむなしく立かへり　隣
一町限に拾ふ紙屑
梅ヶ干に御手のつかざる上り膳
踏つまづきたる猫の追ひ網
かびたんの木目はきえて跡もなく
矢筈の竹は釣手なりけり
今朝も又少き椽を持て來る
菊通さぬは日比谷門也
初露は先青石に置き初て
月に呼たる殿の奥方
花の香をそれとは瞽女のきゝしりて
虫の喰ける春がしの米
ニ
破れ屋の跡には雪の消へ殘り
數の揃はぬ靑漆の盆
としよれは晝寢の時も寢言也
母の結たる兄弟の髮
つゝくりの障子の穴に紋きりて
せんじ藥をのみさして置
雨長名若きは跡にさしひかへ
穂に出るよりくろむ稗畑
はやされて猿の舞たる秋のくれ
つもりにしれぬ月の大きさ
盗人の仲間に盆をとめられて
開帳したる時宗の太刀
ニウ
小便をさせじと繩を張り廻し
町は淋しき元日の禮
先ッ拔き暦見て置く花盛
かき板にまて上るかけろふ
さし櫛の落れば鬢に又さして
小袖の下に薫ふかたひら

波鮮曲化 郭良鮮 波化郭波曲六良鮮化 郭良波鮮六郭 化鮮曲良六化 波

感 客中一年ノ情

留 別

おもふ程跡には誹れ夏の月　許
待ほとゝきす宿の緣鼻　隣
目くら馬武士には乘せす引のけて　泉
大文字にかく橋の落書　瓦
たか〳〵と世の納りをはなし行ク　陳
指で眞切る挑灯の臘　達
ウ
唐音の念佛の時は木魚也　才
頭を振る人は中風煩ふ
爪髮の次手に耳の毛もはさみ
錢湯のたつ時分はからひ
町方の夕飯喰ふは火ともして
野良の家に出入る針たて
惡筆も人に賴まぬ戀の文
笑のまじるいさかひの聲
大座配組になつたるきのふけふ
いひあやまりて上増寺なり
月花を歌人の爲は鑓と太刀
鳶もからすも巣は同し時
ニ
うらゝかに評よみの打なまり
羽織をかける脇指の柄

六郭鮮良曲化 波 六化郭六良曲波化六良鮮 郭曲

入口の軒はかりふくあやめ草　郭
盧生か夢もゆめに成けり　波
駕籠かきのやとはれて行道具持　良
舟から拜む三井の觀音　六
匂ひ來る笠に付ケたるふくさ物　化
双六の塞うらむ簾中　郭
うつくしき裸童の這ヒ出て　鮮
絹半たつ定の月影　良
ひらき戸の行灯吹消す秋の風　波
露の命のおも湯わり粥　六
ニウ
親なくて伯母にかゝりし物おもひ　曲
きれ人形に抱（ダキ）もつかれず　鮮
若和布より先は禁酒のやれ初て　六
花見の度にかりし薄緣　良
幾春を經たる白木の二王門　化
柱杖見たてゝ切殘す梅　郭

餞別

手の跡をわすれな木曾の覆盆時　陳曲
千鳥鳴夏の氣色や諏訪の海　溪魚

甲路記

五十年の行脚に一點の難もなかりけるは西上人一人也蘇氏八州の逆旅は不平の上の流浪なり古人は是なるも非なるも共に風雅のさかひを出ずして万古の情を述べたり我雲水の客と成て二十年あまる時は不破清見か關の明月に鞭をあげ士峯の雲に額をあふく事五たひ又は武藏かんづけを經て碓氷の雪にまよひ木曾の若葉を分け入る事巳に六度に及ふ東西南北に奔走する事合せて十一度也水村山郭木のふり石のたゝすまひ前後左右は眼前にあり明朝趣むとする道は甲斐の郡内を越へて上の諏訪にかゝり又もや木曾の川音にゆかしき枕を友と燈下に先達の記行をひらき名所の和歌古戰場の由來をとゝめて旅行の袋に納め笠の緒を付かへ竹杖の節をおろして枕の上に寄かけたり我むつましき翁にわかれて行末おぼつかなく心ぼそき身に成行空に杜宇の一聲もよのつねならす月落烏啼てやゝ市にゆく人の足音はすでに首途をすゝめぬ明れば五月六日武江の館を退

卯の花に芦毛の馬の夜明かな

汶村子が便に一封を得たり

箏の競や人を待つ日數　僧李由

と書て外に一言の文章もなしはづかに十七の字をならべて一夜の對談にまさる事は我朝の手柄ならん

入ル甲斐ノ郡内ニ

道端に蚕（マユ）干すかざの暑さかな
麥あとの田植やおそき蠶時

鵜瀨勝沼といふ所は蒲萄の棚にて野も山もつゝきたり

鳴渡す蒲萄の棚やほとゝきす

桔梗原はいにしへ通ける時は畠もなし今は仕付て農をなす

馬の子や麥に遊ばす萩の原

木曾に入れは谷々の田をやう〳〵植たり

山吹も巴も出る田植かな

稚子待ッレ門ニ

故里は娘の長や若楓

旅の賦

情といはゝさま〳〵品〳〵にしていひ盡しかたからむ眼のくろき人の見盡し置たれども其際はもて興ずれ共かさねていひ出すものもなき社本意なけれ先旅館のさま上段を付たり見付に書院床必ありすかしは皴菱三ッ柏のもやう火のなき火燵にやぐらをかけて門口の入湯桶はかたぶけても釜はかくれず底には小砂のたまりて足にさはるもうるさし出女の門立を見れば四季共に足駄をはきたかるは何事ぞやねだ板敷の釘は離れ角〳〵へは疊居かす天井ふすま障子は雨もりのなかれありかな行灯の臺には吸（カラ）空をはたきためて當アのこゝろといふ事に紙はもへたり臺所には錢寶草鞋寶の居ふさぎてやう〳〵に枕をかたふけこゝろよき寢入ばなに門をたゝく馬さしの聲に夢を驚かす夜をこめてたちなむと亭主にいひ含め置たるに旅人も亭主もよく寢て夜明てふためくつらもにくし

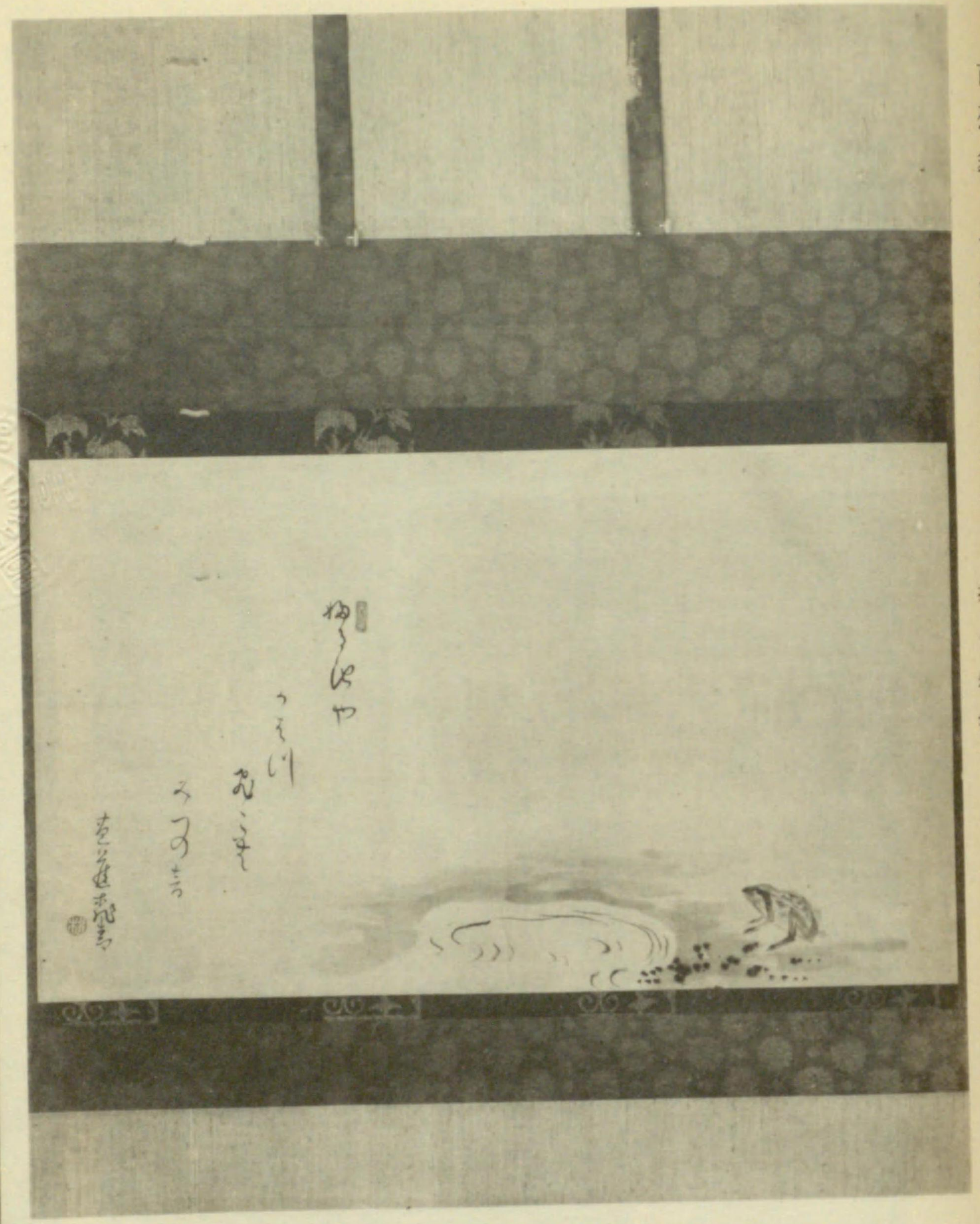
道づれの上をいはゝ船頭駕籠かきをたゝき馬さしといさかひ一僕のくたびれものをねめつけ八ッから起てつれの男をおこし挑灯ともして夜道を行を手柄とし入湯の一番に入たがるは何の爲ぞやせはやきの友にあきたる旅の宿といふ句は皆人感しけり

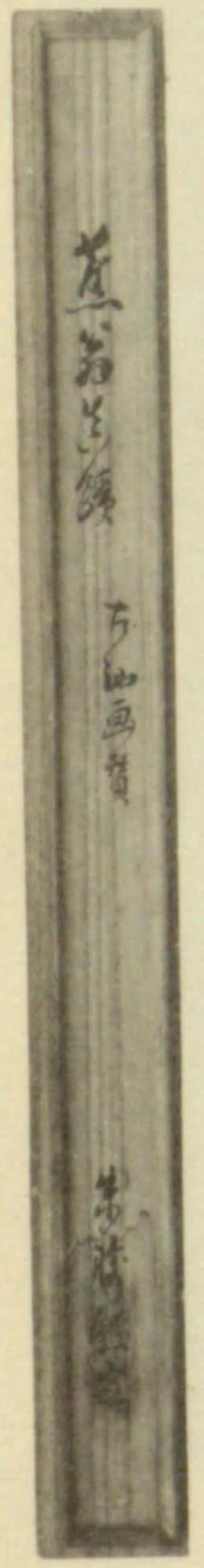
賣物の情は餅酒のなき所もあらす大晦日にもひや素麵をすゝむるは逢坂の茶屋なり饅頭は見付の臺にあり玉子の煎ぬきは木曾の旅鼻紙は門にはさみ錢の看板は筒にきざを付て懸たりこんにやくの田樂は何ものゝくひけるぞ

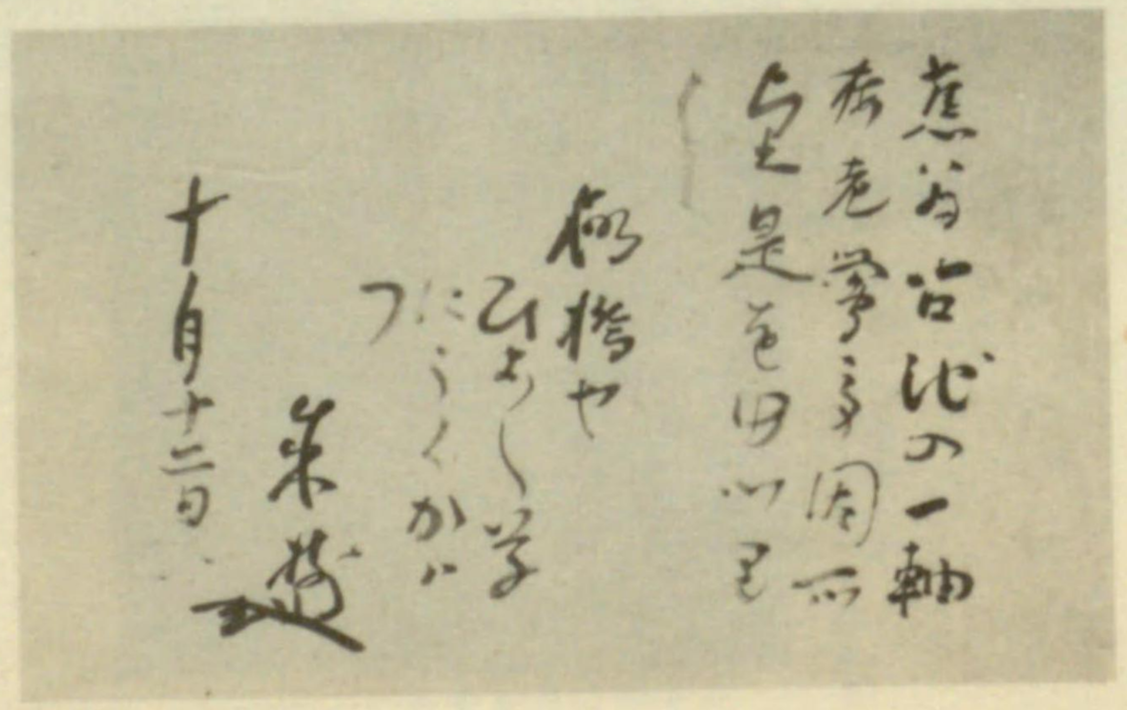
馬子駕籠かきは輕重に日月を送り旦那旦那といふにきゝあきたるとはいつをむかしに書たり伏見の備ひ鑓持は先ッ髮を第一とす當時髭といふ物は鑓持に落てすける人稀也髭のすたるといふ句もあらん上髭は冬さむく顋髭は夏暑し鑓持の馬に乘るといふは曲翠の情也

主人の鎗とかたねたるは舟の乘場の事なり獨坊主には宿をかしかねおなし所に二夜をとめずふりつゝきたる五月雨雪みぞれの夕暮空宿の燒火に寒きうさをわすれあるしが心づかひのなさけを感す死の來り病の發するは時も所もまたずとやかくして馬駕ごにかきのせられても更になからふるこゝちもせず醫療のたすけはたえてたま〳〵懷中の振藥はしばらく其病をふせく飛脚順禮のやからは路頭にたふれ小社の傍に打伏せは里のおのこ共におひたてられ老僧のあはれみにより寺の門下に入てしはらく霜露をしのぐ重病日にしたかひておとろへ路に黄泉の下に趣く傘ていづくの土となりぬらんもはからす其所の奉行人へ訴へ見ぐるしき戶をあらためさらして犬はしりの土中につきこめ小札に年のよはひと衣類のもやう斗をしるされていづれの國いづれの所のものといふ名もしらす成行也遠き故里の妻子どもはかなきありさまもしらすたま〳〵きゝつたへたるも夢のこゝちながらへいづれを忌日とさしてとむらふ日もなし只風のたよりと明くれに待らんかし渡り瀨もしらぬ川になかれかゝり落（ミクヅ）風に舟を顚（クツカヘ）し船頭も共に沈みうせて底の滓と成る山だち强盜の爲に切殺され衣類路錢をはぎとられて目の前に赤裸と成りけり死期にあはれなるは女童部の上に多し猶人倫にこへてあはれなるは牛馬の行末也重き荷物をおふせて山坂を越へ炎天の水に渇ッしたち所にたふれて死する事度〳〵也岡部の辻堂にかけたる笠に西住か事をおもひ出し角田川の念佛の由緒を尋て亡子か古墳に上る今來古往の人旅懷の情を盡して風雅の膓をさらし置ぬ能因は白川の歌をよみてふたゝびみちのくへ趣き富士都鳥の二句を求めてすみやかに故里にかへるものは貞室老人也東海道の一筋をもしらぬ人風雅の道に達しかたしとつね〳〵翁のおほせの給ひし事耳の底にとゝまり侍ぬ

元祿六癸酉夏　五月十五日
旅客
五老井許六艸稿





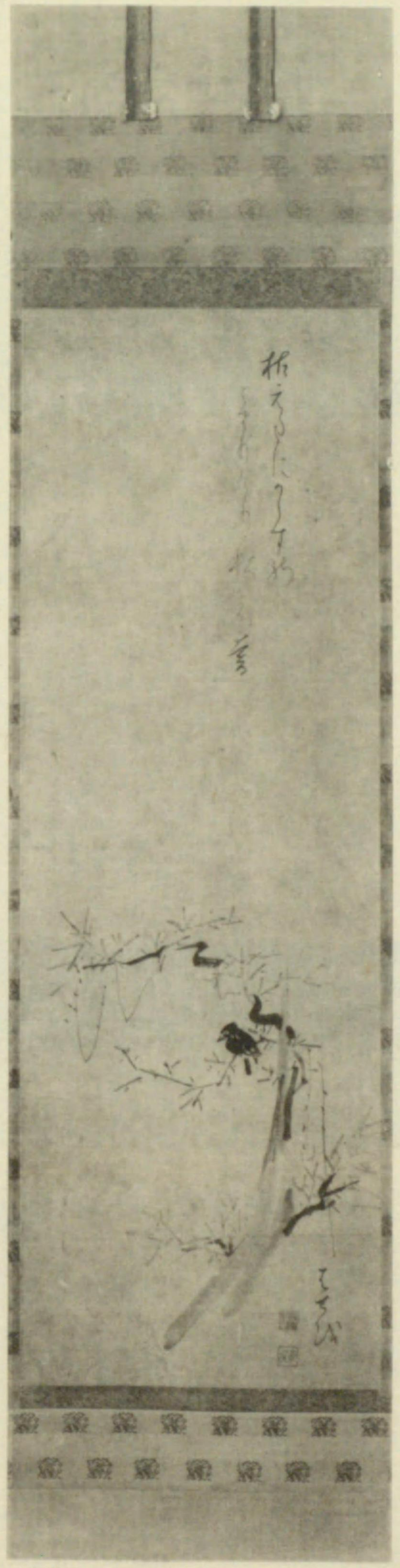


芭蕉翁　古池の詠自畫讃

井上士朗讓り狀
幷ニ箱書

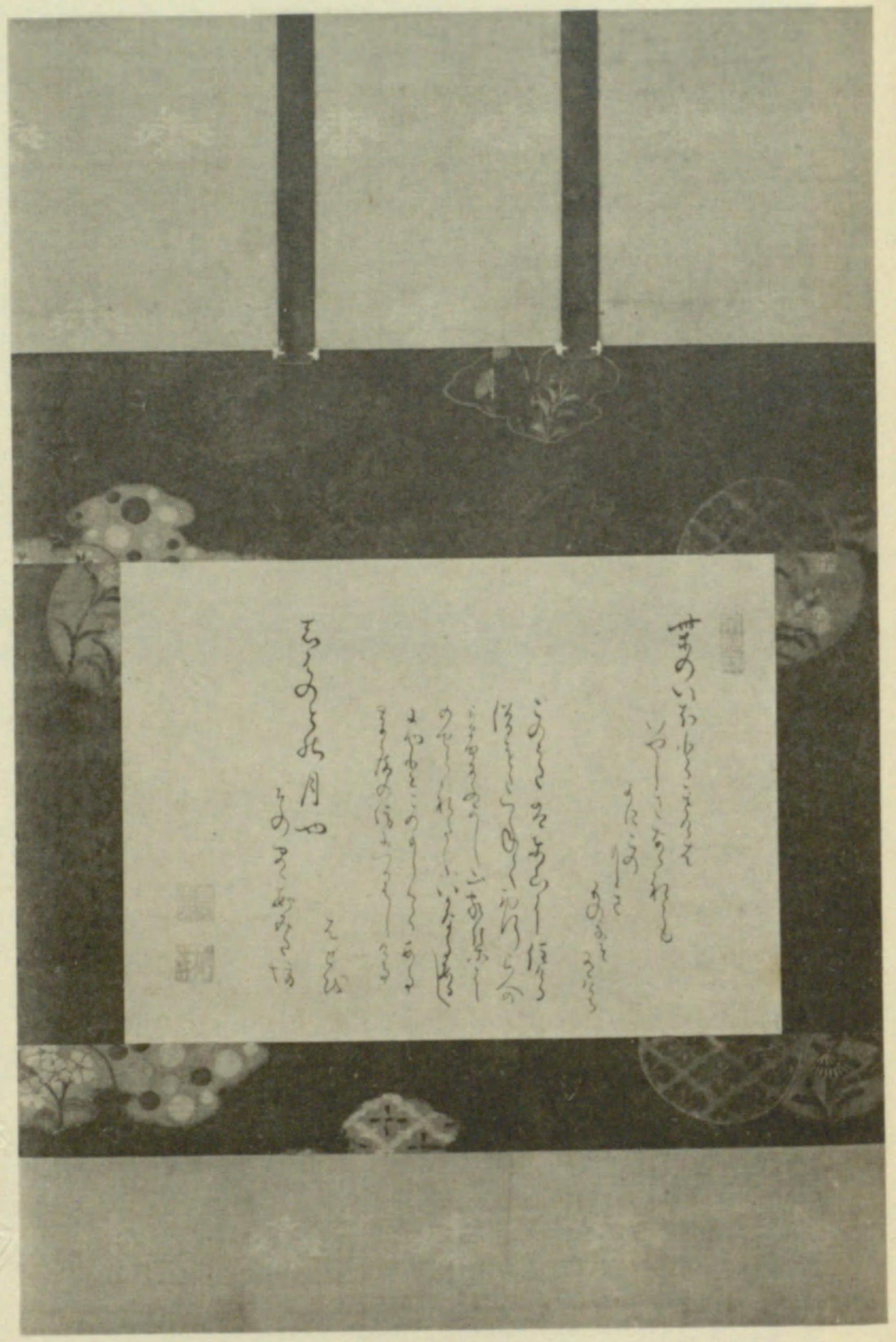
芭蕉翁　枯木烏書讃

枯えたにからすのとまりけり秋の暮　はせを



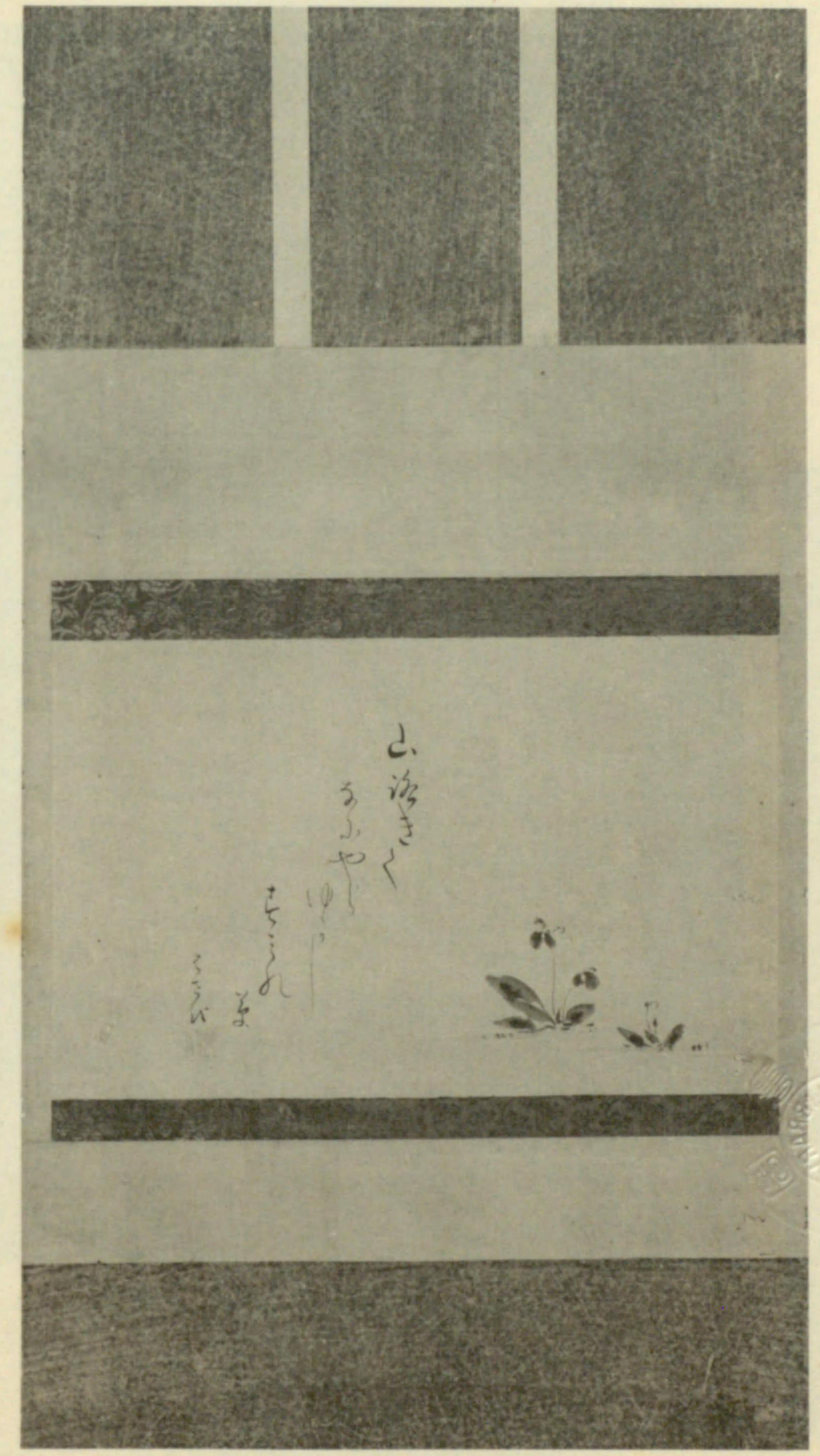
芭蕉翁　阿彌陀坊句

水戸家傳來
箱書　藤田東湖



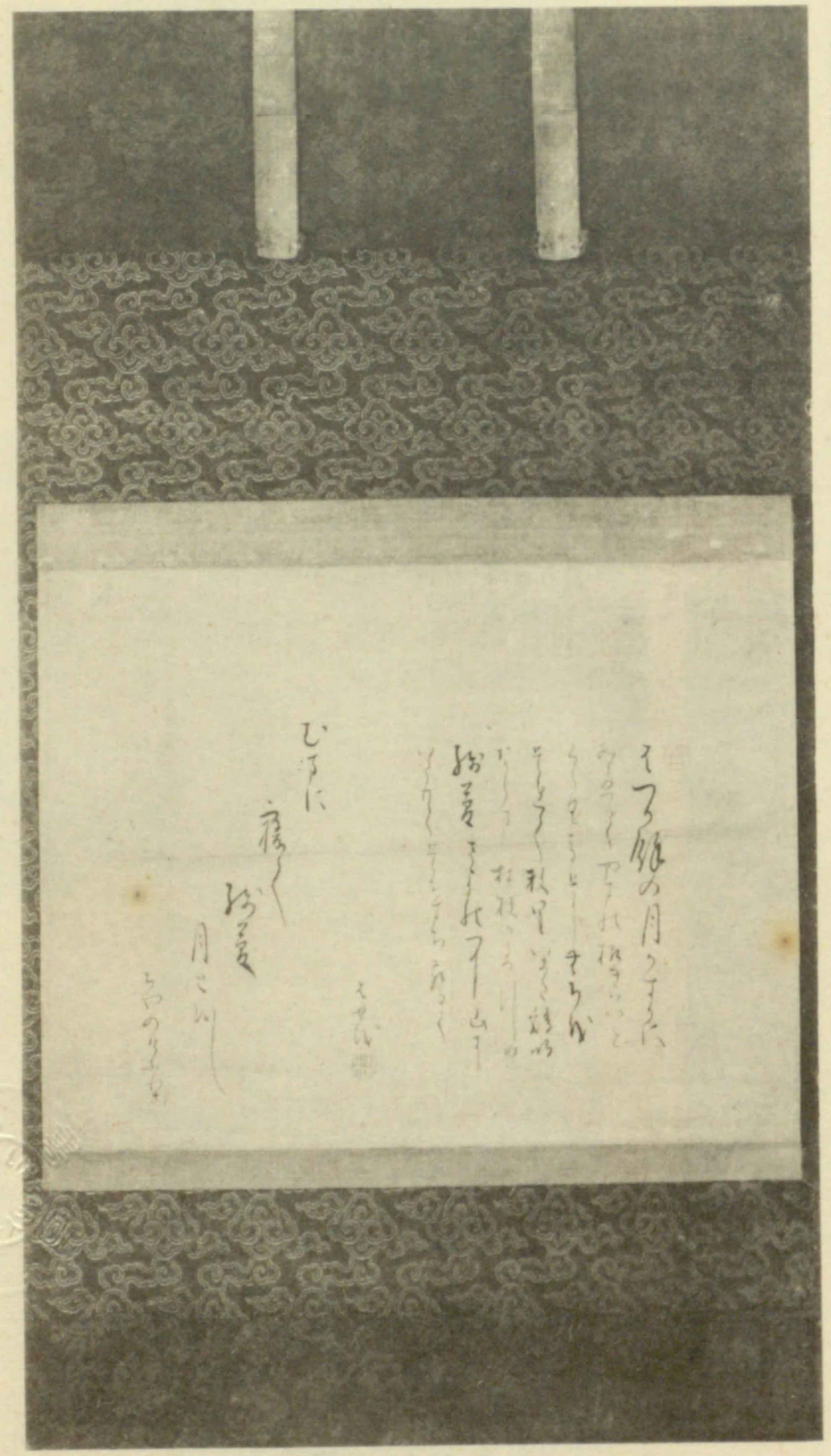
柴のいほときけは
いやしきな丶れとも
よにこの
もしき
ものにそ有ける
このうたは東山に住ける
僧をたつねて西行上人の
よませ玉ふよし山家集に
のせられたりいかなるあるし
にやとこのもしくてある
草庵の坊につかはしける
しはのとの月や　はせを
そのま丶あみた坊

芭蕉翁　すみれ書讃



山路きてなにやらゆかしすみれ草　はせを

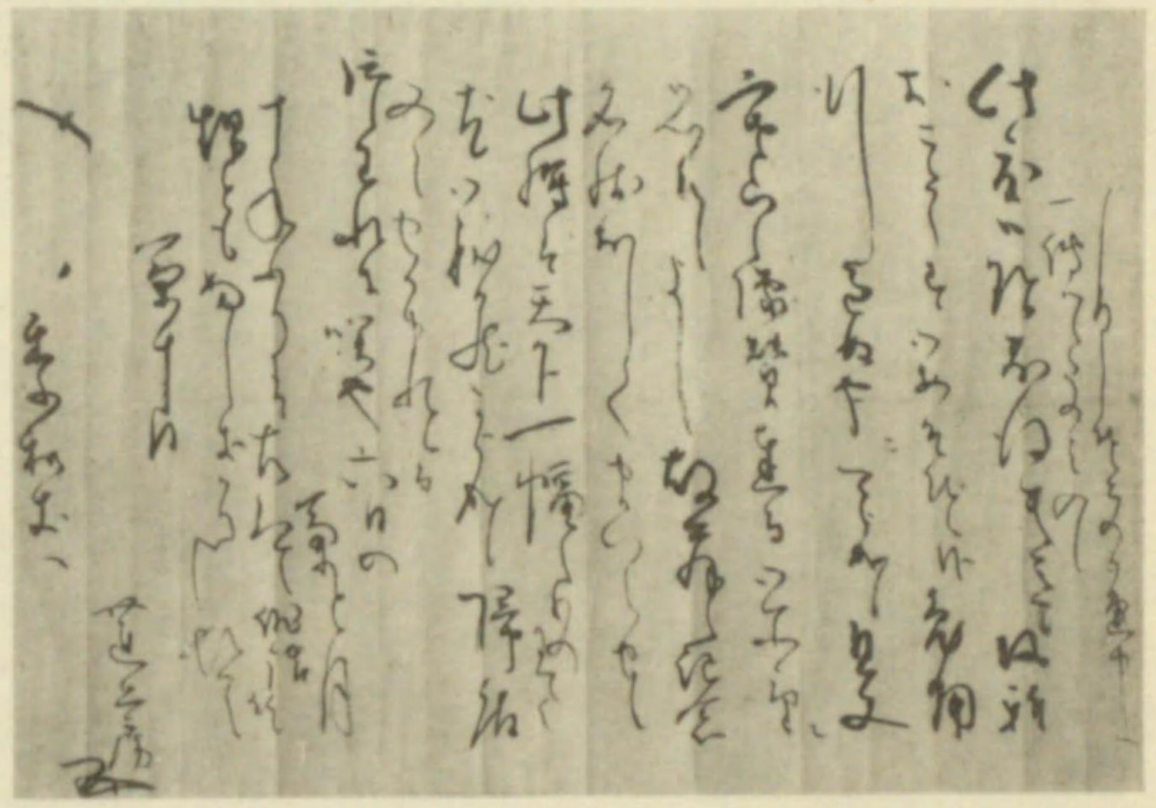
芭蕉翁　野さらし紀行の一節

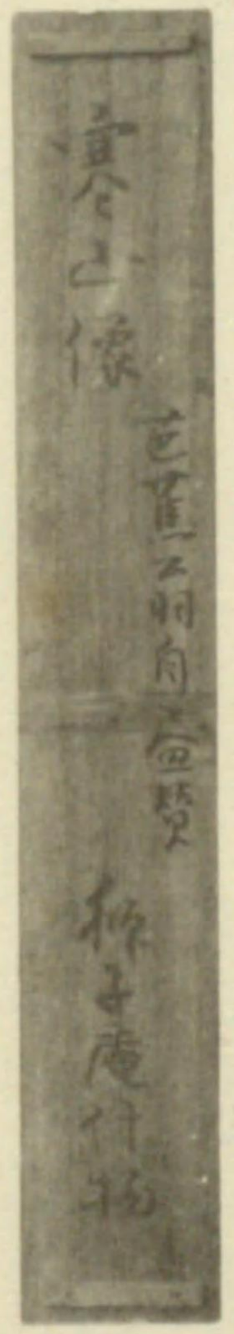


むまに寝て殘夢月とをしちやのけふり　はせを

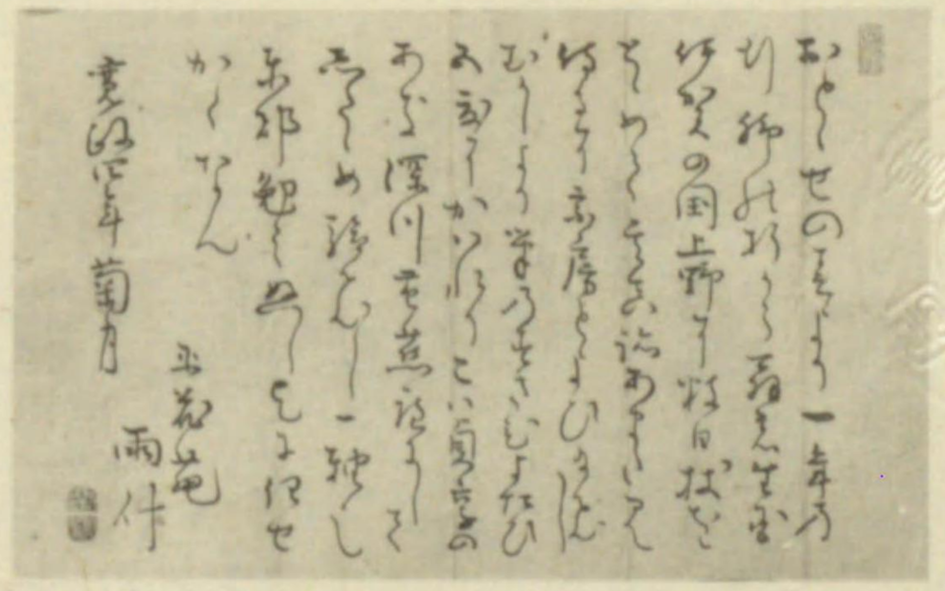
芭蕉翁 寒山書讃幅

添書 支考 雨什





箱書 獅子庵支考



芭蕉翁 寒山書讃

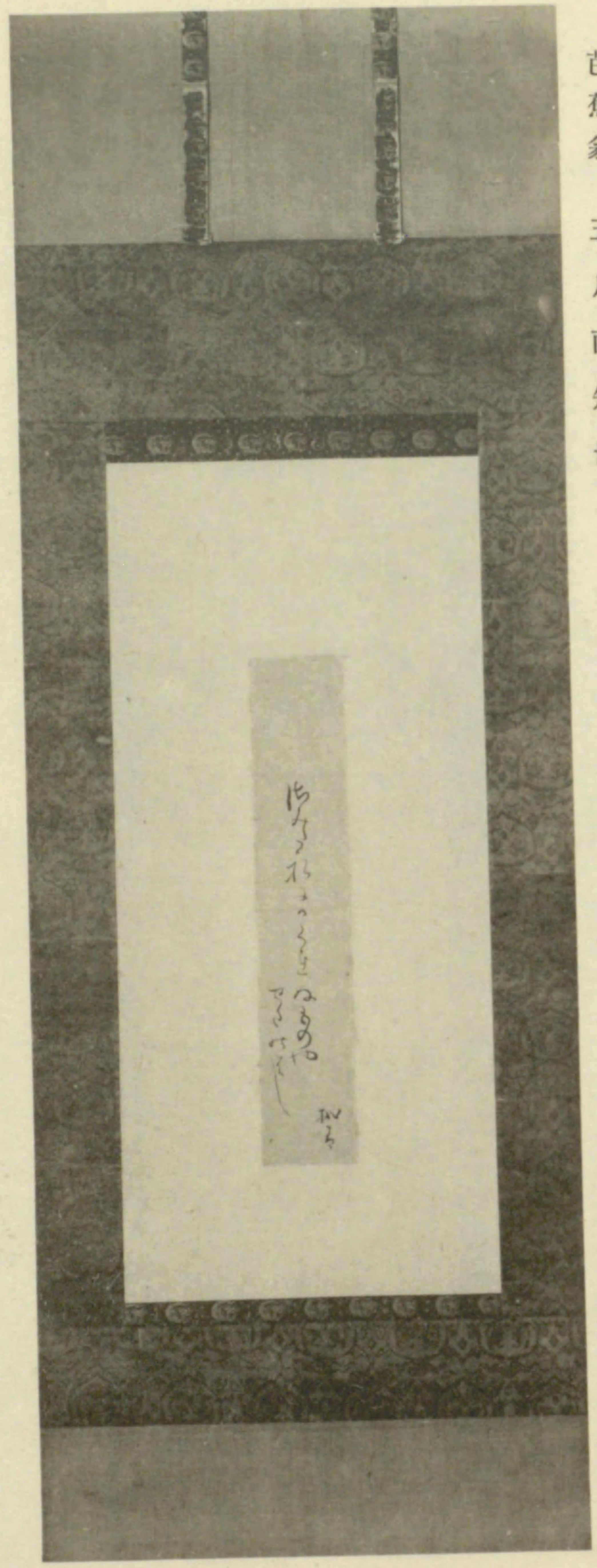
獅子庵支考舊藏
井ニ箱書

庭はきて雪を忘るゝ箒哉　はせを書

芭蕉翁　芭蕉書讃

芭蕉暴風して盥に雨を聴夜哉

芭蕉翁　五月雨短冊

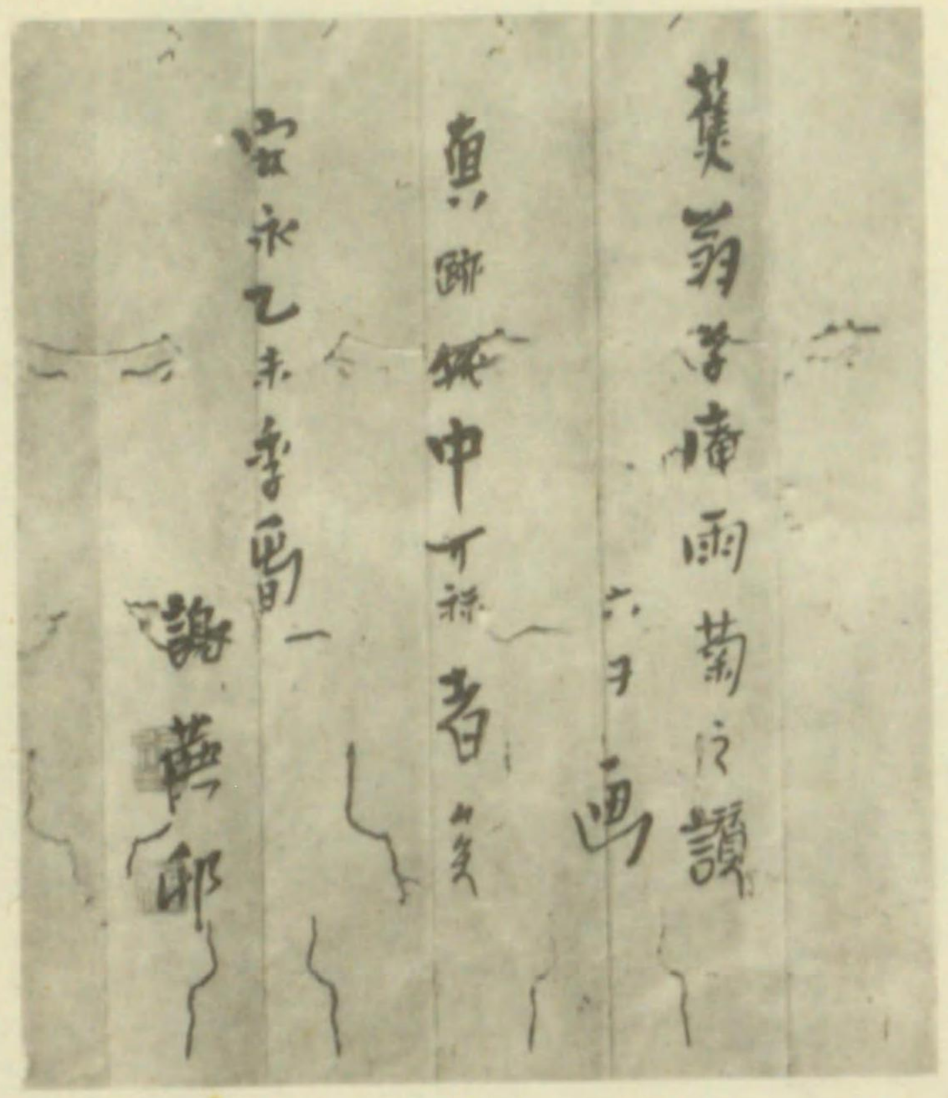


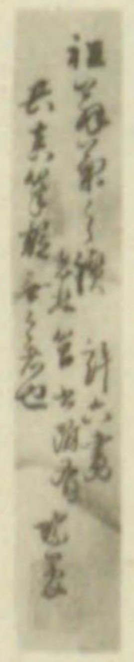
さみたれにかくれぬものやせたのはし　桃青

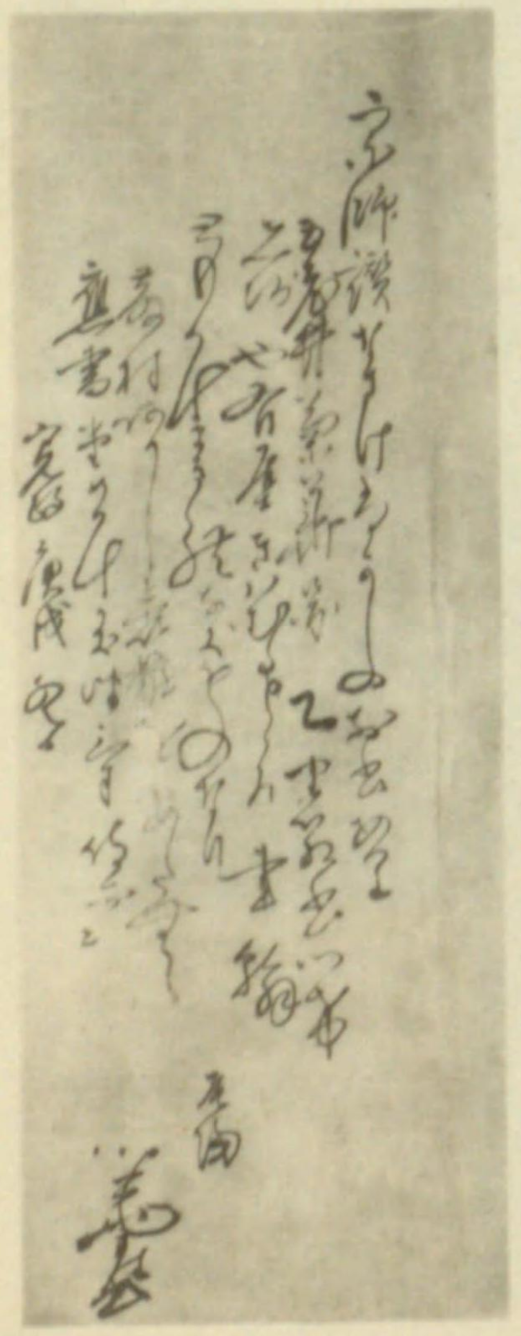
許六菊書芭蕉翁讃

日にほころひあき花は
雨にはたなさけふかし
起あかる菊ほのかなり水の跡
はせを

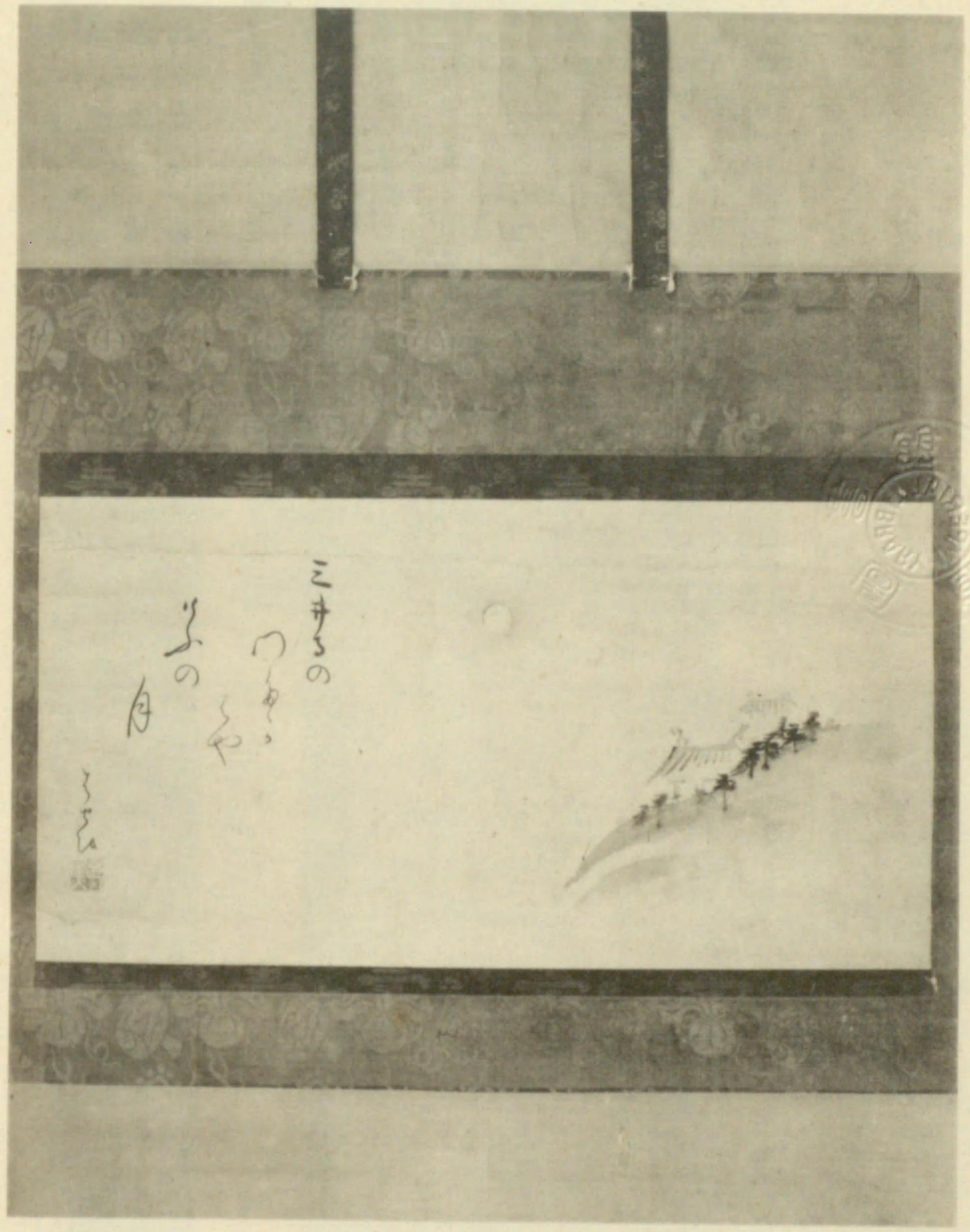
蕪村添狀
蝶夢極書
乙由箱書
曉台卷止





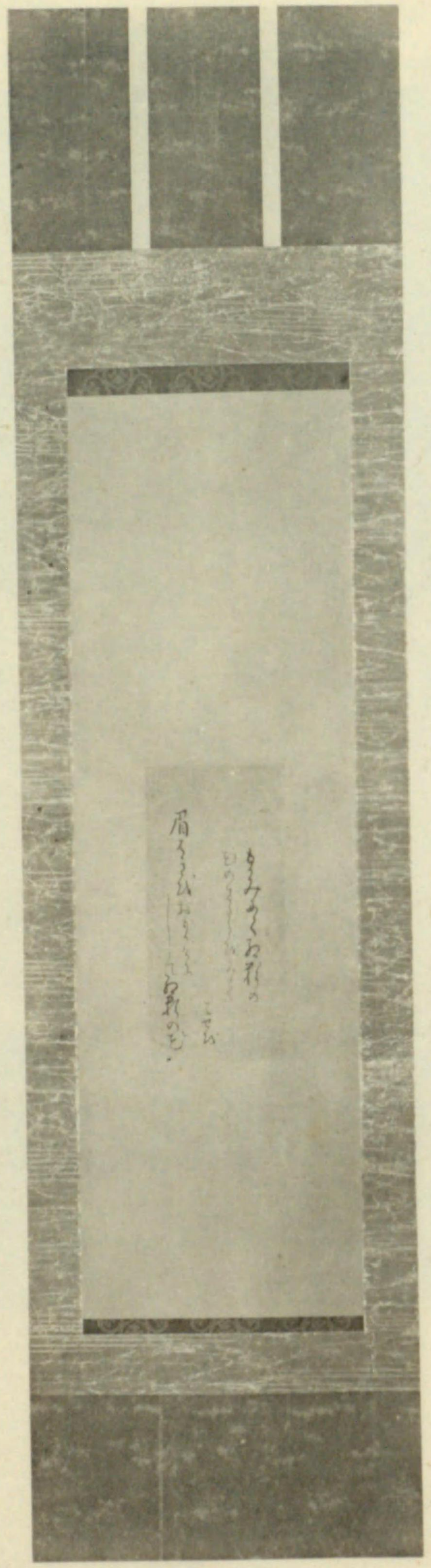


芭蕉翁　三井寺書讃



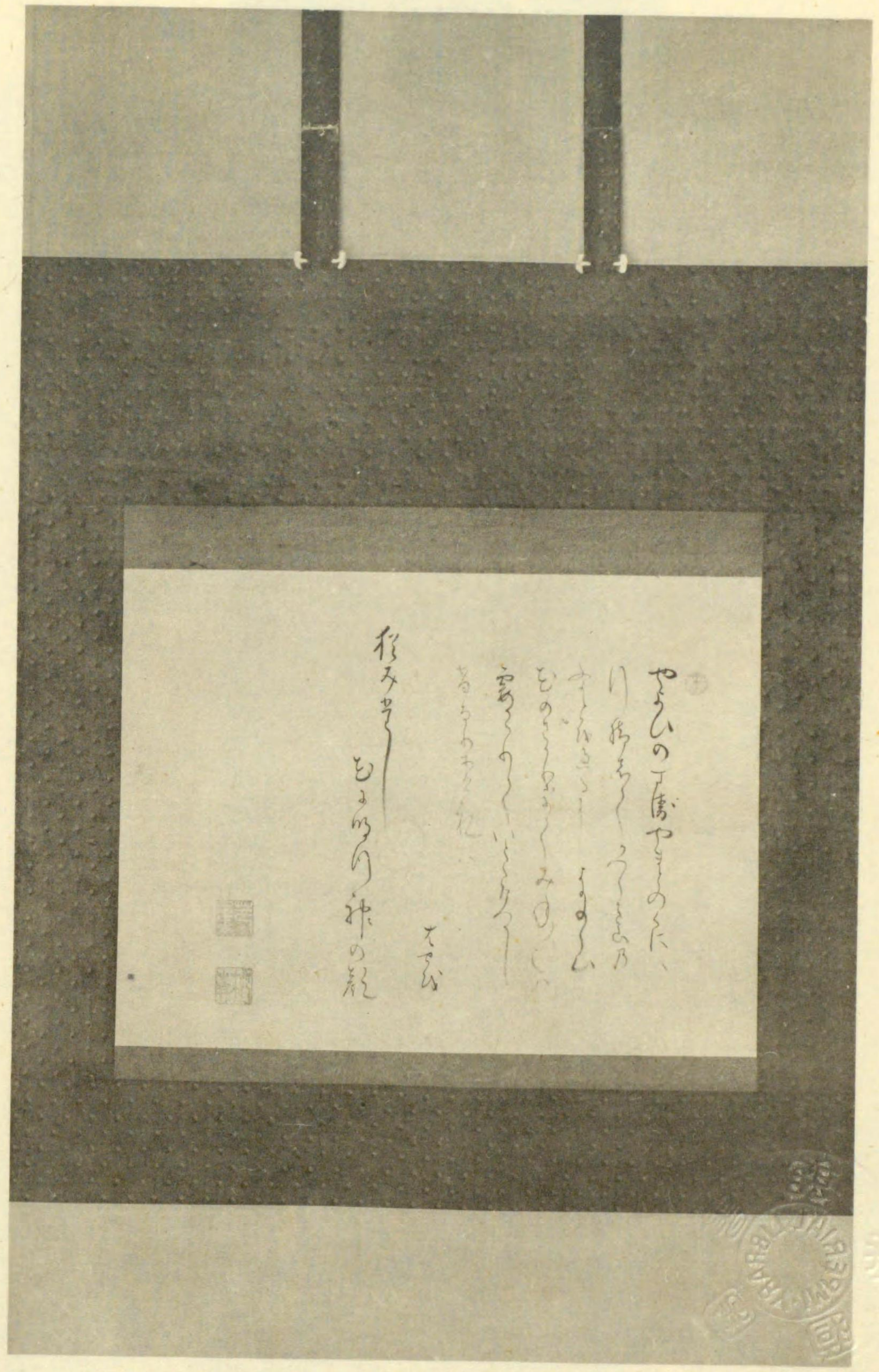
三井寺の門たゝかはやけふの月　はせを

芭蕉翁　紅粉花の句



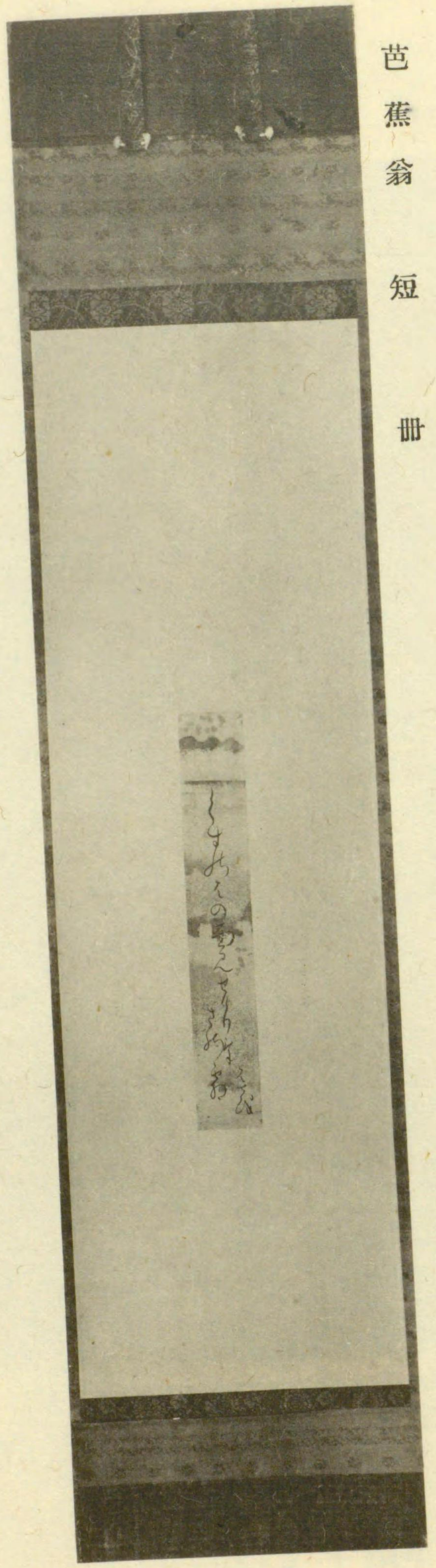
もかみにて紅粉の
花のさきたるをみて　はせを
眉はきをおもかけにして紅粉の花

芭蕉翁　吉野紀行の一節



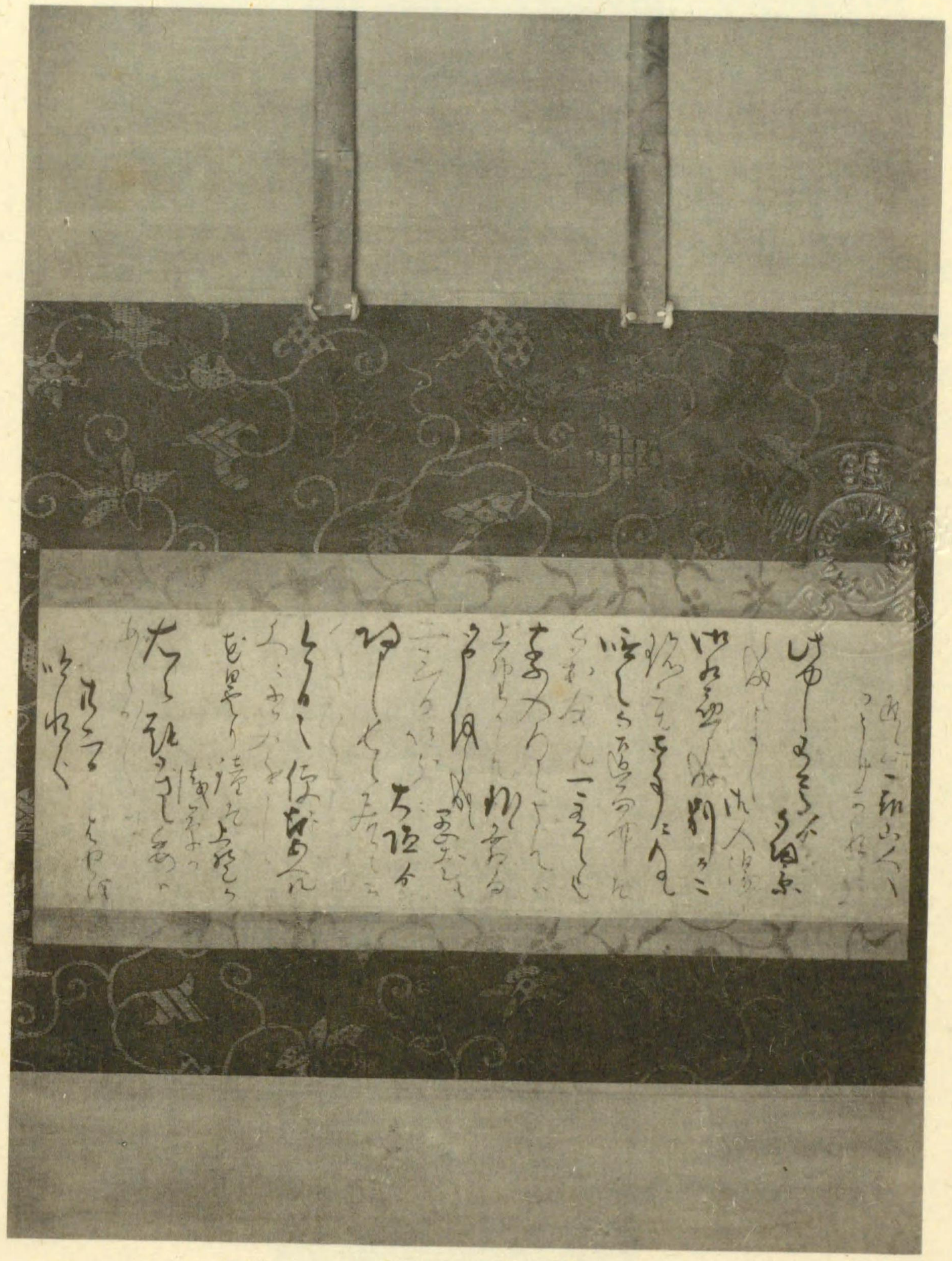
やよひのすゑやまとのくにゝ
行脚してかつらき山の
ふもとを通るによしの山
花のさかりにてみね〳〵は
霞こめていとゝなつかし
けなりければ
　　　　　　　　はせを
猶みたし
　花に明行神の顔

芭蕉翁短冊



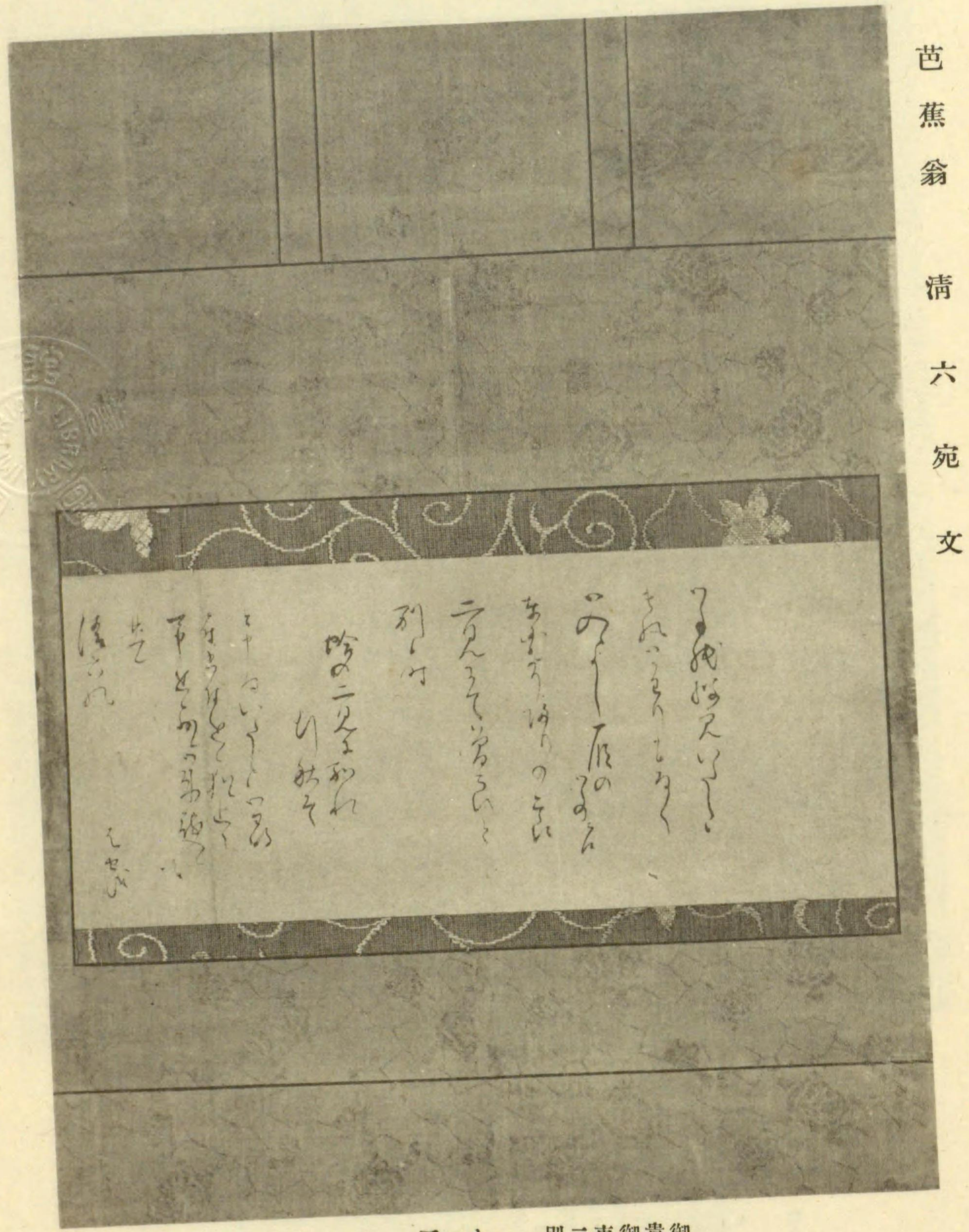
くすの葉の面見せけりけさの霜　　はせを

芭蕉翁吟水宛文



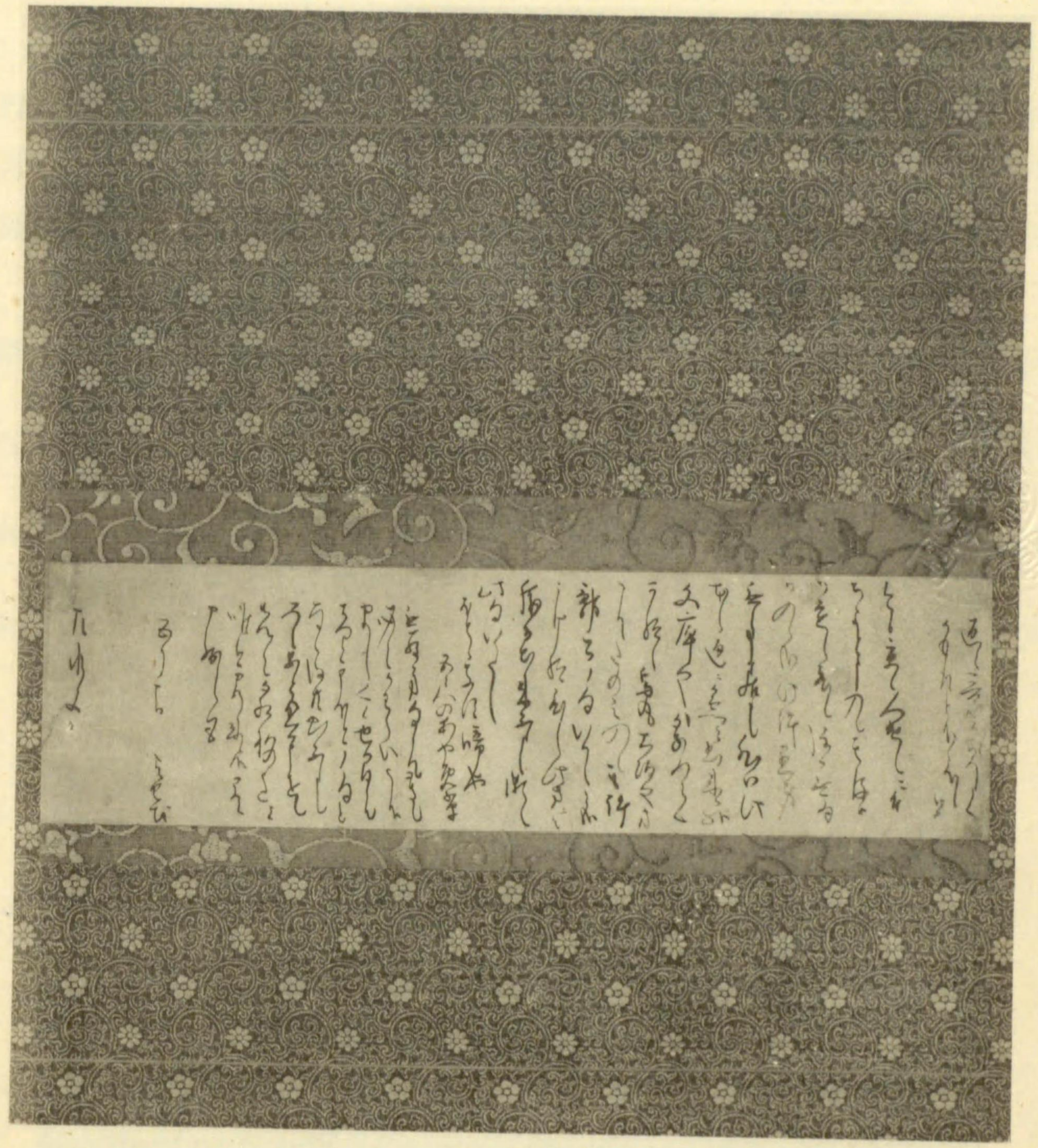
返々此一報山人へ
御とゝけ可給候
此中有馬より御歸京
被成候よし御入湯
御相應被成別而々
珍重御事之存候
嘸々御逗留中は
御出會も可有之與
察入存候さては
上野にて致候發句
御申越被成候愚老も
二三日以前ニ大垣より
歸申候長々居り候而
くたひれ申候へ共
今日之便ニ取あへず
文に書入進申候
花曇り鐘は上野か
浅草か
右之趣御さ候委は
あとより／＼已上
廿二日　はせを
吟水丈

芭蕉翁清六宛文



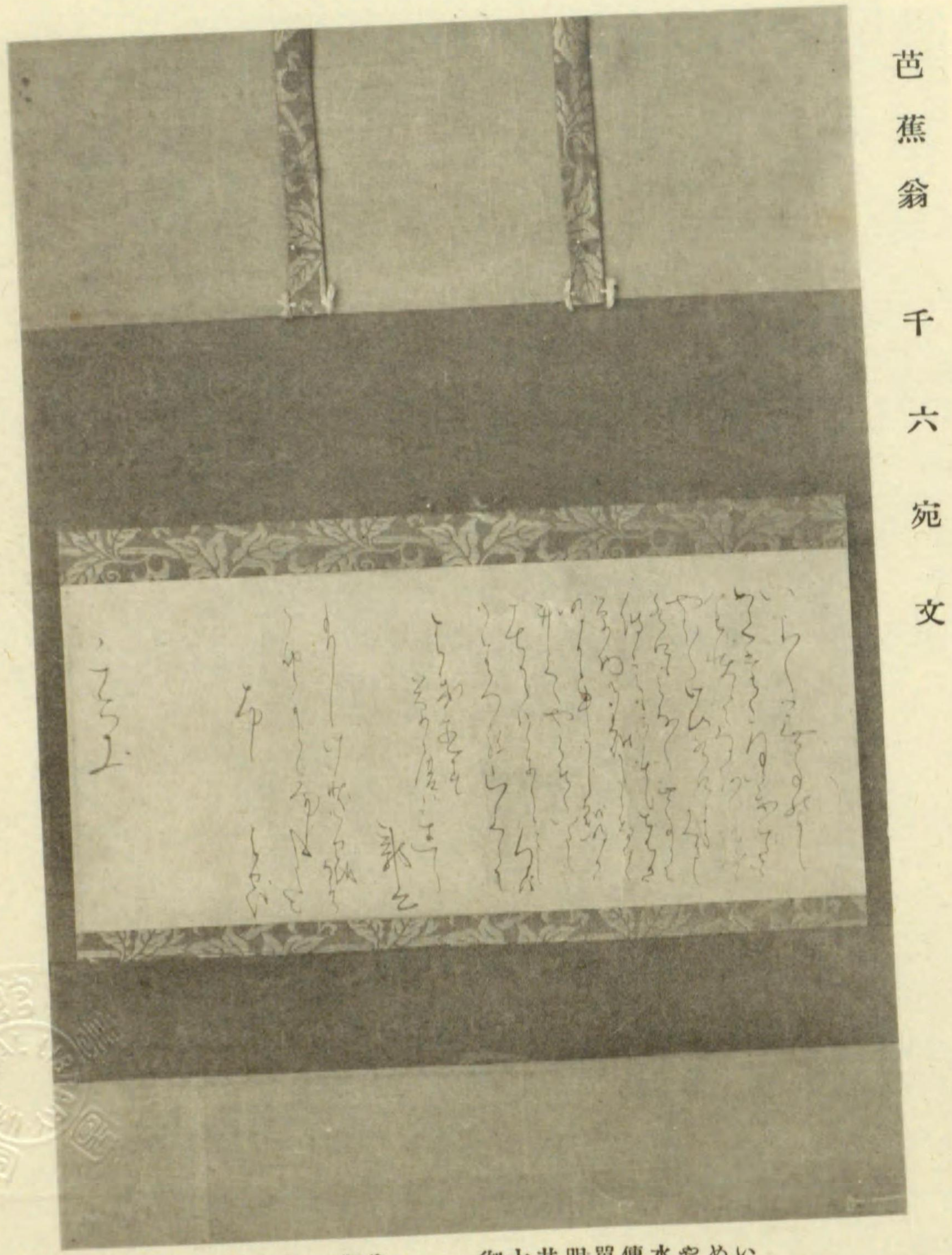
御手紙披見いたし候
貴様は御かわりもなく
御入候よし一段の御事に候
東國より歸りの節
二見にて曾良と
別候時
蛤の二見に別れ
行秋そ
と申句いたし候御尋
ニ付書付進候猶追々
可申遣候少々御來待入候
己上
廿一日　はせを
清六様

芭蕉翁　左水宛文



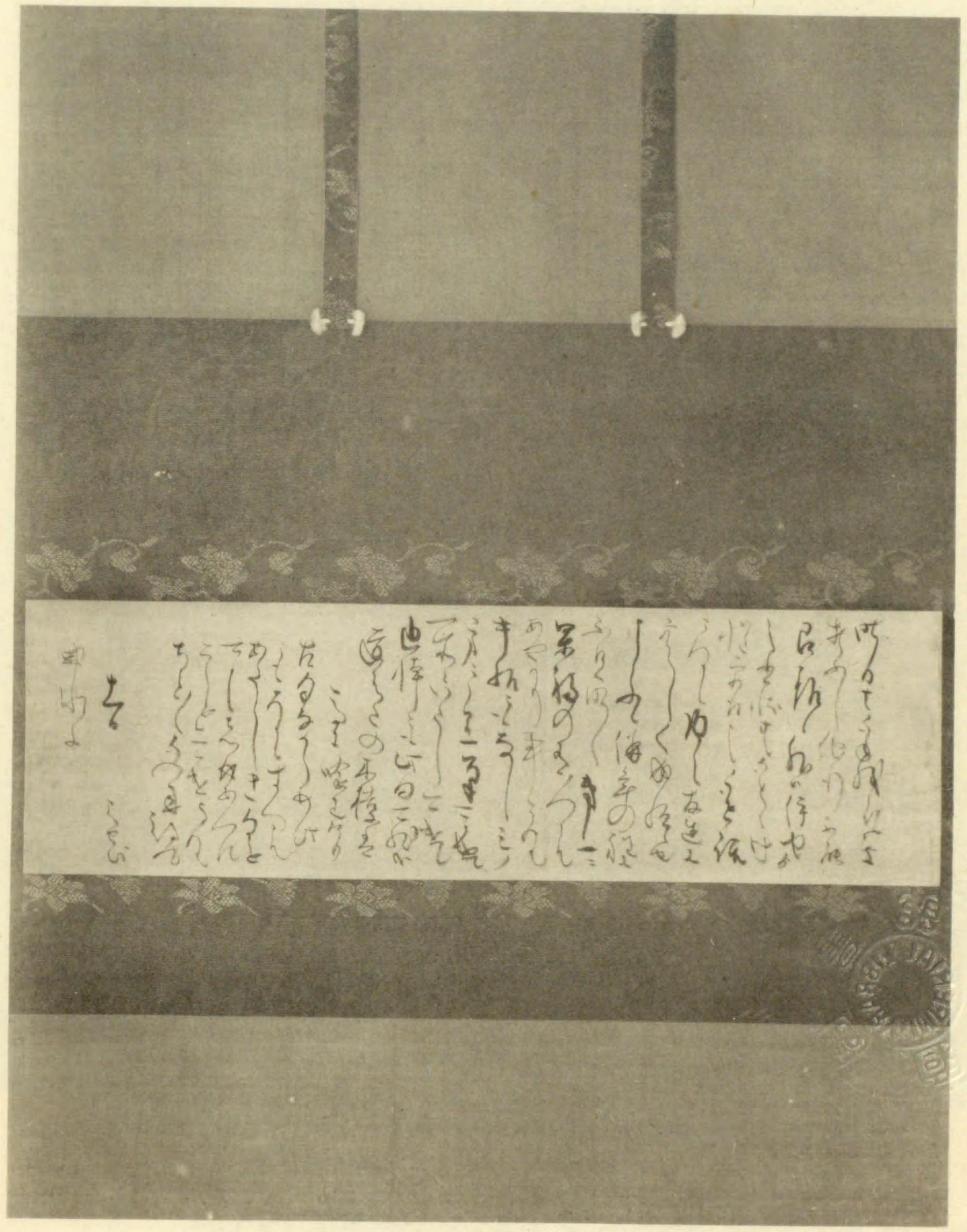
返々哥笑へよろしく
御取次被下度候已上
今日京へ人遣し候ニ付
ちよと申入候其後は
御遠々敷候彌御無爲
御入候哉此許愚身
無事居申候然は此
本之通ニ急々出來候哉
文庫やへ御あつらへ
可給候烏丸大阪や方
まてたのみ入候其許
郭公ノ句いかゝ候哉
うけ給度候此方ニて
勝而出來不申候漸々
此句いたし候
ほとゝきす啼や
　五尺のあやめ草
無辟方句にて御さ候
必々御わらひ被下
ましく候世間にて
はつと申ほとノ句と
存候得共出不申候
又々あとより可申進候
先々御挨拶迄ニ候
唯今客來候故早々
申殘し候以上
五月十日　はせを
左水丈

芭蕉翁　千六宛文



いよ〳〵御無事のよし
めてたく存候義三郎にも
やう〳〵此頃水口よりかへり候
水口もみな〳〵無事にて
傳言も御座候先日は
單物御越しかたしけなく
明日之事御申越明日は
井上へやくそくいたし申候
十七日からは參り可申候句を
御たつね山上にて
　はき直す
　　草履は遲し
　　　郭公
尙〳〵此狀御世話なから
御届可被下候面上申上候已上
十四日　はせを
千六丈

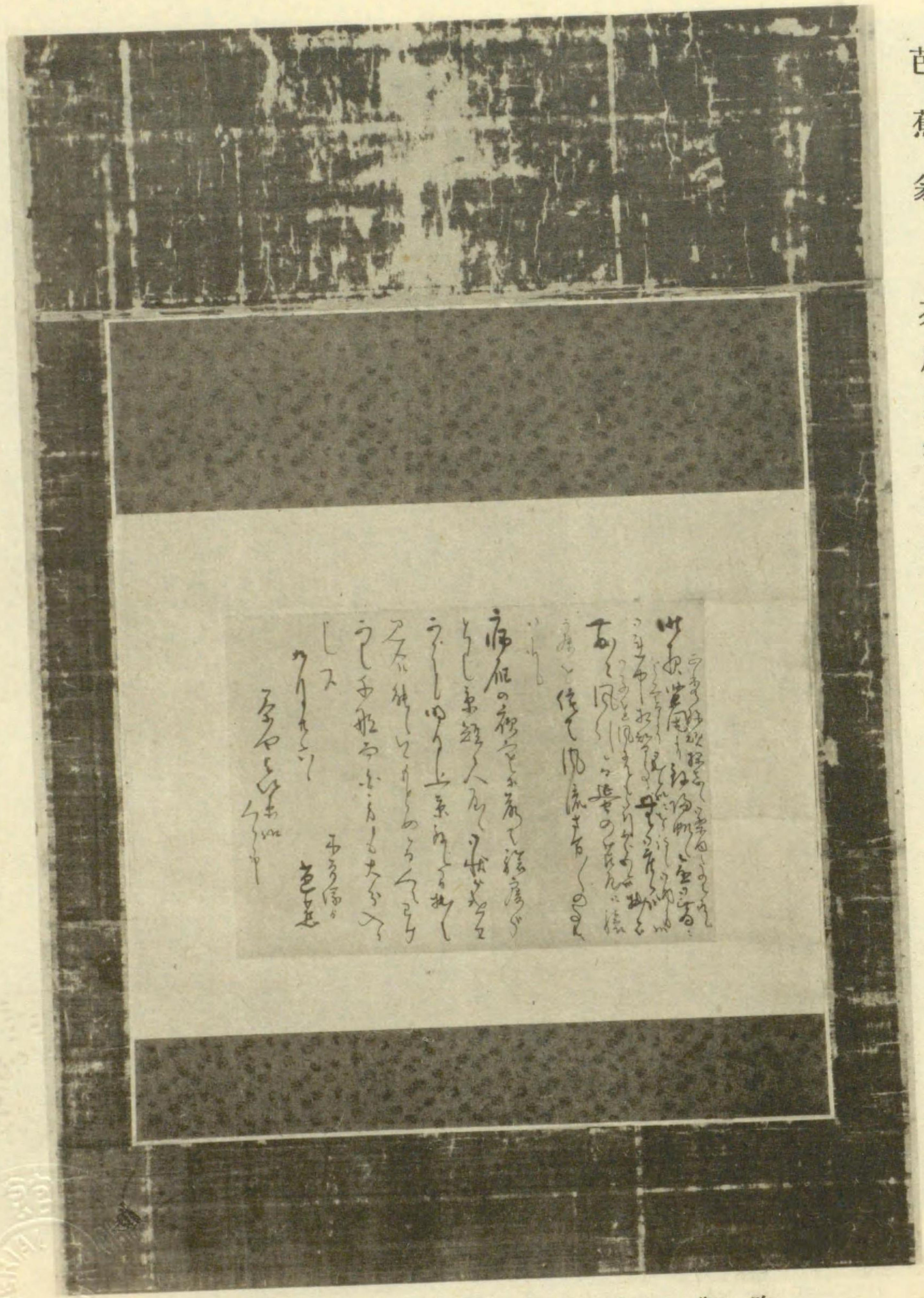
芭蕉翁　曲水宛文



昨日者御手紙被下候處
折ふし他行不能
即報候　然は伊せより
之書狀共御とゞけ
慥受取申候御世話
ニ存候段々友達も
空しく成給候由
中參候併年の程も
不足なく第一ニ
果福の有人にて
あやかり事ニ存候
貴樣ニもなしミノ
方ニ候間一筆可被遣候
一所ニいたし可遣候
追悼ニも此句可然哉
道はたの木槿は
　馬に喰れけり
古句なから如此
ニも存候すへて
あたらしき句を
可申候先取あへす
右之ことく可遣與存候
ちと〳〵御入來待入候
十一日　　　はせを

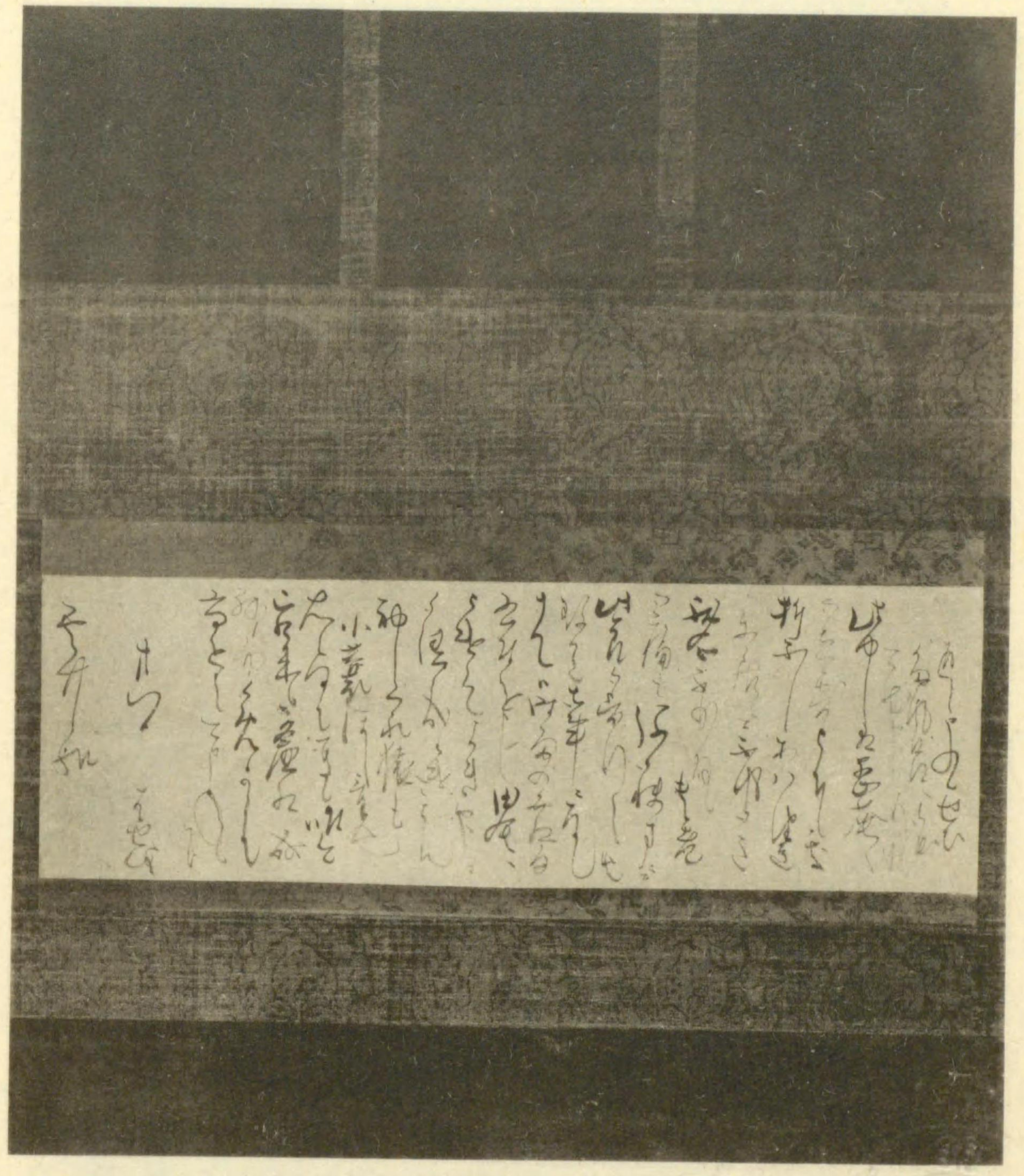
曲水丈

芭蕉翁　茶屋與次兵衞宛文



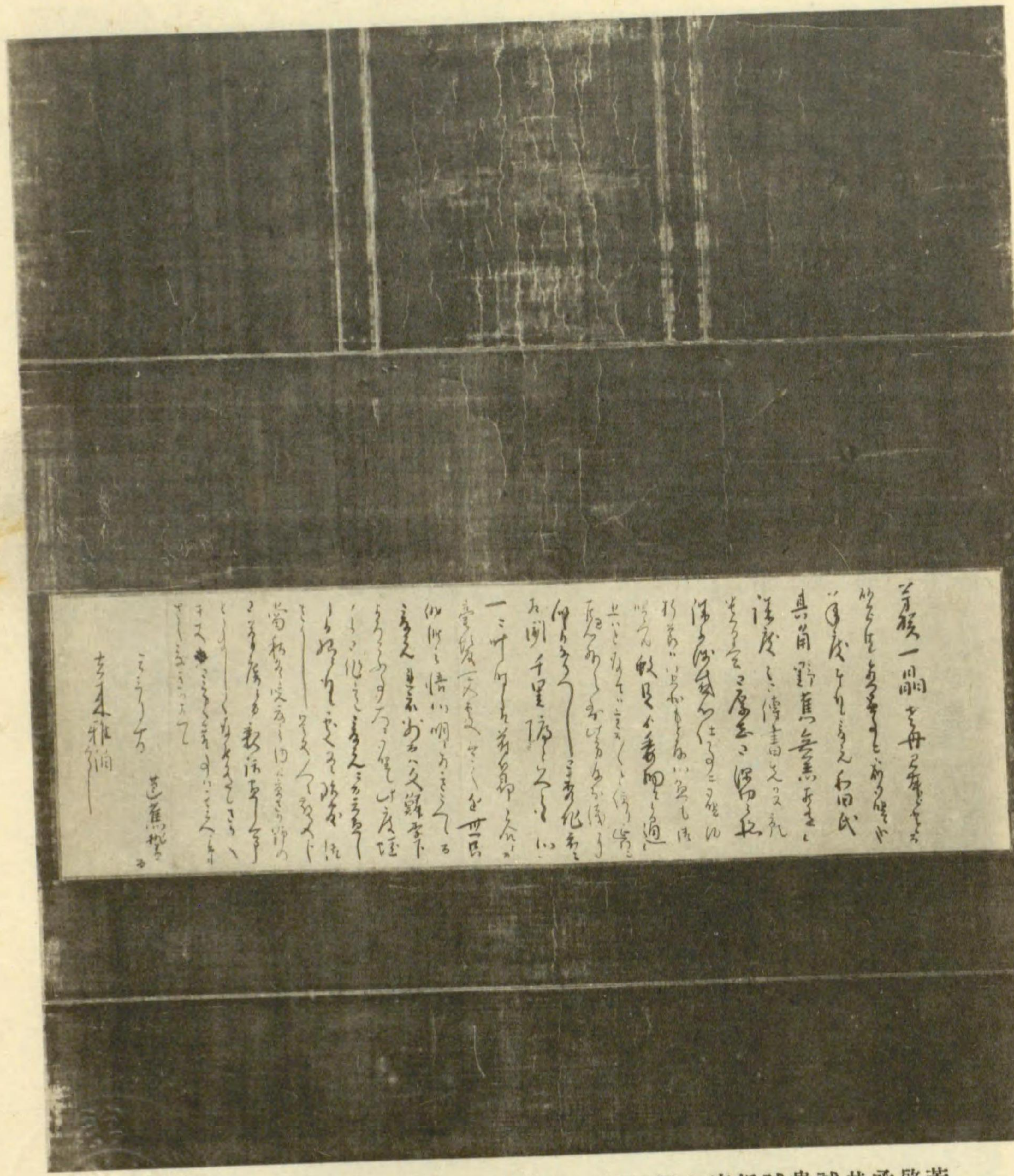
正秀珍碩捨志へ御案内たのみ存候
昨夜堅田より致歸帆候愈御無爲に
今暮より御出候樣ニ奉待候御内方樣
御連中相替事無御座候哉拙者
御子達風にても御引不被成候樣
散々風引候而蜑の苫屋ニ旅
寢を侘て風流さま〳〵の事共ニ
御座候
病雁の夜寒に落て旅寢哉
と申候京短尺屋へ御狀被遣
可被下候明日上京致候間拙者
見合能候はゞもとめ候而人にわけ
可申候千那尙白方にも大分入り
申候以上
　　　　　　　　木曾塚より
　　　　　　　　　　芭　蕉
九月廿六日
　茶や與次兵衞樣
　　人々御中

芭蕉翁 雲竹宛文



返〳〵申入候せひ
かま風呂へ御出
可然やうに存候
此中は愚庵へ
御立寄被下候處
折ふしあは津邊
參居候て不得御意
殘念不少存候貴老
御痛も彌御快方ニて
此節御歩行之由
珍重御事ニ存候
さては時雨の發句
書付進申候田舍へ
被遣候てよきやうに
御認被成御遣可被下候
初しくれ猿も
小蓑をほし氣也
右之句に御座候唯今
客來候而麁相成
紙面御免可被下候
尚近々可申承候已上
廿八日　はせを
雲竹樣

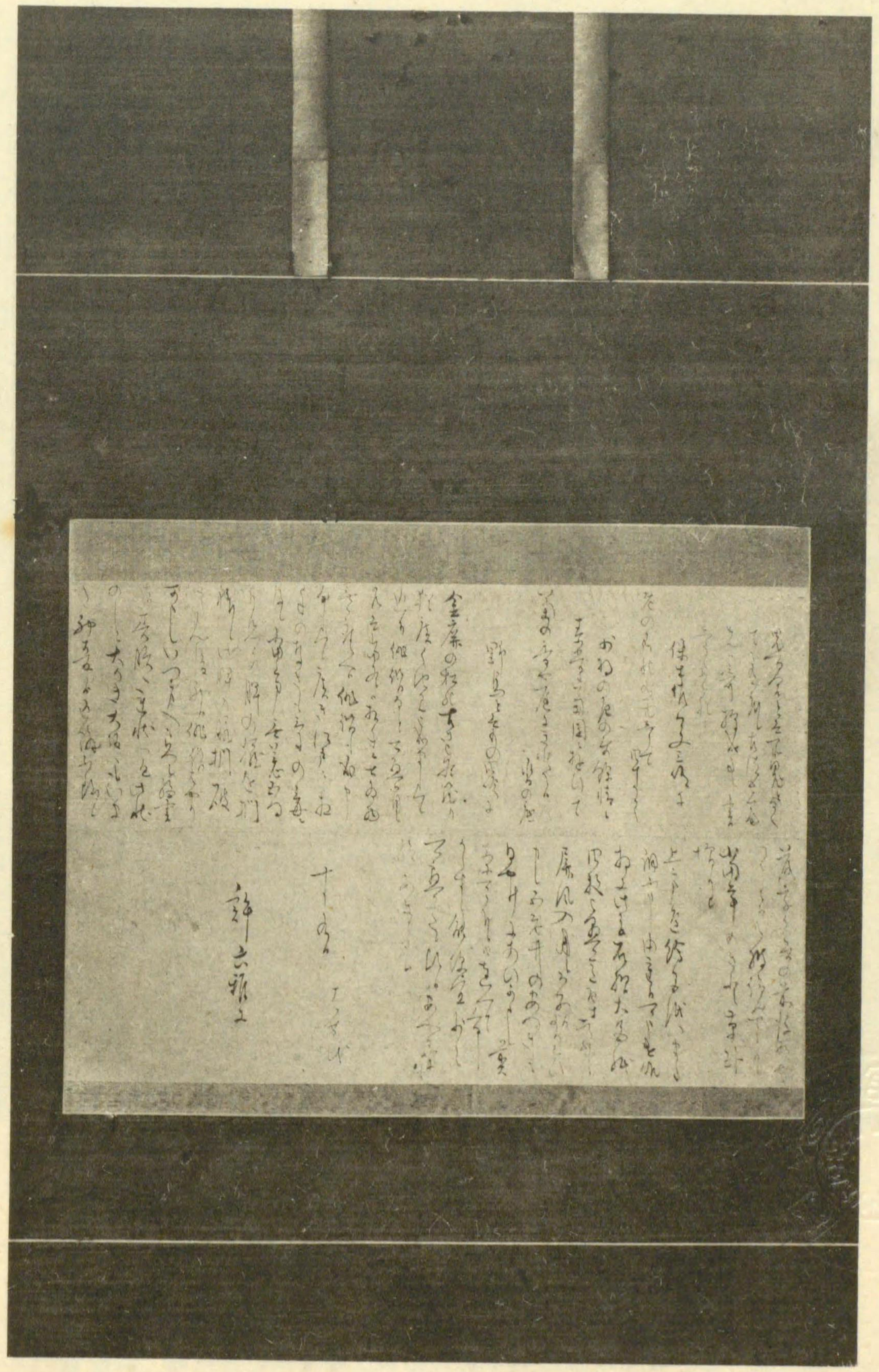
芭蕉翁 去來宛文



芳賀一晶老母見舞被登候而
啓上仕候愈御無事被成御座候哉
承度奉存候爰元和田氏
其角野蕉無恙罷有候
誠度々御傳書先日又預
貴墨御厚志御深切之段
誠不淺感心仕事に御座候
折節は御書狀とも存心懸も御
座候へ共蚊足より委細ニ被通候
上はと存ては重而〳〵と便り延引ニ
罷過心外之至此方存分淺に
似たるなるへしと秀作度々
相聞千里隔といへとも心
一ニ計時は符節と合候而
毫髪可入處無之近世只
俳諧之悟心明ニ相聞え候而
爰元連衆別而は文鱗李下
よろこふ事大ニ御座候此度蛙
之御作意爰元ニ而云盡し
たる樣に存候處又々珍敷御
さかし是又人々驚入申候
當秋冬晩夏之内上京さか野の
御草庵ニ而親話盡し可申
とたのしく存罷有候さかへ
貴丈之御方へ參候事は其元ニ而も
さたなきかよく候
ミ三月十日　芭蕉桃青
拜
去來雅伯
人々御中

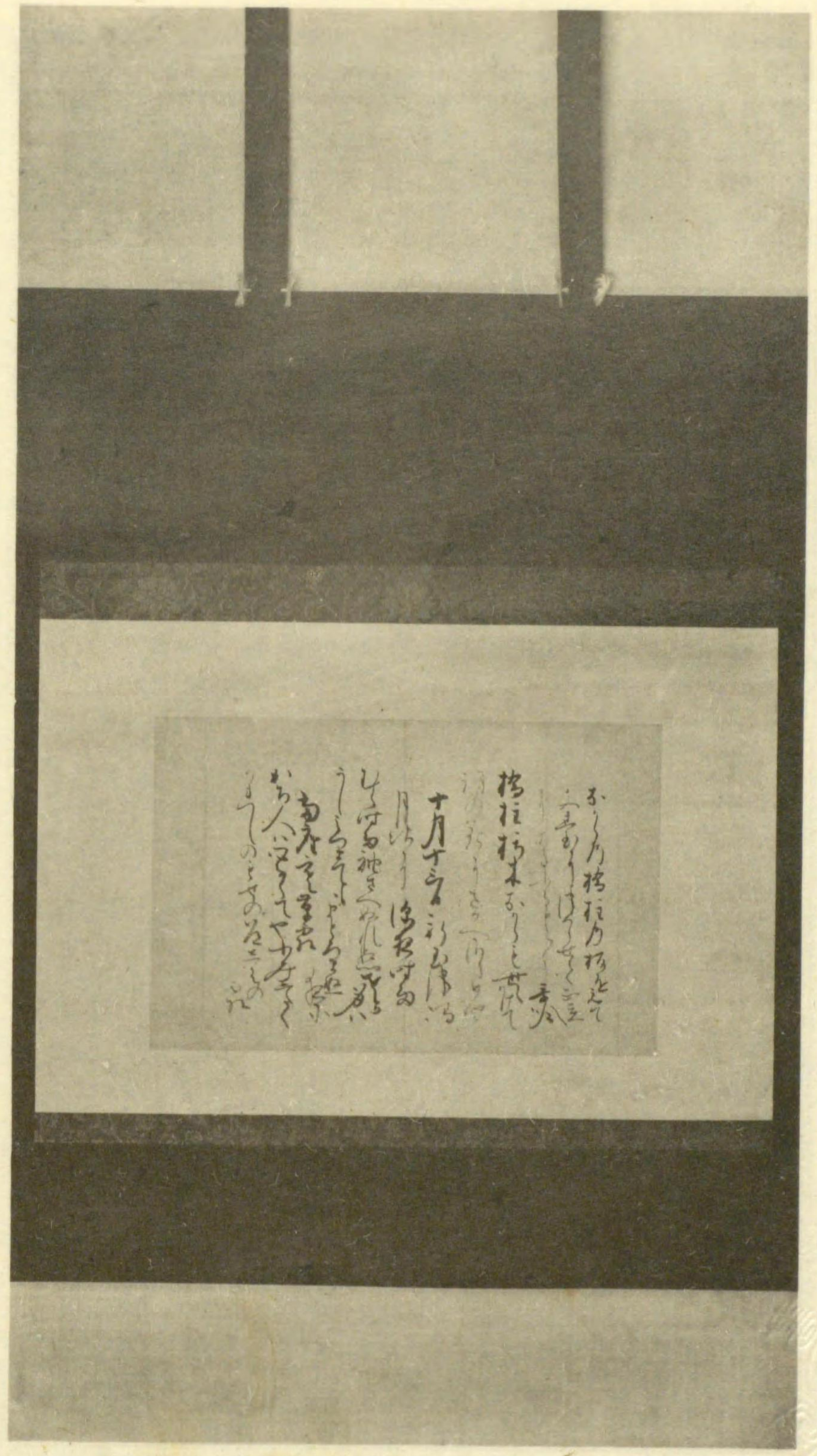
芭蕉翁四師

芭蕉翁許六宛文



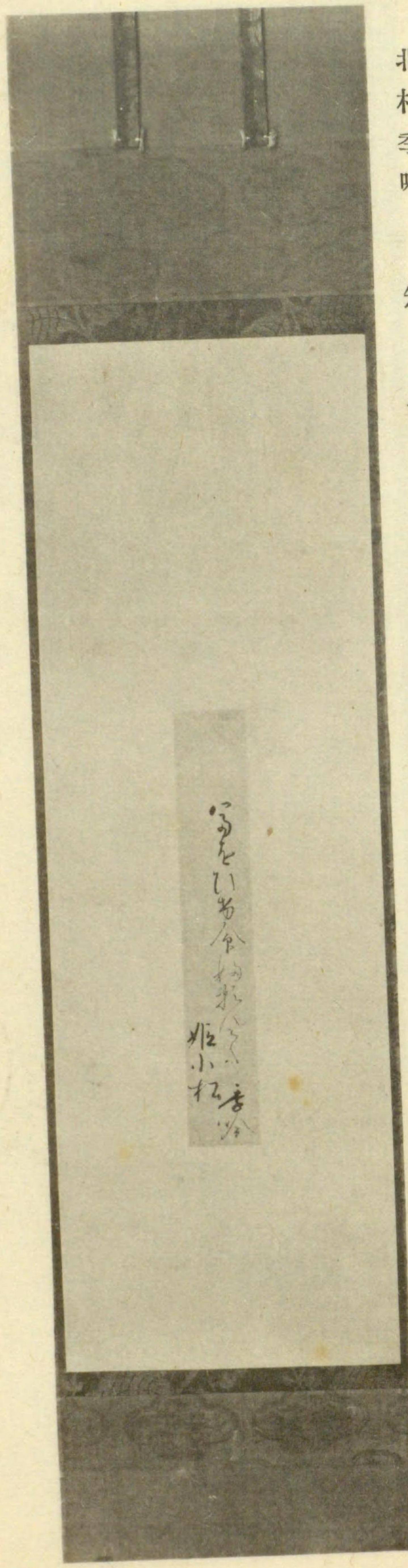
鬼百合と云所鬼となく
ても有度候古法長篇
先は奇特成事書
したゝめられ候
　保生佐太夫三吟に
老の名の有共しらて四十から
　少將の尼の哥餘情候
　素堂菊園ニ遊ひて
菊の香や庭にきれたる沓の底
　野馬と云もの四吟に
金屏の松の古さよ冬籠り
猶廣く他見被成ましく候
追而俳諧なと可懸御目候
乍去當冬は相手可爲物
無御座候へは俳諧も成申
ましく候廣き江戸ニ相
手のなきも氣の毒ニ
存候當方無恙五句
自然に脾の臓を押
躰候此脾の臓押破
たらん後初而俳諧はやり
可申候いつ方へも久々絶書
音善膳へ連狀一通此狀
のこと大かき大坂へもいま
た初夏より返翰不致候
落字文言の前後相ゆ
つり候而御披覽可被下候
當年めきと草臥
增り候
上方邊繪色紙いまた
調不申由重而可申遣候
扨又此度石摺大色紙
四枚被懸御意辱折ふし
屏風入用に而別而よろとひ
申候五老井のあつきも
日やけにあひ可申候煎
茶可被下候由遲くてくるし
からす候能便宜少々
可懸御意候頃日あへ茶にも
給あき候以上
十月九日　　はせを
許六雅丈

北村季吟　詠草



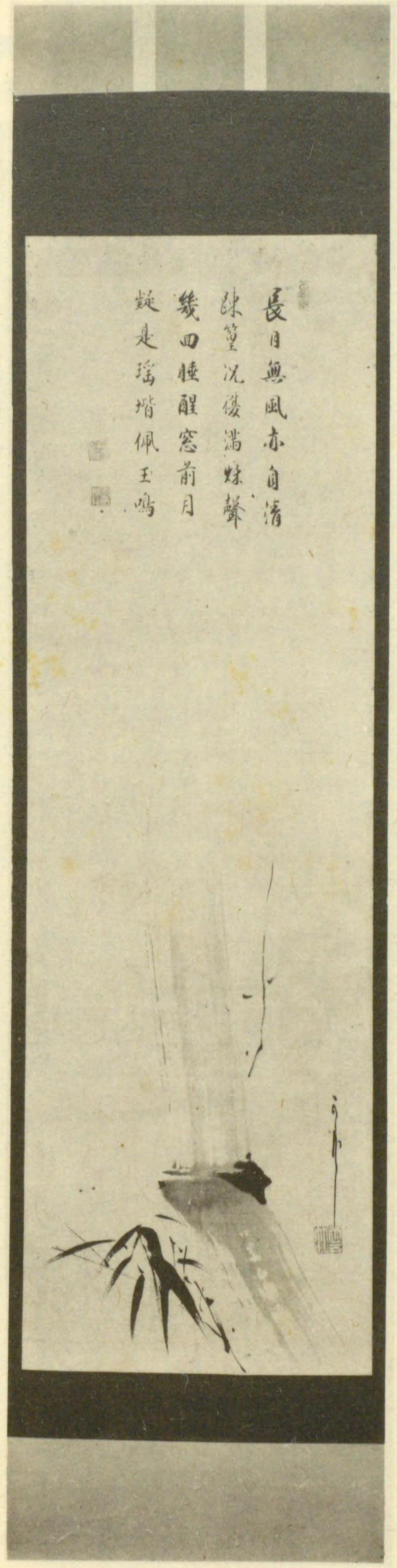
なからの橋柱の板をえて
文臺につくらせて正立
にあたふるとて　季吟
橋柱朽木なからも世ゝかけて
詞の花にさかへさらめや
十月十三日新玉津嶋
月次に深夜時雨
むら時雨袖さへぬれぬ老か身は
うしみつまてもまとろまぬ夜に
當夜寒草霜
かち人は心なくてやふみしたく
かれしのもせの道しはの霜

北村季吟　短冊



富をひけ命婦頼んて姫小松　季吟

北向雲竹　墨竹書讃



長日無風亦自清
疎篁況復滿秋聲
幾回睡醒窓前月
疑是瑤堦佩玉鳴

雲竹

森川許六　竹雀

佛頂禪師書

前揭芭蕉翁遺愛笏銘

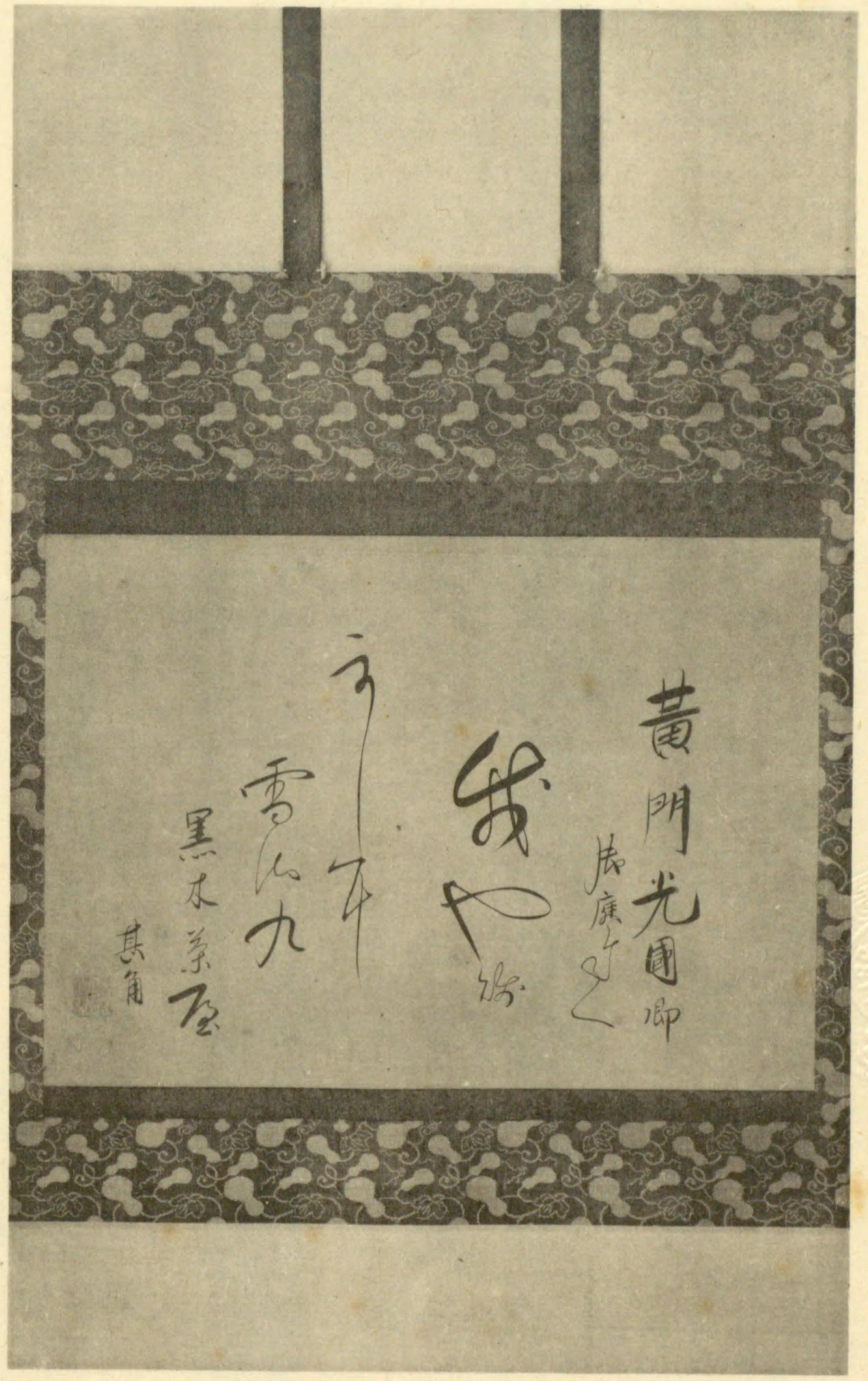
表　遊行無意如獅子王

裏　飃漂遊風士桃青需

雲岸野衲佛頂書

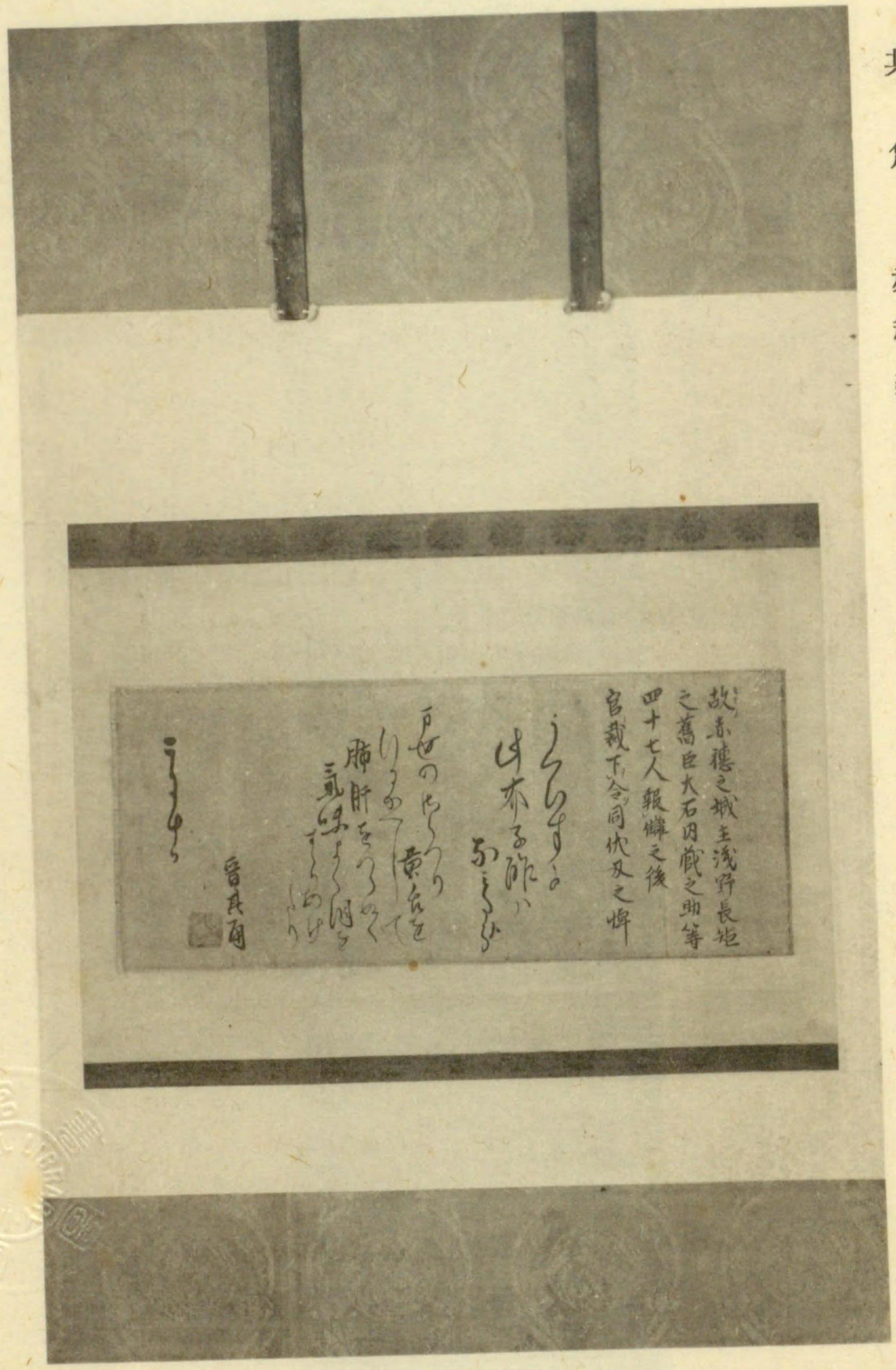
蕉門十哲

其角　黒木茶屋句



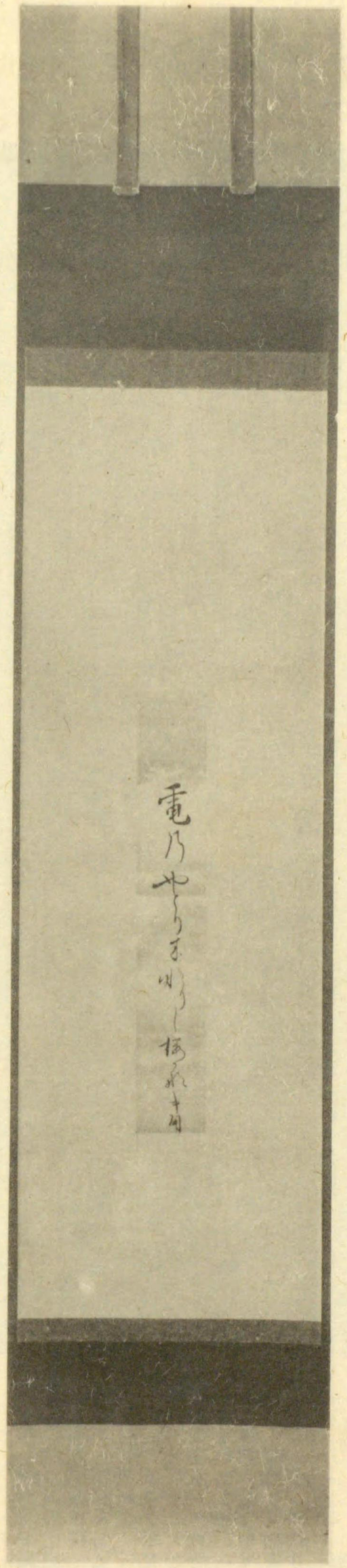
黄門光圀卿御庭にて
我や賤うしに雪さく黒木茶屋
其角

其角　赤穂義士の句



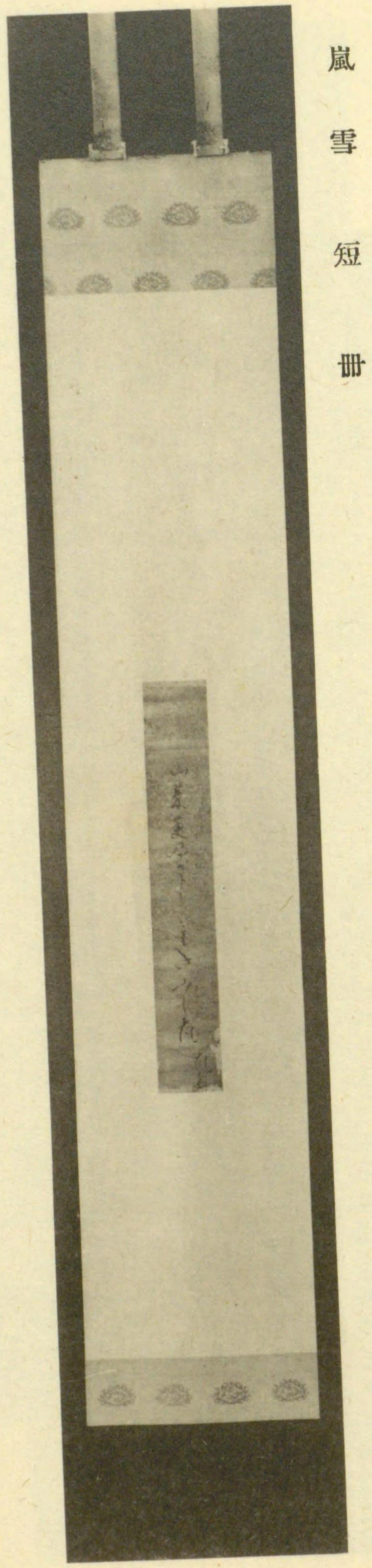
故赤穂之城主淺野長矩
之舊臣大石内藏之助等
四十七人報讎之後
官裁下令同伏双之悼
うくひすに
此芥子酢は
なみた哉
万世のさえつり黄舌を
ひるかへして
肺肝をつらぬく
氣味よく泪を
すゝりあけたり
晋其角
二月十日

其角短冊



電のやとり木なりし櫻かな　其角

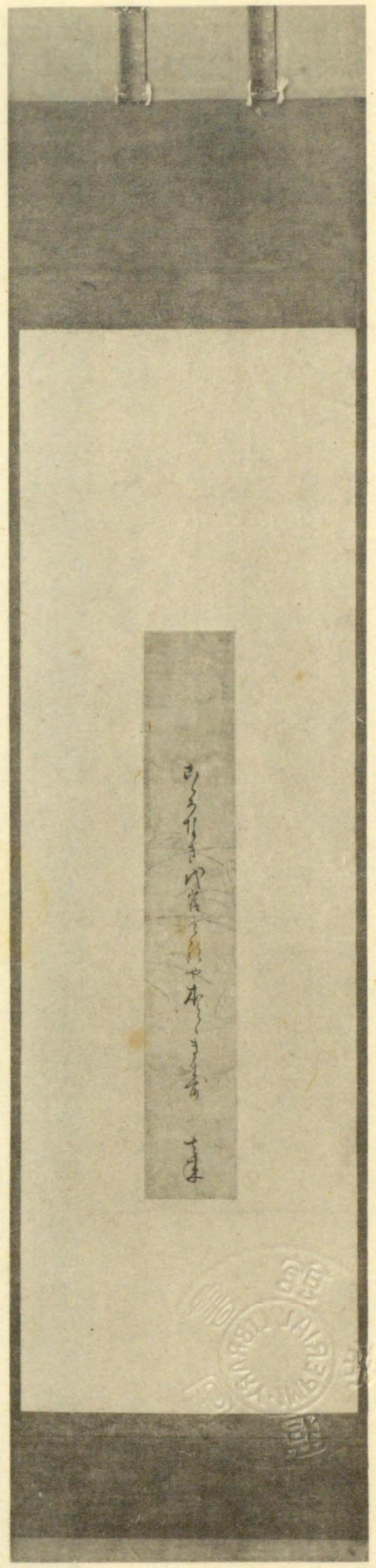
嵐雪短冊



山茱萸のかさにや重きふし颪　嵐雪

去來短冊

こゝろなき代官殿やほとゝきす　去來



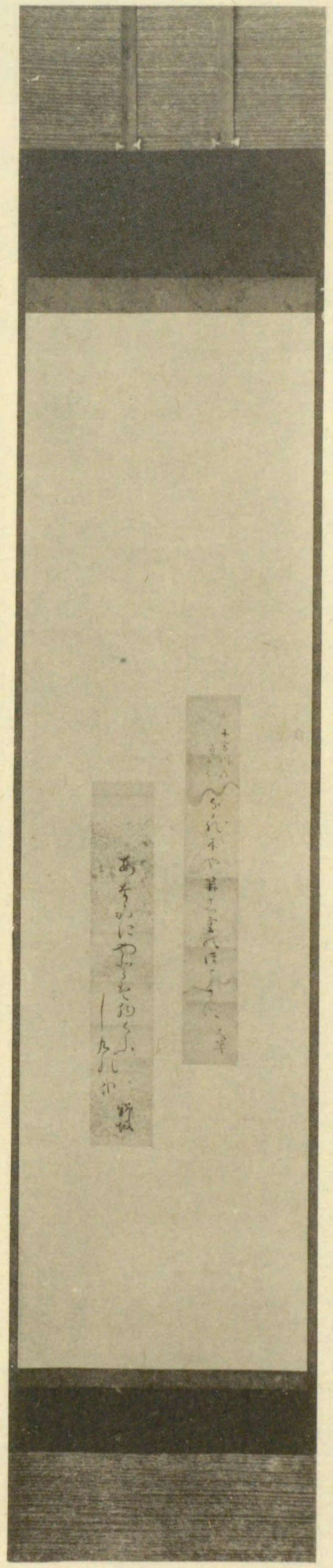
去來短冊

名月や更ゆく空と水の音　去來

許六自書讃

燈籠の灯もかすかなり虫の聲　許六

丈草短冊

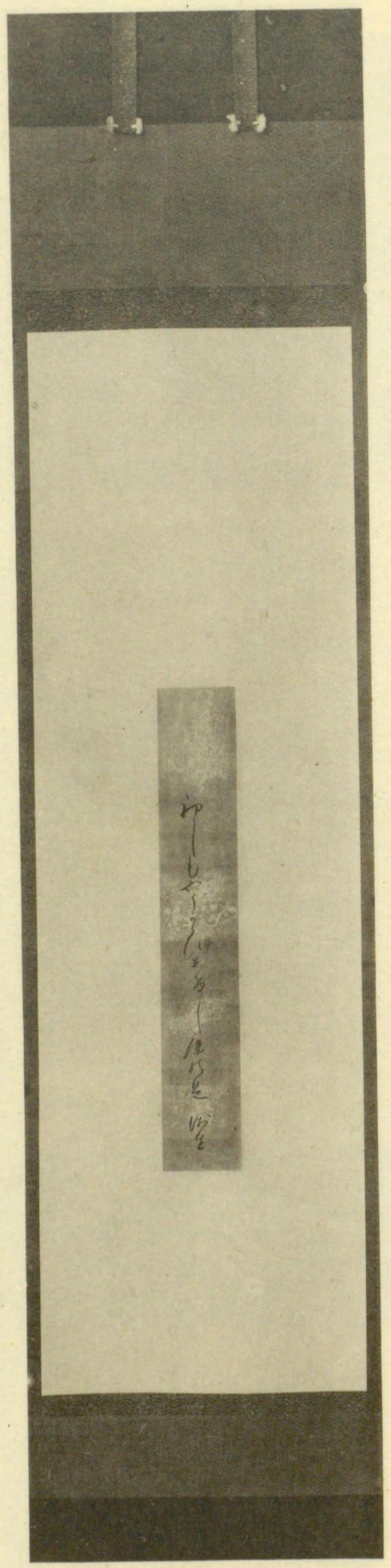


木曾川の邊にて　なかれ木や篩の空のほとゝきす　丈草

野坡短冊

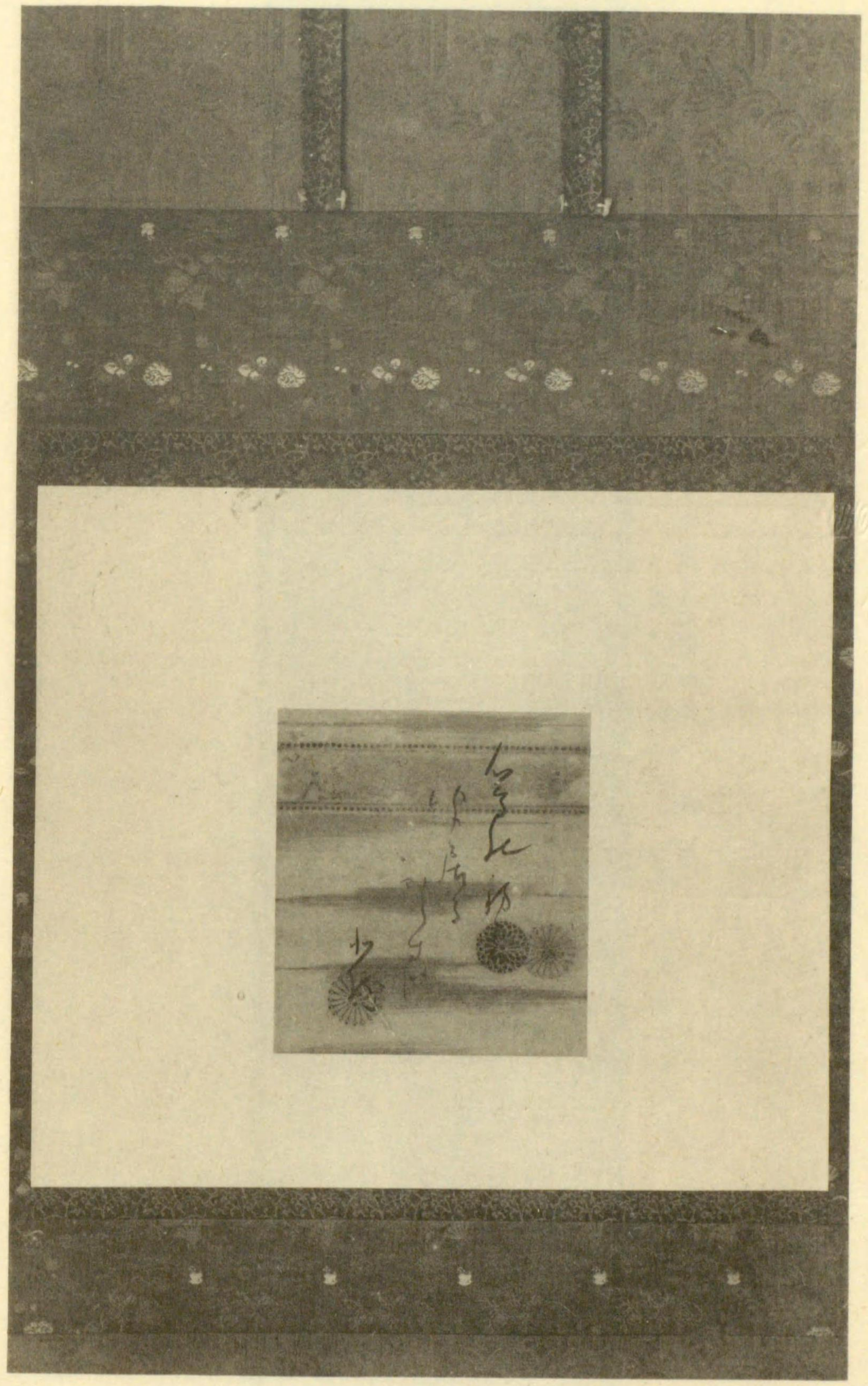
あたゝかにやとは物くふしくれ哉　野坡

野坡短冊



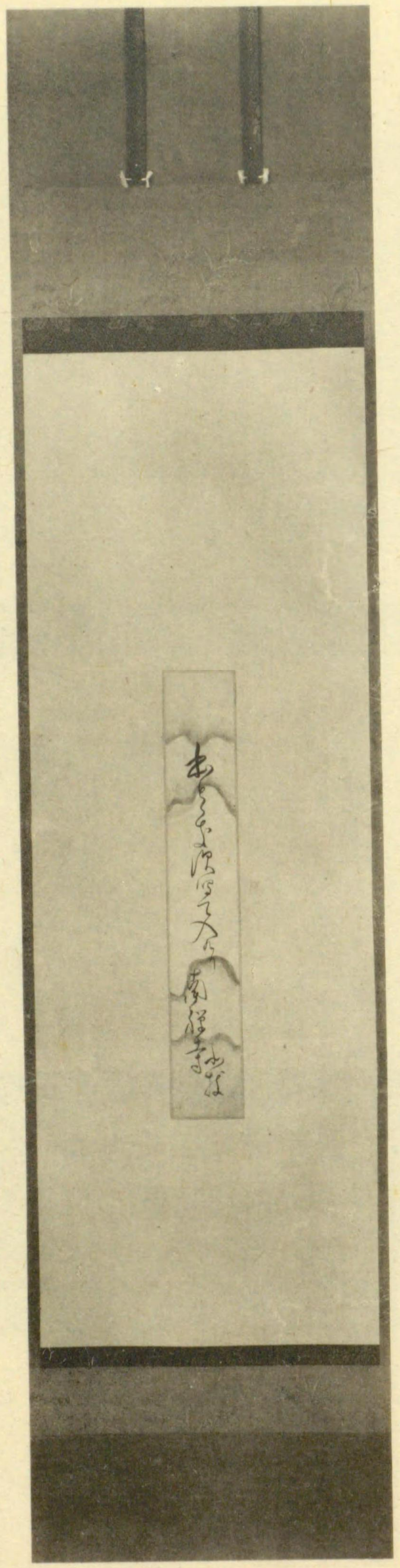
初しもやうかゝひあけし鹿の足　淺生

北枝色紙



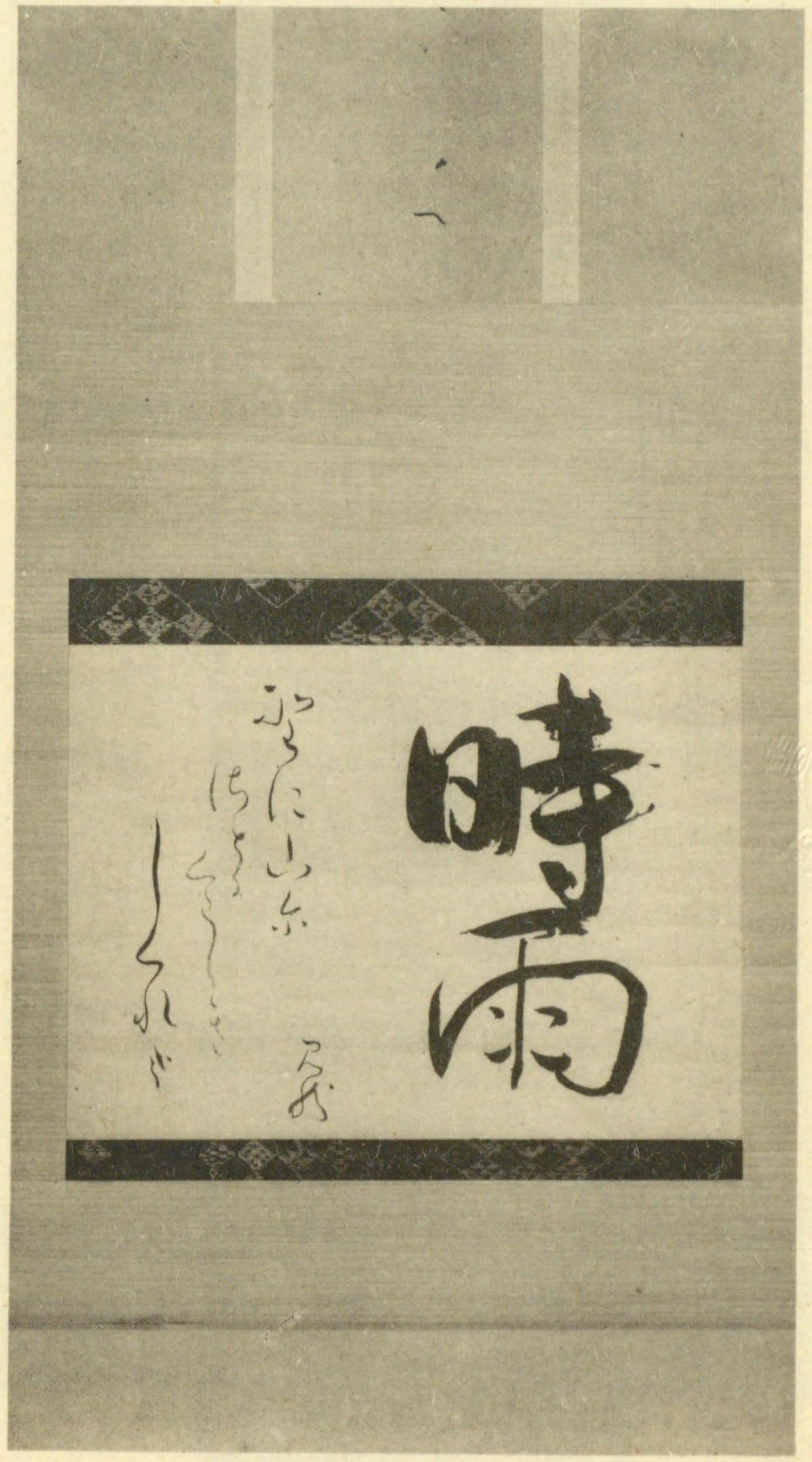
鶯の初音聞居るからす哉　北枝

北枝短冊



ほとゝきす鳴て入りけり南禅寺　北枝

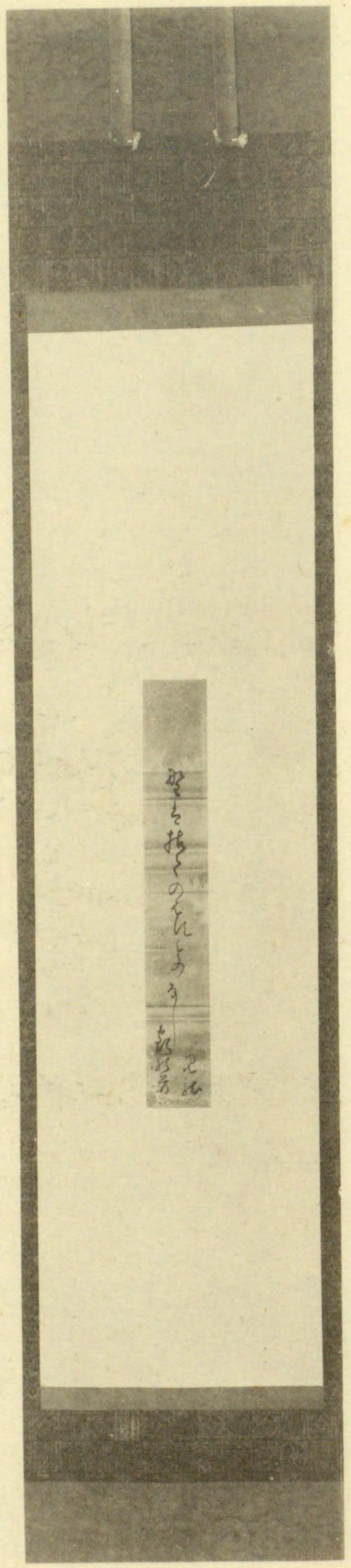
支考　時雨の句



時雨

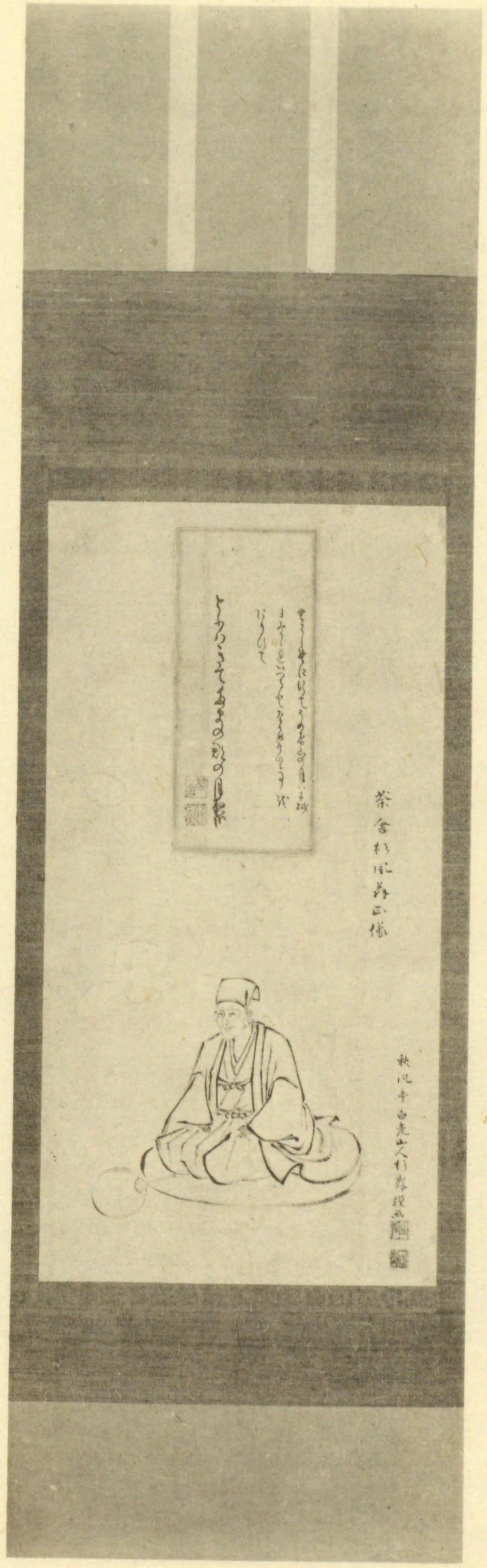
野に山にさとにくたしきしくれ哉　見龍

支考短冊



野は枯てのはすものなし鶴の首　見龍

杉風像詠草

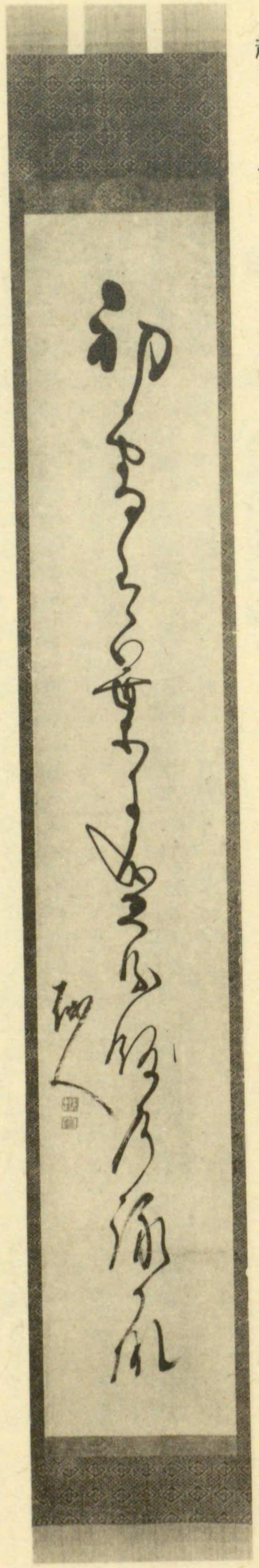


むさし野に行てその原山の月は木賊
にみかゝれいつるとなかめけむ事を
おもひて
とりはきてたまの郡の月夜哉

秋風亭白老山人杉露謹書

茶舍杉風翁正像

越人 初雪の句



初雪は葉に盛る飯の詠哉　越人

四師小傳

季吟（芭蕉翁俳諧の師）

季吟は、通稱を久助と云ひ、拾穗軒、又蘆庵、七松子、などゝも號せり、寛永元年十二月山城國粟田口に生れ、後近江國野洲郡北村に住して北村を姓とす、始醫を業とし、後京都の新玉津嶋の祠官となり、松永貞德の門に入りて和歌俳諧を學び、又國典に通し、元祿二年德川幕府の徴により江戶に出て累進して再昌院法師に叙せられ、歌學所となり、俸米五百石を賜はる。寶永二年六月十五日八十二歳にて歿す。芭蕉翁の和漢の學に通せしは一に此人に培はれしに因る。

雲竹（芭蕉翁書道の師）

雲竹は、北向氏、溪翁、玉蘭堂、太虚庵等の數號あり、京都の人、通稱八郎右衛門と稱す、能書の聞え高く又墨竹を善くす。元祿十六年五月十二日歿す、年七十二。

許六（芭蕉翁繪畫の師）

許六は、森川氏名は百仲、字は羽官と稱し、又五老井、菊阿佛、琢々庵、風狂堂、蘿月洞等の諸號あり、江州彥根の藩士、畫を狩野安信に學び、俳諧は芭蕉翁を師とす。正德五年八月廿六日沒す、年六十。

佛頂禪師（芭蕉翁參禪の師）

佛頂禪師は、河南と號し、又哮吼子、懶華、蟹窟主人とも稱せり、初め鹿嶋根本寺に住し、屢々江戶に出て深川臨川寺を假りの庵住地として居らる、翁は常に爰に往きかふて參禪され、又貞享四年鹿嶋紀行の時は根本寺を訪問せらる、其後禪師は下野國那須雲岸寺に入りて、正德五年十二月遷化す。年八十七。

蕉門十哲小傳

其角

其角は榎本氏、竹下東順の一子、晋子、寶晋齋、狂而堂、狂雷堂、六藏庵、螺舍、薹子、涉川等の數號あり、幼にして穎悟、十四歳にして芭蕉翁の門に入り、十六歳圓覺寺大顚和尚に參禪し、書を佐々木玄龍に、畵を英一蝶に學び、蕉門第一の高足と稱せらる、翁の歿後江戶座の一派を興し盟主となる、寶永四年二月晦日歿す、年四十八。

嵐雪

嵐雪は服部氏、雪中庵、不白軒、黃落庵、玄峰堂等の數號あり、江戶の人とも、亦淡路の人とも云ふ、孰れが眞なるかを知らず、桃靑廿歌仙に嵐亭治助の名を以て列に入れゝば、其角と相前後して芭蕉翁の門に入りたるなるべし。蕉門の高足中、其角と嵐雪とを以て其嵐と双び稱せられ、翁より桃櫻と愛せらる。寶永四年十月十三日歿す、年五十四。

去來

去來は、向井氏、名は兼時、元淵と稱す、落柹舍、千載亭等の號あり、長崎の人向井元升の二男にして天文曆學に通す。洛に出て仕官し、芭蕉翁に從ひ俳諧を學び、關西に於ける俳諧奉行と稱せらる、洛東聖護院に住し、又嵯峨小倉の山麓に別莊を營み落柹舍と號す。寶永元年九月十日歿す、年五十四。

許　六

許六傳は前掲四師傳の中に述ぶ。

丈　草

丈草は、內藤氏、林之助と稱し、懶窩、弘句庵等の號あり、尾張犬山藩に仕へ、辭して佛門に入り俳諧を芭蕉翁に學ぶ。翁の歿後粟津龍ヶ岡に庵を結びて佛幻庵と稱し、三年の喪に服す。寶永元年二月廿四日歿す。年四十三。

野　坡

野坡は、信田氏字は彌亮、幼名庄一郞と稱し、樗子、樗木社、半醉堂、紗方齋、三日庵、淺生庵其他數號あり。父は齋藤庄三郞と稱し、寬文二年正月三日越前福井に生る。後ち一家江戶に出て越後屋に奉公せりとも傳ふ、芭蕉翁に從ひ俳諧を學び、晚年大阪に住し高津に無名庵を結び、高津野々翁と呼ぶ。元文五年正月三日歿す、年七十九。

北　枝

北枝は、立花氏源四郞又次郞右衛門とも稱す、翠臺、趙子等の號あり、加州金澤の人、加賀藩の研工にして牧童の弟なり。蕉門中北陸の重鎭と稱せらる。享保三年五月十二日歿す。

支　考

支考は、各務氏、見龍、獅子庵、野盤子、蓮二坊、東華坊、西華坊、梅花佛其他數號あり、美濃人伊勢の涼菟の紹介にて蕉翁の門に入り、奇略縱橫の才あり、翁の歿後美濃派の一派を興し天下を風靡せるの槪あり。享保十六年二月七日歿す。年六十七。

杉　風

杉風は、杉山氏通稱鯉屋市兵衛と稱し、一元、衰杖、採茶庵、五雲亭、茶舍、蓑翁等の數號あり、江戶小田原町に住し、幕府の御納屋御用たり、芭蕉翁江戶入府以來入門し且つ無二の後援者にして關東の俳諧奉行の稱あり。享保十七年六月十三日歿す。年八十六。

越　人

越人は、越智氏、名は十藏負山子と號す、自ら越の人と稱すれども生國確かならず。名古屋に住し夙に蕉門に入りて連句の名手たり。常に支考と相容れず屢々論難を累ぬ。享保中歿、年八十有餘。

芭蕉翁終焉の吟

此幅三浦觀樹將軍遺愛の一軸にして、芭蕉翁の絕筆なりとす。然れともかゝる場合にありて如何と云ふ說あらん歟、なれども亦翁の筆致に髣髴たる所あり。左に當時の情況を物語れるものあり。

晋其角著　枯尾華（芭蕉翁終焉記）

（前略）もとよりも心神の散亂なかりけれは、不淨をはゞかりて人々近くも招かれず、折々の詞につかへ侍りける、たゞ壁をへだてゝ命運を祈る聲の耳に入けるにや、心弱きゆめのさめたるはとて

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

また枯野を廻るゆめ心ともせばやと申されしか、是さえ妄執なから風雅の上に死ん身の道を切に思ふ也と悔まれ申し八日の夜の吟也云々

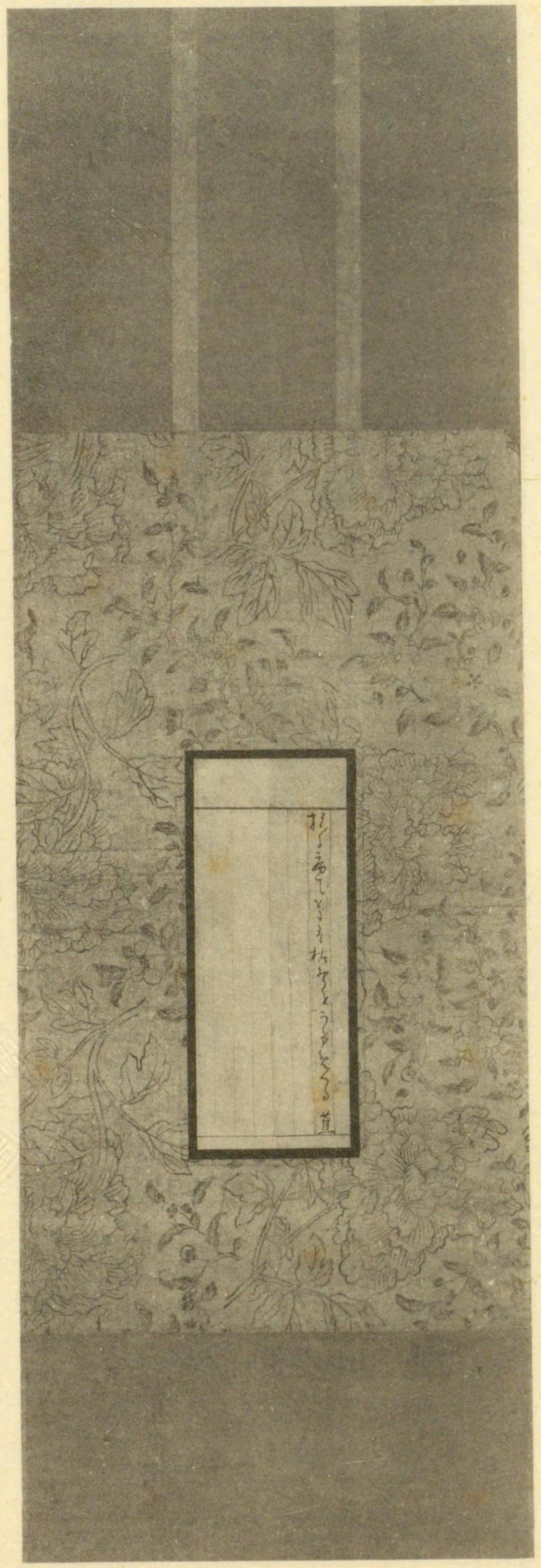
支考著　笈　日　記

八日（前略）此夜深更におよひて介抱に侍りける呑舟をめされて、硯の音から〱と聞えけれはいかなる消息にやとおもふに

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

その後支考をめして「なをかけ廻る夢心といふ句つくりありいつれをかと申されしに、その五文字はいかに承り候事と申せは、いとむつかしき事に侍らんと思ひて、此句なにゝかおとり候事と答へける也云々

と箇樣にありて呑舟をして代筆せしめしともなし、依て玆に揭けて後日の參考に資す。



芭蕉翁　終焉ノ吟

旅に病て夢は枯野をかけめくる　蕉

跋

筆蹟鑑識の困難なことは改めて言ふに及ばぬ事ながら、同じ人でもその年代により、又同じ時でも出來不出來があるから、二三の眞蹟を標準として一概にその眞僞を判斷することは愼まなければならぬ。圓熟時代の出來のよいものを眞蹟とするには何人も異存はなからうが、未熟稚拙である上その書風まで異なつたものにも、時として疑ひもなき眞物の存することを忘れてはならぬ。併しこれはその人一代の筆蹟を汎く經見し來つた者でなくては出來がたい事である。世に芭蕉眞跡集、蕉門短册集などいふ類の書は三四にとゞまらぬが、採擇收載の數も少なく摸寫彫刻の

術も拙く、今日より觀ては滿足しがたいのみならず、その少數の中にさへ隨分いかゞはしい物もまじつて居るやうである。

菊本氏は芭蕉と鄕貫を同じうし、故人を敬慕するあまり、蓑虫庵の舊棲を讓り受けて修補愛護に力を盡し、蕉翁關係の書畫遺品を蒐集して、その藏儲の豊富なことは天下無比と稱される。今回還曆に方りその記念のために、藏架中の尤物を選び寫眞版として同好知己に頒たれる事となつた。さうしてその選擇編纂は俳壇の長老、鑑識の大家として著聞する伊藤松宇翁が、晩年の思出に奮勵努力されたのであるから、この上もない結構な事である。今その稿本を披見するに蓑虫庵の什物、鯉屋の傳來品を中心として、その他の書畫消息等に及んでをる。此の如く多數にして且精確な眞蹟集は全く空前の事で、今後といへども是程完備したものは容易に見られまいと想はれる。就中鯉屋傳來の鹿嶋野晒兩紀行、あつめ句の長卷の如き、一見驚喜感歎に堪へぬものであり、その餘の書讃消息類もそれ〳〵見比べてゆくと、おのづから初中終のけぢめ見え、書風變遷の跡を示すのみならず、その內容にも刊本の誤を正すべきもの、作句の時代を推すべきもの、改作の經路を窺ふべきものなど、種々の方面に啓發される點が多い。寒山書讃の峭勁な文字は晩年の圓熟した優雅な筆意と全く別人のやうに見えるが、三

句色紙の字體と同傾向で續虚栗時代の風とおぼしく、正月の句五枚張の歳旦、元朝心感有の二枚と白字螢の句とは共に延寶、天和頃のものかと想はれる。その他一々例擧することは煩雜であるから省略するが、二月堂の水取の句は私は蝶夢の繪詞傳に「こもりの僧」とあるに左袒してゐたのであるが、この眞蹟には明に「氷の僧」とあるから、その生硬な造語には今以て不甘心ではあるが、作者の意圖はどこまでも尊重せねばならぬ。辭世の句は諸書に「かけ廻る」と記してあるので、「かけまはる」と讀む人の多いのを平素甚だ不愉快に感じてゐたのであるが、これは「かけめぐる」とあつて大に意を强うした。ほんの一通り一見したゞけでも、

以上いふが如き幾多の益を得たのであるから、精密に研究を盡したならその功德は固よりこれに止まらぬであらう。私は菊本氏の壽を祝すると共にこの好記念物を作られた事を心から讚へてやまぬものである。

昭和五年二月

藤井紫影識

（非賣品）

昭和五年四月廿五日印刷
昭和五年四月三十日發行

東京市小石川區關口臺町二十九
編輯人　伊藤松宇

東京市赤坂區青山南町六丁目一一三
發行人　菊本直次郎

東京市芝區愛宕下町三ノ三
印刷所　東京美術印刷社

152
85

152
85

152-85
1200800048167

蕉影餘韻

伊藤松宇編

152
85